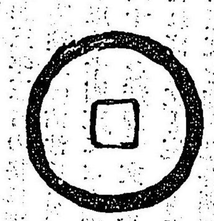
年六月畿内百姓の調徭もと十五文なりしを三十文と改めらる

〔錢定〕貞觀十二年正月交貨の妨多き由を勅せられ同十四年九月錢嫌を沙汰せられて分明に鑄作らしむ

十二年正月廿五日貞觀永寶を鑄らるゝ時の詔に歲序雖レ積、錢文不レ新、今聞、流弊尤甚、交貨多レ妨、襲裏貯而難レ資、杖頭懸而乏レ用云々、又十四年九月廿五日、新鑄貞觀錢、文字破滅、輪郭無レ全、凡在二賣買一、嫌二棄大半一、譴二責鑄錢司一、令二分明鑄作一、この時新錢僅二年を經て鑄錢司に惡錢あり何ぞ世の私鑄濫錢を禁ずるに遑あらんや

私鑄十六年十二月私鑄錢のもの資財沒官の法を定らる類聚三代格　十七年十二月大和國にて往々私鑄のものあり追捕せしむ十八年六月私鑄錢の僧元興寺の德操を中流に處せらる

寛平錢



右寛平二年五月鑄る所なり抄　鑄錢の料物は備後周防長門伊豫筑前豐前肥後等の國々より備へ送れり一時諸國未進ありて完納せざりしかば年料の錢數特に減少して僅に七分の一になりしこともありしなり

〔類聚三代格〕八年三月四日太政官符、應下便割二周防國田租穀一充中鑄錢料雜物直上事の條に參議播磨守源朝臣希奏狀�segment、謹檢二案内一、鑄錢料物者、備後周防長門伊豫筑前豐前肥後等國所二備送一也、其用途支度、前後有レ二、自二弘仁十三年一至二于天長五年一、年別以二三千五百貫一爲レ限、自二天長六年一至二于承和元年一、以二一萬一千貫一爲レ限、定二此數一之日、支度用物、課二所レ出國一、令二交易進一、其後依二銅鉛難レ採、減二省前後數一、以二三千五百貫一、定爲二年料一、須下隨二其程一減中定用途上、而只減二錢數一、不レ省二料物一、然而諸國

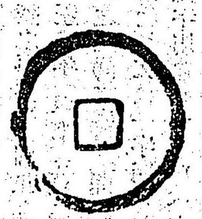
牧宰、動致二闕怠一、猶無二完納一、年料之錢、不レ由二鑄備一、因レ茲年來之貢、不レ過二五口百六貫一、是則縱以二周防一國所レ送之物一、所二鑄造一也、伏望者自レ今以後停二止件七箇國交易一、割二彼國納レ官租穀六千九百九斛九斗二升内一、爲二鑄錢料雜物直一云々、然則雖レ有二損年一、猶可二以足一矣、況無二損年一、寧無二餘剩一乎云々、

此錢昌泰を經て延喜七年に至まで十八ヶ年の間なり

〔行用〕寛平八年灌佛の布施親王大臣五百文より五位百文に至る錢を重んじ給ふこと見べし

〔江家次第〕八日　御灌佛事の頭書に長保五年改レ錢用レ紙、寛平八月布施、法親王大臣五百文、大納言四百文、中納言三百文、參議三位二百文、四位百五十文、五位百文、六位七十文、長保五年以後獻レ紙、一位八帖、二三位四帖、四五位二帖、六位一帖云々、按に〔殿記〕にも亦此例を引て灌佛布施錢の法を載せ云、建仁四年四月八日灌佛事、諸司裝束了、藏人取二御布施錢一、置二佛前一、佛錢其日平旦、内藏寮奉二藏人一、取二入楊筥一、居二高盃一、數二貫文一、次立二臣下置レ錢之机一云々、親王并大臣五百文云々、寛平八年四月八日定法也、

延喜錢



銅錢なり
鉛錢

右延喜七年十一月三日鑄る所にして新錢一文を以て舊錢十文に當て新舊並べ行はる

按に東寺所藏延喜十七年四月の田券に請價直延喜錢二拾捌貫文賣陽成院判官代散位正六位上國覓伊美吉宗とあり是は舊錢に別たんが爲めに延喜錢といひしなるべし又〔西宮記〕延喜十年七月左近陣座にて淵醉ありし時公卿以下寛平錢卅貫文を獻じ裏錢に充て同八月には寛平錢十萬文を裏錢にせし事見えたり舊錢並行を見に足る

凡錢文は一字明なれば妨なく通用せしめらる

〔延喜式〕左京職に凡錢文以二一字明一、皆令二通用一、若有二擇棄者一、隨レ狀科責、又〔大藏式〕に凡鑄錢司所

レ貢錢、雖二文字不レ明、而不レ失二體勢一、無レ妨二行用一者、莫二擇棄一、

年料の銅鉛は備中長門豐前三ヶ國より調進するものにして銅五千八百三十二斤十一兩四分八銖、鉛二千九百十六斤一兩二分四銖なり是を承和に比すれば僅に十分の一なり錢數の少きこと意ふべし

〔主計式〕凡鑄錢年料銅者、備中長門豐前等國、每年採二送鑄錢司一、卽以二司返抄一、勘二會調庸抄帳一、又〔主稅式〕凡鑄錢年料銅鉛者、備中國銅八百斤、長門國銅三千五百十六斤十兩二分四銖、鉛千五百斤十兩二分四銖、豐前國銅二千五百十六斤一兩二分四銖、鉛千四百斤、每年採送、卽以二鑄錢司收文一進レ官、下二所司一令レ勘二會稅帳一、

其採銅鉛料は一斤ごとに稻三束九把六分五毛七厘に充つ〔主稅式〕凡備中長門豐前等國換二銅鉛一料、稻斤別充三束九把六分五毛七厘云々、今按に毛厘まさに口すべきか、凡鑄錢司進むる所の年料の錢は十年ごとに惣計あり〔主計式〕凡鑄錢司所レ進年料錢、隨二所進數一、且附二綱丁一、收二收文一、至二十年一、終令レ進二惣帳一、勘會已訖、乃與二返抄一、此時も舊錢を鑄壞りて新錢になしたることもありと聞ゆ〔延喜雜式〕錢司、奪錢路次國、差加二勇幹健兒一、遞送、若致二亡失一者、令二當國國司塡納一、天慶三年十一月周防國の鑄錢司火災に罹る十一月七日、周防國飛驛言、鑄錢司爲レ賊被レ燒之由一云々、此錢延長承平天慶天曆を經て天德二年に至て二十五年の間通用せり〔泉蹕〕天明二年二月下旬攝津川邊郡東長洲村ニテ此錢數枚掘出セリ銅錢多シテ鉛錢少シ

〔行用〕左右京五畿內の國の調錢は時に隨て增減あり他國の百姓畿內に逃住するものは一丁輸錢二百五十文

〔主計式〕凡左右京五畿內國、調一丁輸レ錢、隨レ時增減云々、其外國百姓逃亡、居二住畿內一、一丁輸レ錢二百五十文、庸一百三十五文云々、これは餘國は調庸錢の多きゆゑに畿內に逃れ來たものなるべし

〔估價〕天慶二年以來米一升十七八文

〔本朝世紀〕天慶五年六月十四日丙寅の條に近來疾疫之事多聽二閭里一、餓死之輩、已滿二街衢一、自二去天慶二年一以來春夏之間米直升別十七八文頻年來之飢餓之盛見聞之者無レ不二愁歎一、

〔錢定〕錢文は一字明なれば妨なく通用せしめらる又文字明ならずといへども體勢を失はざるものは、嫌ひ擇むことをなからしむ

〔延喜式〕大藏省の下に凡鑄錢司所レ貢錢、雖二文字不レ明、而不レ失二體勢一、無レ妨二行用一者、莫二擇棄一、又左京職の下に凡錢文以二一字明一、皆令二通用一、若有二擇棄一者、隨レ狀科責、

〔傳播〕此錢も唐の時すでに彼土へ渡りしこと、聞ゆ〔泉志〕錢譜傳載曰、倭國在二東海中一、正朝一同二中華一、號用レ錢文曰二延喜通寶一云々

〔私鑄〕此時諸國惡僧ども竊鑄すること少からず

〔本朝文粹〕延喜十四年四月三善清行が封事の內に請禁諸國僧徒濫惡事の條に家善妻子、口啖二腥膻一、形似二沙門一、心如二屠兒一、況其尤甚者、聚爲二群盜一、竊鑄二錢貨一、不レ畏二天刑一、不レ願二佛誅一云々、

乾元錢

右天德二年三月二十五日改錢の詔書奏聞あり〔九曆記〕生朝臣作レ之、錢文は維時卿これを勘進す二十八日新錢鑄進の數を免許せらる并に鉛錢をも鑄らるべき歟との事也〔九曆記〕廿八日、可レ定二新錢鑄進數一、并鉛錢宜可レ中者、而依二公卿乏一レ參、不レ能二定奏一云々、四月八日圖書允阿保懷之をして錢文を書せしむ

〔九曆記〕四月八日、御灌佛了後、著二陣座一、召二因幡介長連廣兼圖書允阿保懷之一、令レ書二錢文一、奏聞、當時能レ書者道風朝臣文正等也、道風稱二目暗由一、文正觸レ穢、仍定二件兩人一奏聞、以二懷之一爲レ勝と見え〔日本紀略〕いふ所亦同じ

十二日鑄錢司に改錢の官符を給せらる此錢も新舊並べ行はれしと聞ゆ〔九曆記〕三年四月八日、灌佛布施錢、依二寬平例一、進二古錢一、是中將說也、三年四月十七日新錢を諸社に奉る〔九曆記〕按に〔拾芥抄〕件錢至二應和三年七月五日一、さすれば僅六年の間通用ありし也

應和鑄錢の事下に記す又是より二十七年の後永觀二年までも此錢通用ありし事下の傳播の條に見え又二百年餘を經て承曆永保頃までも此錢を用ひしや〔朝野群載〕應德三年穀倉院率分の納物に承曆四年調庸、乾元錢率分四十八貫文、年料百八十八貫、文永保元二三并三箇年、と註せり

〔傳播〕宋人の史書に我永觀二年の頃天德二年より三十三年の後なり尙此錢を用ひし事をいへり

〔泉志〕に國朝會要云、大平興國九年、日本國僧奝

然等浮レ海而至云、其國用ニ銅錢一、文曰ニ乾文寶一、とあり彼太平興國九年は卽雍熙元年にして我永觀二年にあたる乾文とは傳聞の誤歟又は後人傳寫の誤なるべし〔西清古鑑〕錢錄に云乾文寶、右日本國乾文錢、宋史雍熙元年、日本國僧奝然與ニ其徒五六人一、泛レ海而至、獻ニ銅器十餘件幷國圖職貢今王年代記各一卷一、奝然善ニ隸書一云、其國交易用ニ銅錢一、文曰ニ乾文大寶一、按今所レ收錢缺ニ大字一、如ニ洪氏圖一亦隸書、與ニ前四種一同、といへりおもふに是は錢志の圖によりて後人の倣造せしものなるべし

附〔物價〕凡物價は錢を以て準的とすべしといへども延喜十四年諸國の物價を定られし時は絹布鐵鍬を稻束に直せらる〔政事要略〕延長五年祿物の價法幷驛馬直法、海陸西路の漕運駄賃船賃を定られし時亦同じ〔主稅式〕是蓋古代調庸交易の遺制に因といへども亦當時錢數の寡く偏く諸國に播布に至らざるを見べし

又附〔錢話故事〕天慶八年无空律師なるもの一萬錢を房內天井の上に置たるとて遷化の後枇杷左大臣仲平の夢に見えたりし事あり

〔扶桑略記〕天慶八年乙巳九月五日、左大臣藤原朝臣仲平薨、左大臣平生時與ニ律師无空一有ニ芳蘭契一、律師念佛爲レ業、衣食常乏、自謂我貧亡、後定煩ニ遺弟一、竊以ニ萬錢一置ニ于房內天井之上一、欲レ支ニ葬斂一也、律師臥レ病、言不レ及レ錢、忽以卽レ世、枇杷左大臣夢、无空律師衣裳垢穢、形容枯槁、來相謂曰、我以レ有ニ伏藏錢貨一、不レ度受ニ蛇身一、願以ニ其錢一可ニ書ニ寫法華經一、大臣自到ニ舊房一、搜ニ得萬錢一、錢中有ニ一小蛇一、見レ人逃去、大臣忽令レ書ニ寫一供一養法華經一部一畢、他日夢、律師法服鮮明、顏色悅澤、持ニ香爐一來、謂ニ大臣一曰、吾以ニ相府之恩一、得レ免ニ邪道一、今詣ニ極樂一、語畢西向飛去焉、以上慶氏記、

以上世にこれを皇朝十二錢といふ太平と開基を除く俱に國史に載するところ昭々として寬平錢は史に見えず其錢現存せるもの也是より後鑄錢の事史傳に見えず或は云此際罕に鑄るものあり或は云みな異朝の物なりと次卷に其極概を分疏す併せ攷べし其錢現存なせるもの也

予嘗て竊にこれを論ず史に據るに萬年、承和、長年、饒益、貞觀、延喜の七錢（六カ）その新鑄の度ごとに必ず新錢一を以舊錢十に當といへり他の五錢は准知すべし然るときは天下の衆民その有する所の錢財十分が九を減じたるに均し先輩云今迄萬貫を貯ふるものは九千貫を失ひ千錢にて買受たるものは百錢にて賣べきやたとへ嚴制あるとも行はるべきこともおもはずといへり錢貨考下損すれば上益すといふことあり其利果して何れに歸せしにや加之舊錢を壞て新錢を鑄直せしのみならず承和に舊錢既に盡無ニ銅可レ鑄といひ貞觀之年には年料の銅三千斤の數を足して三ヶ年減せざるものあらば眞五位を授られんといふに至る今饒益以下の六錢を見るに製作尤宜からず其料銅の乏しきを知る堂々たる天朝國計何ぞ此に至るや淸人錢貨を論じていへることあり云觀ニ其輕重厚薄一、而究ニ其法之行不行一、觀ニ其良窳精麤一、而知ニ其政之擧不擧一、千古錢幣之利弊、一覽具觀といへり知言なる哉

是より後鑄錢の事、

○下文恐佚脫

錢錄卷第一終

錢錄卷第二（原本）

按に天德以後に官錢のこと史書に見るところなし然れども應和の論奏、長保の鑄錢司、建武の改錢より明應の新撰料足、永正の日本錢地錢、永祿の新錢のごときは必なしといふべからず豈に私鑄と唐錢と其間に雜行せしや今文獻の徵すべきなし聊管窺の數則を左に條擧して列代の圜法を覽んとす

予嘗て竊に以爲らく天すでに斯民を降すときは其利用厚生の道至らざることなし世或はいふ中古の世錢貨之しと是然るにあらず當時諸國の分錢段錢の類その用途の少からざるを見べし世又いふ中世の時は諸物の價賤しと是亦然るにあらず都鄙の別ロロつゝありといへども物價もと古今異なるなし世の人或は今時三貨時價の低昂に慣て錢貨一品行用の制を熟察せざるあり玄かく錢貨一品行用なれども其數寡きときは米と布帛と又その間に雜行せざることを得ず是自然の勢なり慶長以來三貨の並び盛なると同日の論にあらず物もとより一偏を執て論ずべからず徒に慶長以前の錢貨と物價とを取て今日に比較するがごときは其本を測らずして其末を齊するの論なり故に今雜を厭はず錢貨の世に乏しからざるの徵を擧げて併せて物價の賤からざるに及ぶのみ

西野古海按〔東鑑纂補〕延應二年十一月廿三日壬子、爲清左衞門尉奉行、洛中未作舗屋等事云々、可被召舗屋用途也、假令五十町可召錢五十貫文之由被定、但地頭得分也、不可成土民煩云々トアリ考ルニ四十八箇所ノ相用途凡四百八十貫文ニシテ田地四百八十町ノ地頭得分ト知ラルベシ（原本付箋）

應和三年七月廿八日改錢論奏あり

〔禁祕抄〕應和三年七月、公卿請停並行舊錢用新錢論奏、書聞字返給云々、〔西宮記〕に應和三年七月廿八日、民部卿令延光奏、公卿請停舊錢用新錦論奏、狀中云、以來十月爲禁止之始者、書聞下給、一改錢事、大臣奉勅、仰博士、令勘進錢文、奏言訖擇吉日、召能書者於陣頭、令書其文字、奏聞、給作物所、彫言訖、制官符、下給鑄錢司了、其後所鑄進新錢一千貫文許也、解文奏聞之後、先被奉神社佛寺、各有其例、次勘給諸司所々等、次又ロ定御ロ料并一院三宮親王如更衣女官等給法了、次定吉日、下宣旨於大藏省、當日大藏省運置件錢於南殿前櫻樹東頭、任見參、召給之、親王公卿從陣座一々進出、就膝突、取手鑄錢一貫文、一拜退、出宣仁門外、令給僕從、還着本座、次諸大夫入自日花門、隨召就膝突、取錢一拜退出、其數各有例數、件事只有其事之時、大略覺悟許也、更不可爲提說云々

永觀二年十一月六日錢定あり

〔日本紀略〕永觀二年十一月六日、近來世間錢嫌尤甚、適所取錢號二寸半銅錢厚直也、廿八日甲戌、被定嫌破錢、

長保四年六月十四日周防國鑄錢司の事を沙汰せらる

〔權記〕長保四年六月十四日戊寅、參左府、奉周防國申錢事鑄錢司申錢代事云々、

永延元年十一月二日上下を制止して錢貨を用ひざらしめらる

〔日本紀略〕永延元年十一月二日辛酉、仰檢非違使、加制止、上下人々不用錢貨事、〔百錬鈔〕仰有司、制上下不用錢貨事とあり〔日本紀略〕元年十一月廿七日丙戌、諸卿定申、於十五大寺七箇日間、每寺八十口僧可新錢可用之由、又有驗寺々如此云々、同二年七月廿三日丁未、仁王會大極殿及十二堂廻廊立高座、請僧三百六十口、布施口別信乃布三段、錢貨不用云々、

寛治八年八月駿河國布一段を米一石に宛

〔中右記〕寛治八年八月一日、先參殿下、內覽駿河國解云々、駿河國狀云、以白布一段宛米一石、辨濟條云々、

長承元年三月德長壽院供養の布施に千貫を砂金千兩と並用ひらる

〔源平盛衰記〕德長壽院の導師の事の條に御布施には千石千貫沙金千兩〔長門本平家物語〕御布施は千石千疋金千兩按に是より前にも布施に幾匹を用ひられし事往々見えたれど金錢並用らるゝ事は此頃より專ら行はれしにや

久安二年六月綾紗絹代米

〔東寺文書〕

檢納　四禪師　任料事

合肆拾捌石捌斗

染唐綾參端　代十五石端別五石

白唐綾壹端　代三石六斗

顯文紗參端　代十石六斗端別三石五斗三升

唐絹拾捌端　代十九石三斗端別一石九升

久安二年六月十七日

久安三年四月南鎌銀壹挺を錢三貫文に換ふ唐綾一反代錢壹貫五百文

〔東寺文書〕

進上

銀南鉄貳　直六百匹

上品唐綾參段　内一段欵冬一段茶田一段

已上物家綾各百五十疋　下略

久安三年四月廿二日　僧　遍　嚴

治承三年七月廿七日渡唐錢を停止せらる

〔玉海〕治承三年七月廿七日癸未、風病殊發動、基廣注申錢賣買之間之事、近代渡唐之錢、於此朝恣賣買云々、私鑄錢者處二八虐、縱私雖不鑄、所行者同私鑄錢、尤可被停止事歟、基廣勘注之旨、叶愚存了云々、按に百錬鈔に治承三年六月、近日天下上下病惱、號之錢病、とあり此頃錢の事にて仔細ありしと聞ゆ

建久三年十二月廿日、運上相摸國吉田庄の年貢の代八丈絹一疋代廿文布紺二反代二文

〔東鑑〕建久三年十二月廿日、運上相摸國吉田御庄御年貢送文事、染衣五切代百文各廿文、上品八丈絹六疋代百廿文各廿文、納布九反内上二反中七反代口、藍摺准布卅反代六十文、紺布二反無文代四文、率歟二疋代四十二文、持者七人代五十二文、二文、右付夫領助弘運上如件、

建久四年七月四日宋朝の錢貨を停止せらる

〔法曹至要抄〕錢貨出舉、以米辨時一倍利事、建久四年七月四日宣旨云、應自今以後永從停止宋朝錢貨事、右左大臣宣奉勅云々、自非止錢貨之交關者、爭得定直法於和市哉、仍檢非違使幷京職、自今以後永從停止者、同年十二月廿九日宣旨云、應錢貨出舉以米辨償利事、右得記錄所今月廿三日勘狀偏、錢直法任去年八月六日宣旨狀、二貫文別以米一斛爲正物、於利分者、依弘仁十年五月三日格、每六十日取利、不得過八分之利、雖過四百八十日、不可過一倍者歟、左大臣宣奉勅、宜依勘申者、便宜承知、依宣行之、案之舉錢之利、雖爲半倍、停止錢貨、以米致辨者、以錢一貫充米一石、每六十日取利、再滿四十八日者、可爲一倍之利矣、

同年十二月廿三日錢貨の出舉錢一貫文を以米一石に充て正物とす　見上

文暦二年六月銅錢三百卅貫文を以て新御堂の洪鐘を鑄らる

〔東鑑〕文暦二年六月廿九日、新御堂安鎮法、辨僧正定豪修之、又被鑄直洪鐘、先日以銅錢三百貫文鑄損之、今加卅餘貫、成功、殊勝云々、

寛喜二年四月廿一日の評定に盜賊の贓物の事は錢百文二百文以下の輕罪は一倍を以て贖はしめ三百文以上の重科は一身の科に行はると定めらる

〔侍所沙汰篇〕に載す相摸守越前守が評定なり按に天福元年四月廿二日の評定もこれに同じ文暦二年正月廿七日の評定には三百文以下は一倍を以て辨償し三百文此上五百文以下は科料錢二貫文に行ひ六百文以上の重科は一身の咎たるべしと定めらる

寛喜二年六月廿四日錢一貫文を以米一石に充しめらる〔百錬鈔寛喜二年六月廿四日、以錢一貫文、可被直米一石之由被仰下云々〕

同年十二月廿三日錢貨の出卒錢壹貫を以米一石に充て正物とす　見上

延應元年四月切錢を制止せらる〔侍所沙汰篇〕延應元年四月十三日の下知狀に錢切事同伺搦可被下進關東とあり下の弘長三年の條併て見べし

仁治二年二月廿九日米一石代三百文に充らる〔現存古文書〕に載する所左のごとし

三月八日御遠忌御佛事用途公文所沙汰

合

一佛布施壹裹　准布參反　代錢百文

一壇敷白布壹端　代錢百文

一御諷誦壹裹　准布參反　代百文

一御布施

導師　無御堂勤　被物壹重代壹貫文　裹物一准布六反代貳百文

請僧十一人　人別裹物二代准布六反代貳貫貳百文

承仕三人　人別准布貳反代貳百文

下部四人　人別准布壹反代百二十文

御佛供僧膳料

御佛供壹斗　叙宣旨斗定代參拾文

導師分壹石　代三百文

請僧十一人分　人別五斗代壹貫六百五十文

承仕三人　人別壹斗代九十文

下部四人　人別五升代六十文

已上陸貫佰伍拾陸文

右御布施以下僧膳料不レ定如レ件

仁治二年二月廿九日

建長四年飢饉錢百文に米一升〔異本年代記〕後柏原院文龜年中のもの建長四大饉米升百錢

建長五年十月十一日利賣の直法を定めらる炭一駄代百文、薪三十束一把別百文、萱木八束代五十文、藁八束代五十文、糠一駄代五十文、俵一文、〔東鑑〕件雜物、近年高直過レ法、可下知人者、

正嘉三年飢饉錢百文に米小升三升

〔異本年代記〕正嘉二、六月寒冷如レ例、二三月仍五穀不熟、天下一同、仍次年大飢饉、餓死者不レ知二其數、百文直僅小升三升也云々、

正元三年の頃諸國段錢の事聞えたり詳に附錄段錢の部に記、正元三年四月、神輿來ノ獻、付二諸國用途一仲資法師奉行、出す實衡卿記井管見

文應元年十二月京上の大番設の用途段錢三百文を改らる〔東鑑〕全文附錄段錢の部に載す

弘長三年九月十日切錢を停止せらる

〔東鑑〕弘長三年九月十日の條に切錢事、有二其沙汰一、近年多出來之由、有二其聞一、自今以後者、用二切錢一事、可レ停二止之一、存二此旨一可レ令二下知一之由、被レ仰二左典厩等一云々、

弘安元年七月甲斐國身延山中鹽一升の直錢百文なり

〔日蓮御書〕弘安元年九月十九日の書に鹽一駄ハジカミ送給候云々七月ナンドハ鹽一升ヲ錢百、鹽五合麥一斗ニカヘ候シカバ今ハ全體シホナシ何ヲ以テカカウベキミソモタエヌ小兒ノ乳ヲ忍ガ如シ○因に載す同二年八月八日の書に鵝目一貫鹽一駄ワラヒ蹲鴟一俵ハジカミ少々使者ヲ以テ送リ給畢アツキニハ水ヲ財トスサムキニハ火ヲ財トス飢渴ニハ米ヲ財トス武士ハ兵仗ヲ財トス武藏下總ニハ石ヲ財トス此山ニハ家ノイモ海ノシホヲ財トシ候ゾ云々財の論面白きゆゑ此に附贅す

鎌倉家の中葉に逮んで武家の采邑を稱するに幾貫文を以てす是もと分錢より起りしことにして後世これを貫高といふなり

詳に附錄貫高分錢の部に出て〔太平記〕相摸守近國ノ大庄八ケ所自筆ニ補任ヲ書テ青砥左衞門ニゾ給ヒタリケル青砥左衞門補任ヲ啓キ見テ大ニ驚キテ是ハ今何事ニ三萬貫ニ及ブ大庄給ソ候ヤラント問云々この事は附錄貫高の部に詳にす因にいふ〔太平記〕青砥が小傳を載せて飢タル乞食疲獘タル訴訟人ナドヲ見テハ分ニ隨ヒ品ニ依テ米錢絹布ノ類ヲ與ヘケレバ云々又德宗領ニ沙汰出來テ地下ノ公文ト相摸守ト詐陳ニ番事アリ云々公文不慮ニ得利シテ所帶安堵シタリケルガ其恩ヲ報ゼントヤ思ヒケン錢三百貫ヲ俵ニ裏テ後ノ山ヨリ潛ニ青砥左衞門ガ坪ノ内ヘゾ入レタリケル云々又或時夜ニ入リ出仕シケルニイツモ燧袋ニ入テ持タル錢ヲ十文取ハヅシテ滑川ヘゾ落シ入タリケルヲ云々錢五十文ヲ以テ續松ヲ十把買テ則是ヲ燃シテ遂ニ十文ノ錢ヲ求得タリケル云々これは此時の錢三百貫の多きこと又尋常錢を腰にするの風俗と又續松の直錢を見んがために此に附贅す其錢はみな渡唐錢なるや否

再按に〔島津本東鑑〕に仁治三年九月十一日、洛中警衞事及嚴密沙汰可レ懸二篝於辻々一、續松料物用途、毎年一所別千匹被レ付レ之、とあり是又松明料を併せ考べし

正應元年錢百文に米七升

〔東寺現存文書〕

安藝國新勅旨田御年貢事

合三十石内寅にて

能米　拾漆石七斗伍升

大豆　參石五斗

小豆　貳石四斗三升六合六勺

參石伍斗　代錢伍貫文

又貳貫百四十文　代米壹石五斗九升八合

右正應元年別取納如レ件

正安四年六月二十八日錢百文に米九升づゝなり

〔東寺現存文書〕

去年御年貢送文

國定　參石八斗六升五合一勺二才

正米　參石一斗四升二合四勺

同御年貢九斗四升　代錢一貫四十四文百別九升宛也

正安四年六月十九日　公文在判

正和四年十二月百文に米壹升五合

〔東寺文書〕正和四年十二月十三日若狹國太郎庄米支配狀の中に

二百九十文代米三斗六合百文一斗五合宛也　三上人門差

元享元年夏大旱錢三百文に粟壹斗

〔太平記〕飢人窮民施行事、元享元年の夏大旱地を括して旬服の外百里の間空しく赤土のみ有て青苗なし餓莩野に滿て飢人地に僵る此年錢三百文を以て粟壹斗を買君はるかに天下の飢饉を聞召て朕不德あらば天地壹人を罪すべし黎民何の咎有でか此災に遭へる云々

元享二年伊勢國にて酒一升代錢二十三文

安東郡〔專當沙汰文〕全文元德元年の下に出す

西野古海按

〔玉石雜志〕元弘三年閏二月二十七日後醍醐天皇名和湊へ漕寄ラル云々長年船上へ粮米ヲ上ルナリ云々一荷持運タラン者ニハ鳥目五百文宛トラスベシト觸タリケレバ云々一日ノ間ニ粮米五千餘石ヲ運ケル此頃ノ升ハ南都興福寺東金堂元享二年ノ升今京升八合六勺三撮ヲ容ルト大抵同ジカルベケレバ五千餘石ハ今ノ四千三百十五石餘ニ當ル四斗ヲ俵トシテ一萬七百八十七俵餘ナリ云々

元享三年分錢の事聞えたり上野國〔長樂寺文書〕詳に附錄貫高分錢の部に載レ之

嘉曆二年伊勢國にて酒一升代錢十九文今文下の元德元年に見ゆ

元德元年十一月伊勢國酒酒一升代錢口文薪一束代二十文幷魚の代

元德元年十一月住する所の安東郡〔專當沙汰文〕左のごとし

一滿熟歲宮中奉納之時清酒支配之次第

清酒五升御祓方へ進レ之　清酒一斗一升三合直

會方へ進レ之　清酒一升五合號二瓶子一酒殿へ進レ之

清酒一升五合號二瓶子一御器御倉へ進レ之

已上宮中の分壹斗九升三合也

私記、宮中酒升依レ爲二大器一、近代以二代錢一、全次郎荷用二下一行之一奉レ成事嘉曆二年ニハ三百七十二文下二行之一元享二年ハ四百五十八文下二行之一、又彼全次郎荷用二大餅一枚志レ之、以二代錢一沙汰者、爲二專當一ニハ莫大之利潤也可レ得二其心一之者也以レ酒沙汰之時ハ酒屋ノ升定二斗五升ノ斗入也

一丁部等巡廻每年一人宛宮役夫トテ專當神宮ヘ參之時召二具之一宮中奉納ノ間者仕レ之云々、但近年ハ夫役料ニ代錢百文出之間、專當請取之神宮ニテ雇人也

一宮中奉納之時安濃東西郡正權專當等寄合直會祓料肴魚以下之物等買レ之大意日記事

直會料生鯛三雙勢二尺一二寸計代錢百五六十計歟

祓料大魚一雙若無二大魚一者ワラサ二雙計歟代錢百四五十計歟

名吉十五雙計方々ノ料代錢三百計歟高市之定　酢二升　代錢十文計歟

薪一束代廿文計歟酒ワカサム料ナリ　蕚二把　代四文歟

松一束代廿文計歟續松料ノ料ナリ　箸百膳計眞菜箱四五拾可レ用二急之一

彼是都合代錢六百四五十ノ用意不レ可レ有二不足一、

按に奉納の淸酒宮中の酒升大きなるゆゑ全次郎といふもの代錢にて請負切りにゑたると聞ゆ又夫役も錢請負にて神宮にて雇立しなり此時すでに錢次第にて何事も用便なりしと見ゆ

鯛酢蕚の代今時とても邊鄙にては是程のものなるべし然れば此時分錢通用意外に自由なりしなり外國の錢ばかりには非るべし

西野古海按〔武家評林系圖〕高時領地二十八萬七千貫當代知行ニシテ百四十三萬五千石ニ當ルト見ユルハ當代ノ五石ヲ壹貫文ト積シナリ今考ルニ此際田租凡一段三百六十歩ニ錢三百文ヲ以テ通價トス然レバ壹貫文ハ三段百十歩許ノ田地ニ當ル

西野古海按足利ノ時代民ニ賦スル法租調庸ハ禁裏御領及ビ仙洞女院宮方ノ領ニノミ殘テ其餘ハ全ク守護職ニ納ル守護職ノ收ト農民ノ得分トハ國ニ隨テ差等アレバ一定シ難シト雖モ田地三町三段ノ年貢錢十貫文ニ當ル地アリ長樂寺文書ニ見ユ又粗四十石錢十貫文ニ當ル地アリ神風抄ニ見ユ共ニ延文年中ノ定ナリ然ルトキハ百貫ノ地ニ粗四石ヲ收ム可シ是ヲ三町三段ノ法ニ準ズルニ一般ノ粗壹石貳斗餘ニ準ズ一歩ノ粗三合三勺餘ニ當ル下々田ナルベシ又上田ハ一段ニ粗三石六斗ヨリ四石ニ及ブ錢ニ準折スレバ九百文ヨリ壹貫文ニ當ルト知ルベシ此田得ヲ五十分ニシテ一分ヲ割テ武家役ト名付京ニ運上セシト也譬バ百貫文ノ地頭ヨリ二貫文ヲ割テ武家役ト號ク將軍ニ收ル也鎌倉ノ定ハ守護ノ給分段別五升ニシテ權門トアルハ公田府田神領佛寺領等ヲ該載タリ然シテ粟三千四百三十六石五斗今ノ三千二百九十ヲ九石〇四升ナリヲ

守護給トナス（是弘安ノ尊氏公ノ時ニ定ナリ）大友式部丞氏康（頼康五代ノ孫）相襲テ守護職タルトキハ六千八百七十三町ノ田ヲ錢ニテ平均シテ凡五萬七千百十四貫六百三十文ニ當ルトナリ是ヲ五十分ニ割テ一分ハ千百四十二貫二百九十二文六分ニ準ズ（粟ニテハ四千五百五十九石壹斗七升〇四勺ニ當ル鎌倉ノ時守護給ニ增コト千百三十二石六斗七升餘也）即運上シテ將軍家ノ府ニ納メ其次ニ公家神佛寺ノ領家ニ濟辨シ其餘ハ守護ノ有ト爲スト云ヘバ（圓田帳ニ見ユ）足利家ノ賦法ハ鎌倉ヨリ酷カリシコト推量ルベシ

建武元年年三月二十八日改錢乾坤通寶を鑄らる

〔建武記〕改錢事、建武元年三月二十八日有ニ御沙汰ニ云々、詔居ニ聖人之大寶ニ、理究ニ變通ニ、天地之洪規事ニ沿革ニ、祭時制法、爰拘ニ一途ニ、國家有レ錢其來尚矣、周武闢レ基、九府之圜法肇興、漢文隆レ業、四銖之形製更彰、金鐵之品、龜龍之類、象レ物雖レ區、同歸ニ節用ニ、本朝垂レ範、上世以來、屢改ニ下文ニ、載傳ニ簡牘ニ、所レ謂自ニ天平寶字ニ、至ニ于天德ニ、十有餘度、綿歷最詳、降及ニ近古ニ、求ニ之外國ニ、擅敷ニ俗間ニ、宮法如レ忘頗違ニ彝典ニ、復枉ニ政令ニ、今以ニ新化ニ、爲除ニ舊弊ニ、始造ニ官錢ニ、須下頒ニ天下ニ、濟レ世便レ民、孰謂不レ爾、仍文曰ニ乾坤通寶ニ、銅楮並用ニ、交易莫レ滯ニ仁義所レ原ニ、定樂ニ厥成ニ、告以ニ宸衷ニ、若レ豁ニ天理ニ、主者施行、〇按に銅楮並用とあれば此等楮幣もありしと聞ゆ太平記に帝重祚ありて國用足らざるによりて我國昔より未だ用ひざる紙錢を作るといふとも見えたり

建武元年東寺塔供養記〕佛布施二裏代貳貫伍百文、壇敷絹一疋代壹貫六百文、葩可納花筥三十枚代壹貫八百文、造花五本五瓶料代三百文、同盛花閼伽器料代三百文、都合代錢六貫五百文、除ニ米代一定、

康永三年七月常陸國籾壹石代一貫六百四十九文

常陸國大寶八幡宮所藏〔文書〕御作田籾三石代錢四貫九百四十八文〇全文附錄分錢の部に載す此石高貴し疑べし

康曆二年十二月近江國朽木谷年貢米一石代錢八百三十三文秋地子一石代五百文（朽木家文書〕全文分錢の部に載レ之）

永德三年十二月近江國朽木谷年貢米一石代錢八百三十三文又八百二十六文秋地子五百文（同上）

永享二年八月錢壹貫にて灰吹銀五拾匁宛

〔鈴鹿家日記〕永享二年八月十日の記に兼倶十八神

道主計ニ御引渡云々十三日ナラミヤゲ御本所へ上ルサン用壹人前灰吹七拾八匁九分ヅヽ、鳥目四貫ヅヽ畠中天足兩人江カン用仕錢壹貫ニ付ハヒフキ五拾匁ヅヽ、百七拾八匁九分ヅヽ、時政兩人百七拾八匁九分ヅヽ、隆則殿重光殿相渡ス

永享十年十二月錢五百文を以銀壹兩目に換ふ壹兩目に錢五百文〔薩戒記〕

文安元年十一月若狹國米一石に錢九百文より八百五十文

〔東寺文書〕

注進申

東寺御領若狹國太良庄御年貢米和市事

地頭御方　石別九百文宛

領家御方　石別八百五十文宛

文安元年十一月　日

文安四年五月筆墨の代

〔東寺文書〕

三拾文　鎮守宮仕部屋紙代　十文　筆代

十文　墨代　貳貫文　御事初大工行物

文安四年五月　日　法橋祐算（花押）

享德三年九月畠山彌三郎家督の御禮五百貫文進上

〔康富記〕享德三年九月廿二日畠山彌三郎家督相續事治定被ニ出仕一申ハ之上下スワウハカマ也騎馬十餘騎御馬太刀五百貫文進上云々按に〔蔭涼軒日錄〕寛正六年十月五日大和國越智彈正御禮五千疋御鐙一領とあり出時五千疋の式と見ゆ〔宣胤卿記〕永正元年五月六日自ニ越前與次郎男一上ニ朝倉彈正左衛門尉貞景兩官一御禮禁裏御太刀幷三千疋職事伊長五百疋

康正元年七月冷泉院町夏地子八別八百六十五文宛

〔康富記〕享德四年七月三日冷泉院町夏地子內法華堂分貳貫五十九疋從定使長崎許沙ニ汰之一とあり夾注に八別八百六十五文宛也隼人一分三蔕外記史二分以上三分合之

康正二年造ニ內裏一御錢幷國役惣合三千五百五十四貫八十三文（詳かに御錢の初に載す）

康正三年五月瓦師一人百文河原物日養一人百文

長祿四年四月五日御小袖一重三貫文（又二貫百文）

小高檀紙一束七百文段子一反三貫七百文杉原一束四百文（又五百文）〔蔭涼軒日錄〕慈照院殿御代長祿四年五

月廿四日當軒御成御齋寶幡寺住持依ニ不例一退院御免拜新命永方西堂伺レ之仁和寺保安寺三月二日御成御小袖三重九貫文小高檀紙一束七百文杉原十帖四百文以上十貫百文南禪寺積善院御成卯月十三日御小袖三重七貫五百文（按に四月も御小袖を用ひし也）御盃一枚十三貫文段子壹端三貫七百文杉原二束一貫文以上二十五貫二百文當院請取狀奉レ懸ニ于御目一也

寛正二年正月政所評定始一獻料十貫文內寄合爲ニ祝儀一各錢貳貫文宛持寄

文正元年十一月大嘗會面付幷隅綾の代（齋藤親基日記）（一月改正大嘗會）

文明七年四月二十貫文を以て砂金一裹の代に充らる（小槻記）文明七年四月十九日將軍義尙御一級令ニ正四位下給一宣下一云々內記恩祿沙金一裹代二千疋云々副使千疋被レ下云々（按に同九年正月義尙卿御一級叙ニ正三位一給ふとき祿物にも砂金一裹代二千疋云々とあり）

文明十年十一月南都米一石代錢一貫二百二十七文（多門院日記）文明十年十一月十三日自ニ別所殿一之書狀に云月昔不言口旱水損三石五斗嶋庄分沙ニ汰之一其內今度始而四段小之分河成ニナル間其分ヲ引候間二石二斗七升五合渡シ是ヲ當所之市ニテ賣立現錢二貫七百九十三文上由申ニ上之一八合升

文明十一年の頃錢通用の切金も交じへ行はる（親元日記）（中掃大）政所賦銘引付文明十年己亥

一澤井與四郎通久　文明十一四四

時岡民部丞ニ預置四拾兩料足八十貫事且令ニ返辨一彼子息新右衞門允沙汰云々

文明年間諸藝才賣買代物

（近年諸藝才賣買代物事）と題せん古帳一冊紙數八九葉のもの知友蜷川氏に所藏せり是は文明年間その祖新左衞門の時の物なり今その中に就て代錢の付きたる品々を抄出す按に（庭訓往來）に藝才七座の店とありて古注に七座は魚米器鹽刀衣藥之由也とあり（北條五代記）に松原大明神の前通町十町ほどは毎日市立て七座の棚をかまへ與力するもの手買ふりうりとて百のうり物等千のかひ物有レ之とみえ又三浦氏の猩々舞といふ冊子に關東諸國里々において六齋市を立る市に七座の店といふは一には絹の座二には炭の座三には米の座四には檜物の座五には千朶積の事なり六には相物座とて魚鹽を賣也紙の座ともあり七には馬あきなふ是七座也其

分市には手買振賣百賣千買とて百の賣物に千の買物有りて七座に與力する其品おほし云々といへり店は或は棚ともいふなり永祿十二年織田家の文書に見せ棚と見え天正二年武田家の文書に町棚と見え近世寛文之令にも棚とあるあり千朶積は舟積の事なるか（康富記）に諸藥商賣千駄櫃といふことあり相物座は今もいさむもの〻語に殘れり惣じて鹽魚をあいものといふ俗に干物とも書する也異朝には鹹貨また醃切といふなり楊州畫舫錄に見ゆ

一きぬの代

加賀上品は一疋三貫或は二貫七百八百六百五百中は二貫二百三百文　美濃上品は二貫二三百中は一貫六百七百下は一貫二百自餘同斷

一小袖の代

町おり物三貫餘北野物二貫五百六百以下小袖によて不レ定かけもえぎ三貫計中程の小袖云云梅染その外色々同前○今按に所レ謂北野物とは北野邊にて賣ものなるべし今も富澤町ものといふがごとし然るに三浦氏が見聞集に或文に昔綿を多く入れて夜のものとも夜着にす

是をおひえとか北のものとも名付たり故如何となれば裏に越後をするによりてなり冬は北より來る越後の國北なり其緣をとりておひえとも北のものとも名付たり又異名を布子とも綿入とも云なり此詞みな公家より出たり云々此事又印本庭訓往來新注にも見えたり

一わたの代

錦小路ヵ三條町も同前みの上品二貫七百八百二百貫目下一貫四五百坂東上品一貫五百百廿五貫目下一貫二百三百越中皆門一貫百百十貫目

一べにの代

御はかまの染ちんは一兩別紅の代四百文宛御小袖御裏分上は八百中は四百文其外は代によて染レ之

一ねりぬきの代

上の代四貫五百四百中は三貫五百下は二貫三百四百或は二百（練貫大夫性靈兩人申）

一くれなゐの花の代（上ハ廿七八貫下ハ廿五貫）

一ぬのの代（上品ハ一貫八百七百六百或ハ一貫五百中ハ一貫三百四百下一貫）

一こんやの代

延德二年二月

延德二年二月十二日御道服縫七條掛絡其費用七貫六百七十三文

明應八年飢饉一石錢二貫八百文〔會津塔寺付八幡宮長帳〕にて日本國迷惑に米弐貫八百文なかざる

明應九年十月の頃に日本鑄の錢の事聞えたり〔建武式目追加〕明應九年十月錢定の高札を載せ下の如し

商賣輩以下撰錢事

一近年恣撰ノ錢之段太不ノ可ノ然所詮於ニ日本新撰料足一者堅可ノ撰之至根本渡唐錢永樂洪武宣德等は向後可ノ取ニ得之一但如ニ自餘之錢可ニ相交一若有ニ違背之族一者急可ノ處ニ嚴科一矣

按に新撰料足とは新鑄錢といふことにて撰は錢と音相通ず其證は前に引く多門院日記に精錢とありて織田殿の文書に精撰と書するにて見べし

文龜三年五月大原八瀨柴持畫食代廿文

〔和長記〕文龜三年五月、內侍所菖蒲御輿如ニ例年一云々、八瀨分柱三本杖八本、右柴持參之日、畫食代三疋廿文沙汰定例也、

同年五月御卽位調進物の內、大學寮贊者其官人禮服一具五百疋

〔和長記〕文龜三年五月十七日、傳聞御卽位調進物之內、自ニ大學寮一贊者燒香等之官人七人之禮服冠三山等、調進來也、

永正元年奧州會津大觀通寶錢通用此歲飢饉米一升錢百文

〔會津四家合考〕永正元年甲子、天下飢饉、會津米價一升百錢、按此時錢大觀通寶之錢也云々、按に下の永正九年〔東寺文書〕併せ考べし

永正四年南都幄屋代百五十疋斑幔代二貫五百文

〔多門院日記〕永正四年十二月八日幄屋事、代百五十疋、同十六日斑幔之代二貫五百文、幄屋料理之代一貫五百文、可ノ有ニ下行一、此條寺門にて無ニ下行一者、勅使下向不ノ可ノ叶之由、自ニ京都一注進之間、合十五貫文分、寺門にて可ノ有ニ下行一旨云々、京都へ注進了、○按に多門院は南都興福寺中なり以下此日記を引はみな南都の沽直也

永正五年八月七日精撰之事下知せらる〔建武式目全文三條〕

永正九年八月卅日日本錢并地錢の事聞えたり又錢定の事下知せらる

〔東寺文書〕全文

按に此文地錢といふは則日本鑄錢の事なるべし日本鑄に永樂大觀嘉定もありしと見え前に引元年會津大觀錢手當といへる類なるべし

永正十一年三月日吉禮拜講の要脚千貫なり

〔拾芥記〕永正十一年三月十三日、爲ニ室町殿御一代一度御沙汰一被ノ行ニ日吉禮拜講一要脚、給千貫也

永正十八年陣宣下五百匹以下差あり

〔武家儀式〕永正十八年陣宣下五百匹三百匹禁裏獻料三百匹上卿三百匹職事中將御叙爵祿物戶三千匹大內記千匹副使弐匹御名字勘者

享祿三年會津米一升十五六錢〔會津四家合考〕享祿三年庚寅世上地年會津米價一升五六錢

享祿四年二月十七日金を廿九貫六百文に賣る

〔宣秀卿記〕に享祿四年二月十七日自ニ駿州一來金加藤所々廿九貫六百に賣ノ之夾注に今日十二貫まゐる按に此記に金目何程といふことなけれども差付金と錢換との沽直を見んがために標書す

天文二年矢の代楯の代

〔東寺文書〕就ニ吉祥院ロロ相之儀一入足之事天文弐年

八貫文　矢の代數五千五百

壹貫文　同ねをうつくろがね代　四百文

鍛冶炭代一斤　同畧代壹貫八百文同てうちん代九貫八百文　楯の代數八十五帖　百文　杉原三帖　五十五文　雜紙

天文五年八月金を錢に換し事あり

〔嚴助往年記〕天文五年八月十七日今度京都亂妨に付金卅三枚其外金具數多二三千貫足取申候云々先金六十貫令ニ沽却一事依ノ無ノ之其隱夜盜也按に此文頗不成語なれども二三千貫の錢にて金を買ことを見んがために表出す

天文八年九月上酒一升廿文下酒一升十文

〔多門院日記〕天文八年九月六日廿ヶ吉酒三升廿文ヅヽ、上分也下ハ白酒十文ヅヽ、三升買也

天文九年十二月攝州兵庫にて米壹石に銀六匁三分又五分也小妻木綿一匹に銀壹匁六七分并木綿銀壹兩三分

〔室町日記〕中間衆の木綿三十五疋買取御役舟にて彦三に上げ申候可ノ有ニ御請取一候小妻もめんは今銀一疋に付壹匁六分七分の賣買にて是も小妻におとらぬもめんにて御座候壹匁三分づヽに定申候間

其御心得可レ有レ之候一御局方むした衆の切米十二石うりはらひ可レ申よし被二越仰一此ごろ兵庫のうりかひ壹石に付六匁三分五分のよしすいこや新右衛門申候其心得可レ有レ之候以上十二月二日岡村忠右衛門殿林甚五郎按に此條は銀と米と木綿のことにして錢に關係せずといへども他日錢と銀との相場を見合せんがために此に表書す但小妻は攝州住吉の邊なり今も木綿出る也供人の看ばんに用ゆ代凡七匁程也

天文十一年閏三月十一日撰錢の儀被二仰出一同四月廿二日高札を被レ定同五月四日撰錢御下知御禮錢〔雄川親俊記〕天文十一年閏三月十八日

天文十一年十二月近江國朽木谷にて弓弦一張代十六文蛸二百文足打膳十膳百廿文

〔朽木文書〕御買物注文合天文拾壹年六十文弓つる十二張貳百文たこ百文ゑそ百廿文あしうち十せん九十文かんなかけ三束百廿文ときやう十せん廿文かくのをり敷卅文こはう百五十文かみさまの御用以下□□以上壹文八百四十文十二月十七日築瀬六郎左衛門尉殿兵部丞信祐判

天文十二年二月南都米五斗代四百十二文

〔多門院日記〕天文十二年二月朔日米五斗代四百十二文に賣り和市一斗三升之イサシ

内裏の四面の築地の蓋の料足四千貫斗織田信長より上られ候由

〔多門院日記〕或人内裏ノ四面ノ築地ノ蓋ヲ尾張ノオタノ彈正ト云者修理ニテ進上可レ申之由申者也料足四千貫斗上レ之云々於二事實一者不思議之大營也

四月廿九日ヘンサン長尺ニ五丈ヲ三百七十五文ニ買ヲハリト、ノヘ遣了

〔同書〕永祿九年四月廿五日の條にヘンサン衣并重衣新調了二百廿文ヅヽ買レ之

四月晦日兩不レ降作毛難レ成之由麥ハ和市三斗二升米ハ一斗四升〔同書按に壹貫文代なるべし〕

天文十三年九月越後布一段五百文〔多門院日記〕

天文十五年八月染物出來了ツムギ一タン代九百文ワタ一ッ四百文ソメチン六百四十文〔多門院日記〕

天文十六年甲斐國武田家政に棟別錢の事沙汰あり〔詳附錄棟別錢の部に見ゆ〕

天文十八年五月南都白麻布一反二百六十八反

〔鳥花日記〕天文十八年五月二日白帷布來マヲ一把半百六十五文七十文ヲリチン卅文サラシチン合二百六十八文入了三尺ホド餘リ了

天文十九年關東北條家政に永樂一錢遣と定られ高札を立らる

詳に永樂錢の部に載す〔北條五代記〕年寄たる人いふやう近き年迄關東にびた永樂をまじへ同じ直につかひしが在々所々において善惡をあらそひことはり止ことなし其比八ケ國の守護北條氏康公仰候處錢は直段も有といへども永樂にますはあらじ自今以後くわんとうにて永樂一錢とつかふべしと天文十九戌の年に高札を立られければ關八州の市町にて永樂を用る云々

弘治三年八月尼崎邊金壹兩に米五斗なり

〔二水分流記〕に弘治三年八月廿六日尼崎難波鳴尾今津西宮兵庫明石の間浦々へ高潮あがる取分尼崎にては六十一人流死すとかや何の里も堤は原となる也依レ之米賣買金壹兩に五斗也○守重云弘治の頃に金壹兩に米五斗と記すること疑べしもしくは追記の文ならん

弘治三年五月より大旱金壹兩米五斗

〔重編應仁記〕弘治三年五月廿三日ヨリ八月九日マデ天下大旱魃今年金二兩ヲ以テ米五斗ヲ交易ス前代未聞ノ事ナリ○守重云此條嘗テ一書ニテ抄錄シテ轉引スル所ナリ今板本應仁記ヲ閲スルニ此文見エズ又此時金壹兩ト云コト追記ノ文ナルナリ

永祿八年九月南都綾小袖一貫二百文

〔多門院日記〕永祿八年九月八日あやの小袖一貫二百文に買了文桐のこう一方の小文石たゝみなんとあり（本ノマヽ）

同年十二月廿五日南都精錢の高札を立らる〔多門院日記〕永祿八年十二月廿五日近般以之外精錢之間制札分廿三定レ之

一新錢

一ワンカケ

守重按に新錢とあれば此時同所レ鑄の新錢ありしなるべし今詳ならず

永祿九年

四月屋根葺一人手間五十文〔多門院日記〕永祿九年四月ヤネフキ與二郎○中略ヤネ三人タモン院二人合五人手間二百五十文云々

同月油一升代百廿文
〔同書〕四月九日秦ノ藤辰殿え油五合遣ノ之代六十文又五月晦日多聞山え油一升代百廿文遣ノ之
又九月十八日城え油一升上了代九十文同廿三日城え○中略油一升又上了代百廿文又十月十九日油六升之代助次郎方へ濟了今は百廿文ヅヽ也近年之タカサ也田舍ハ九十文ヅヽスル也
八月酒一升代十文〔同書〕八月晦日ある年也酒之代三斗三升代三百廿文ヲ米一斗二升ヲシして四年渡候證了
九月薪一荷代卅五文炭一荷代百文〔同書〕九月廿三日城え炭一荷代百文カマス三レ廿二文ヅヽカツチ三ツ十八文 薪一荷卅五文上了○中
十一月鹽一駄代米二石〔同書〕十一月十日鹽一駄一石六斗在レ之市升ニル時分也一升ノ利五文ヅヽニ當ル也
永祿十年
二月錢六百錢ニ米七斗〔多門院日記〕永祿十年二月廿五日松林領新三郎へユエン六百文ノ代米七斗濟了
六月米一石代八百廿七文〔同書〕六月八日米一石ヲル代八百廿七文一斗二升五合ヅヽ小麥七斗六升代四百文一斗九升ヅヽ（錢一貫文ニ米一斗二升五合小麥一斗九升カ）
九月油一升代六十文〔同書〕九月三日油一升六十文ニテ田舍ヨリ取レ之代遣レ之
十二月飯米五斗代四百十九文買レ之 同書

十一月信長より信玄へ料人の音信之内に代物千貫〔甲陽軍鑑〕永祿十年霜月信玄公御料人七歳なるを信長嫡子城介内馬に申談ると云る事の條に信長より信玄公へも音信有レ之云々 御料人樣への御音信厚板百端薄板百端中略代物千貫
同十一年
五月人參一兩代八十文〔多門院日記〕十一年五月廿一日參ニ兩一段 參性ニ藥種取寄了○中略人參代八十高直也
蚊帳の代
〔同書〕六月一日宗四郎來了一狀半ツリノカヤ百廿文ニ買了一向オカシキ物體也下部用也明禪殿へハ一狀半ツリ百五十文ニ被レ買了是ハ大概ノ物體也何モ宗四郎口入也
七月布五丈五尺を二百六十文ニ買レ之〔同書〕七月八日ラヘタル布五丈五尺アルヲ芳春方ヨリ二百五十文ニ買了 京衆ノ用ニコシ公方義昭え
七月信長見參の時鳥目千貫を進ぜらる
〔織田信長譜〕永祿十一年七月廿五日義昭到二濃州一入二立正寺一廿七日信長謁二義昭一獻二太刀一腰馬一匹鎧二兩沈香一器綿絹百端鳥目千貫一
十二月米一斗代百文〔多門院日記〕十二月十五日昨日蔡堂ヨリ杉原ノ事申上間二束四百文ニ取テ下了代米八斗遣レ之

同十二年
三月廿三日信長錢定の制札南都へ打れたり〔多門院日記〕永祿十二年三月廿四日昨廿三日從二京都一織田彈正忠一錢定之制札奈良中方々ニ打了
五月油煙五丁代百文〔同書〕
六月油五合代四十文〔同書〕
十月黃連二兩代八文丁子二兩代十二文麝香二朱代百廿文〔同書〕ユエン合シ入目也○按に此後元龜二年二月には八十文ヅヽ麝香一朱四文アチレン一兩五文丁子一兩とあり
十二月上下壹具代八百五十文染賃共 小袖一代一貫七百十二文染賃共〔同書〕十月廿三日助二郎上下裁了上ハ絹尺ニ一丈七尺エチコ下ハ長尺ニマヌノ一丈九尺五寸ホド入了候同用紫ノ小袖ノ面六百文ニテソメニ遣了候
十二月六日助二郎紫ノ小袖仕立了
絹六百五十文 ムラサキソメチン六百文 ワタ四百文ナモテ ウラキヌ三百五十文 キヌノ絲十二文 ワタノムシリチン五十文
合一貫七百十二文歟此内オモテキヌハ前ノ買了也代米三石四斗二升ニアタル
上下一具仕立了
上ノ越後布三百文 下マ布一丈九尺三百五十文 ソメチン

二百文
合八百五十文代米一石七斗都合五石一斗ノ入目也
元龜二年
四月十八日笠間茶一斤代七十文〔多門院日記〕元龜二年四月十八日無量壽院笠間茶二斤代七十文ヅヽ米ニテ二斗八升
八月十五日月見芋一升代五文〔日記〕八月十五日月スキ如形有ノ之近日田舍ノ路次不通候處芋一向無之一升ナヤツ〳〵五文ヅヽニ買レ之
十一月三十疋代米六斗〔同書〕十一月十七日一昨日歸向布施三十疋代米六斗來了〔同書〕舞事殿へ油五升
油五升代米六斗五升〔同書〕舞事殿へ油五升ノ代米六斗五升遣了
元龜三年
閏正月抹香一斗代三十文〔同書〕閏正月四日抹香一斗卅文ニ買了
天正二年
十二月七日野漆錢百文に四十文目〔日記〕十二月十日ヌシヤ三郎今日ニテ仕舞了入目二石二斗六升歟仕立道具三石程ノ事也○中略ウルシハ百文ニハントウハ五十文（入目）吉野ハ四十文目ヅヽニ買了
天正三年
二月米一石代五百文素麵百文ニ十二把
〔日記〕二月十五日薪寺本祖一休百年忌○中略來廿一日大法事在レ之素麵百五十把誂レ之間調下了百文ニ十二把ヅヽ一貫二百五十文代米二石五斗ノ内今日一石九斗五升二合渡ノコリ五斗四升八

合

十一月綿七十五貫目を米二斗四升に買ゝ之

〔日記〕十一月五日マフ一束五十本一斗三升ニ買了當年限何モ安キ事無ゝ之綿ハ七十五貫目アル中分ノヲ二斗四升ト申了クノ木ノ炭ノ上九升ヅツ大クリハ五六ヅヽウルト云々米大切ノ故也

○按に此條は錢の事なしといへども當時米交易の形を見んがために表出す

天正五年

六月米一斗に鹽一斗六升を買ふ

〔日記〕六月十一日シホ二駄買ゝ之麥一斗二升ニシホ一斗ヅヽ也シホ合三石一斗十一合ノ麥三石七斗二升斗升ニテ遣ゝ之米一斗ニシホ一斗六升ヅツニアタル

八月錢一貫文を銀三百九十匁に換ふ

〔日記〕八月廿九日綿一ワテンビン目ニ七十目ヅツフタキナシニカケテ一屯ノ銀十五貫目五フンヅヽニ三屯買了銀四十六貫目五フン源五郎引替也代米四石三斗二升五合ニ當ル百文ニ卅九文目ヅヽニ當ル常ノハカリニハ八十文ヅヽアリ四十四文目ヅヽニアタル

天正七年

二月砂糖一斤代百文〔日記〕七年二月四日備前ヨリサタツ四斤代七百七十文ニ堺ニテ買テ上了

八月錦一貫二百文代米三斗に當る

〔日記〕八月廿七日堺ニテ藥取了蜜三斤代ビタ二貫二百文ニ取了代米三斗ニアタル一斤一斗ヅヽ也一兩二合ヅヽ也代皆濟了○按に天正九年四月十六日蜜半斤二百卅四文とあり

九月墨一丁代米五升〔日記〕九月廿一日備前ヨリユエン取ニ來問二丁ノユエン三丁下了代一斗五升也

同月大工手間一日一斗〔日記〕九月廿一日番匠二人來了今日ニテ上了合廿六日二石六斗ノ手間也

天正八年

正月錦一貫文ニ米三斗五升〔日記〕正月九日堺ヨリ興一藥三斤五十目ヲビタ一貫四百文米ニテハ四斗九升ニ當ル余ノ藥種モ奈良トハ一倍ニアマリテ安キ也

十一月段子一端代三貫四百文〔同書〕十一月十八日明日四貫文丹ニドンス一タン代三貫四百文ユエ大乘院殿御上洛ニ付ヒタン五丁代一石六斗ハリヤヘ代一斗遣ゝ之

天正九年

十月信長ヘ大乘院より錦廿貫見廻として進せらる

〔同書〕十月三日大乘院殿御上洛了信長ヘ御見廻ヒタ廿貫三文子ニ口入申渡申候

十一月綿十五把代米五石七斗〔同書〕十一月六日大門ヘ綿十五把五石七斗ニ大ヤニテ買ゝ之上了安土ヘノ御用也

天正十年

正月元日信長ヘ年賀の式青銅十疋づゝを式とす

〔信長譜〕天正十年正月元日、信長在二安土一、列侯以下出仕、信長裝束受ゝ賀、列侯共進物、信忠以下皆以二青銅十疋一爲ゝ式、〔信長記〕正月朔日隣國の大名小名御家人御連枝の御衆名安土に被二出仕一候也今度の大名小名によらず御禮錢十疋を自身持參仕候得と堀久太郎長谷以竹御兩人御觸れ〔多門院日記〕正月七日安土え各禮に被ゝ出諸御大名小名悉以十疋ヅヽにて一禮在ゝ之云々一同惣禮布衣之體云々是は當春頓而可ゝ有二出陣一候間無用之過差不入事也との由也

三月絹一疋代米二石六斗〔日記〕三月朔日長善坊練衣ノ用絹一疋百四十五文目在ゝ之二石六斗になへやにて取ゝ之四丈八尺五寸在ゝ之近般以之外糸高直故如ゝ此

同月鹽の代米一升に鹽二升五合〔日記〕三月廿五日シホ米一升ニ二升五合ヅヽ可ゝ賣ゝ之通申來今ノ樣ニ安キ事ハ不ゝ覺先日三石二升一合ヅヽに買了一段安ト思ゝ過分ノ損也

九月十三日奈良中錢定の高札打たれたり三文までに取るべし但ワレカケ鉛錢の外は取べきとの事也〔日記〕九月十六日の條に去十三日歟奈良中無法盡新足ヨル間從筒井錢定ノ札打ゝ之三文迄ニ可ゝ取ゝ之アレカケナリ錢ノ外可ゝ取ゝ之云々

天正十一年

閏正月砂糖三斤代四百卅三文〔日記〕閏正月十七日先日於ゝ堺買求サタフ三斤ノ代四百卅三文助二郎ヘ濟了

七月十一日秀吉より天王寺太子堂え並錢九百貫文奉口口錢錢の部に載ゝ之

天正十二年

二月米一升代二十二文〔日記〕二月廿七日於ゝ成身院ニ花見在ゝ之人數五十二三人在ゝ之廿疋ヅツ出ゝ之代九升

十二月錦一貫に米鹽一石五斗〔日記〕十二月十五日郡山市ヘ彌三郎召遣ゝ之鹽ビタ一貫ニ一石五斗賣テ來ル米一升ニシホ三升五合ヅヽニ當如ゝ此安ゝ之事希ナル事也

天正十三年

四月錦一貫文に米八斗五升

〔日記〕四月四日水屋神樂ニテ調ト云々誠歟金五十五石銀六石一二斗ビタ八斗五升トカ在家質ノ利ハ一斗ニ一升五合子也ト思ノ外米多云々○按に金銀錢並稱にて取換の事此日記初て此に見ゆ尤金銀はいまだ常形なきなり

按に豐臣家の時に至りて國家の財用頗る豐に

なりて專ら金銀を用ひらる故に錢貨の事

天正十四年

此歳の頃小田原北條家の家法驛馬一里永樂一錢に定られたり（詳に永樂錢の部に載レ之）

天正十七年

十月金と錢との兩替錢一貫文に金日七分六厘餘〔多門院日記〕十月朔日遣錢事欠レ之間金一兩一分代一貫四百四十四文にウル○案に此時いまだ金に常形なくして唯に正金を以て兩替せし也然れども自然と金を貯へて錢に替るの事起りし也

十一月錢一貫文に古米七斗七升（〔日記〕十一月廿日古米一貫ニ七斗七升今升ニテ買了）

天正十八年

八月豐臣太閤片桐主膳正竹中源介をして奥州を檢地せしめらる永法を用ひらる（詳に永樂錢の部に載レ之）

天正十九年

夏江戸錢瓶橋せんとう風呂代永樂一錢（〔そゝろ物語〕詳に永樂錢の部に出）

十二月南部雜著四百前代錢十一文（〔日記〕十二月十二日十壹文ニ買了四百センチ雜著二千五百前ニ七十一文ヲい伊賀日リ持來）

天正二十年

八月朝鮮陣の時關西一文遣の精錢馬は一里十文次夫一里四文次舟四反帆一艘一里に廿文但惡錢は增を取るべき事と沙汰せらる（詳に精錢の部に載レ之）

此頃米は壹貫文に二斗八升金は五十貫文（〔上杉〕〔志賀〕に紀州湯河氏所傳の女書の古書也載せて云一しろかれ事之外たかく候一金かれはやすへは入候一米は一貫に一斗八升ヲ、に御座候一金かれは五十貫仕候云々）

文祿二年十二月十日錢定有レ之（錢定の部に載レ之）

錢錄卷第二終

錢錄卷第三

永樂錢

永樂錢は應永年中より關東に行はる此錢もと異朝明の永樂九年十二月に鑄る所にして我應永十八年にあたる蓋當時頻に明朝の往來ありしゆゑ其錢の來ること亦少かずと聞ゆ

永樂鑄錢の年代異朝の書には或は六年或は八年或は九年といふ

〔明會典〕鑄錢の部には永樂六年鑄二永樂通寶錢一とみえ錢法の部には永樂九年令レ差二官於浙江江西廣東福建四布政司一鑄二永樂通寶錢一と見えたり〔圖書集成〕にも六年と九年と兩度の事を擧たり〔明史藁〕〔明史〕〔明從信錄〕〔續文獻通考〕の類は俱に九年の一度のみを記せり以上數書に月なし只陳建が〔明通記〕にのみ永樂九年十二月鑄二永樂通寶錢一とあり今これに從ふ何裔遠が〔名山藏〕には永樂八年とあり但〔明太宗實錄〕に永樂鑄錢の事を載せず史闕といふべし

我朝のものには永樂元年と見ゆ

〔京華集〕に〔江山小隱圖詩跋〕を載て云詩我養源老漢作レ之、書乃普光仲方老人之眞蹟也云々、老人始從二養源一而學二此詩一、想其時所レ筆也云々、其書法也當世第一、眞草兼備、自成二一家一云々、應永辛巳從二國信使一而南遊、蓋奉二鈞命一也、大明永樂紀元也、於レ是乎天子以二老人善一筆札一、試二御書院一、遂命二老人一書二永樂通寶四字一鑄二之銅錢一云云、應永辛巳は八年なり永樂元年は應永十年に當る〔北條五代記〕錢品々ある中に取わけ永樂を關東にて重寶すること不審なり然に唐の年代記を見るに永樂は明朝の御代三十六年に當てはじまる此年日本は應永十癸未の年に當る此年八月三日唐船わがてうへ來る扨又同き年中日本より唐國へ御つきものを納たると是も年代記にあり此船共に彼永樂を積來りける云々所レ謂三十六年とは洪武元年より通計して建文を除き永樂元年をさすなり此時洪武三十一年建文四年再洪武

三十五年夫より永樂元年となりし也下に引く〔中古治亂記〕〔武家盛衰記〕にいふ所と亦應永十年八月唐船永樂錢を儲來すと見ゆ

此際に傳ふる所は傳聞の誤なるべし

或人云〔京華集〕と〔北條五代記〕に據れば永樂錢は元年に初て鑄るものにして〔明史〕九年に係けしは其盛なるを擧しなるべしといへり此說非なり明朝洪武二十七年より永樂七年まで一切に錢通用を止めて專ら寶鈔のみを用ひらる然れば其間に鑄錢のあるべきやうなしされば六年に新鑄の論起りて九年に至り初て其事を成せしならん

〔名山藏〕洪武二十六年、罷二各布政司寶泉局一、其明年、禁二行錢一、專用レ鈔、永樂元年、以二鈔法不一レ通、令下民間有中用二金銀一交易者上以二姦惡論一、有二能首捕者一、以下所二交易一金銀上充レ賞、五年令二各稅程課程一、俱准二折鈔一以重二鈔法一、七年、設二寶鈔提擧司於北京一、永樂八年、鑄二永樂通寶錢於天下一、而錢復兼レ鈔矣、宣德正統中、並重二鈔法一、至二景泰四年一、聽二民間錢鈔相兼行使一、成化十三年、嚴二私鑄錢之禁一、と見ゆ〔明太祖實錄〕洪武二十七年八月、禁レ用二銅錢一矣、とみえ明會典に洪武二十七年、令二軍民商賈所レ有銅錢一、有司收歸、官依レ數換レ鈔、不レ許二行使一、と見えたり又正統十三年五月に至て禁レ使二銅錢一、有下以二銅錢一交易者上、梓其罪十倍罰レ之、といふことあり又實錄に洪武三十年三月、禁レ用二金銀一、永樂元年四月、以二鈔法不一レ下、令レ禁二金銀交易一、犯者准二奸惡一論、有二能首捕者一、以下所二交易一金銀上充レ賞、とありこれ明初鈔法のみを重じだれば元年の頃いまだ新錢の沙汰なきを明らむべきなり明律に錢法を先にし錢法を後にせしは鈔法を重んずるが故なるべし

其錢の京都へ來りし初は明朝よりの給賜といへり意ふに商賈の貿易に出しが多きなるべし

〔善隣國寶記〕寬正元年の咨文に書籍銅錢仰二之上國一、其來久矣、今求二二物一、伏希奏達以達、以滿レ所レ欲云々、永樂年間、多給二銅錢一、近無二此舉一、故公庫索然、何以利レ民、欽待二周急一云々、又文明七年の咨文に抑銅錢經レ亂散失、公庫索然云々、永樂年間多有二此賜一記レ之云々、これによれば異朝より新錢を數度給賜ありと見ゆるを〔續善隣國寶記〕に載する明の成化十四年の返簡には要下照二永樂年間事例一、給二賜銅錢一賑施等上、因二禮部一查、無二給賜之例一、向使二臣妙茂等一復懇辭具奏、玆不レ違二王意一、賜二銅錢五萬文一云々、とあれば永樂中には彼天子より給賜の事はなきがごとしされども〔明太宗實錄〕に永樂元年、日本國王源道義、遣二使圭密等三百餘人一、奉レ表貢二馬及鎧冑佩刀瑪瑙水晶硫黃諸物一、賜二圭密等文綺紬絹衣并錢鈔紵絲紗羅一有レ差云々、又六年五月辛丑、日本國王源道義、遣二僧圭密等百餘人一、貢二方物一、并獻二所レ獲海寇一、上命以レ冠屬二刑部一、賜二圭密鈔百錠錢十萬絲幣五表裏僧衣一襲一云々、これ使臣に錢鈔を賜ひし事あれども當時いまだ永樂錢を鑄ざれば其錢は永樂以前の錢なるべし又同書に六年十一月丁卯、日本國源道義、遣二使昌宣等一、來朝貢二馬及方物一、賜二鈔幣一有レ差、とあり此方に鈔を賜ふことと見えて錢を賜ふことある事なし九年春正月甲寅、遣レ使、勅賜二日本國王源義持金織文綺紗羅綾絹百匹錢五十緡一、嘉二其屢獲二倭寇一也、こゝに至て初て錢を賜ふこと見えたれども其錢は僅に五十緡に過ず此錢今世に存するもの夥しくして算數すべからざれば其給賜のみにあらずして貿易に出しこと知るべきなり

其關東へ來りし事は相州三崎浦へ漂船ありしより初るといへども其年代據どころとなしがたし

〔中古治亂記〕應永十年八月三日大風相州三崎浦へ漂船一艘來ル足利滿兼下知シテ印東二郎左衞門梶原能登守三浦備前守義高奉行シテ點檢ス惡風ニ放タレテ來ル由ヲ申スニ付船中ノ雜物ノ類品ノコラズ改メシ中ニ永樂錢數百貫ヲ積來レリ則船ヲ抑留シ使者ヲ京都へ上セテ道義義持卿へ申サレシニ唐船關東へ着岸スルハコレ滿兼ノ德分タルベシト仰セ下サレケレバ云々其後滿兼評議シテ若干ノ永樂錢關東ニコノ錢ヲ以テ賣買スベント議シテ頓テ法ヲ定メ永樂錢ヲ用ラル云々

此事又〔武家盛衰記〕上總介忠輝の譜にも載たり然れども〔治亂記〕〔盛衰記〕とも僞書なれば全く信ずるにたらず但此二書は前に引ところの〔北條五代記〕に根據して敷衍せしものにて〔五代記〕また應永を去こと遠ければ傳聞の誤あるま

じとも思はれず然れば十年の說確據となし難し應永より凡百四十餘年が間永樂錢とりまじへ通用せしに關東民間錢の撰つよくして其爭止まざれば天文十九年北條氏康の令として關東に於ては自今永樂一品通用たるべしと定めらる是を以て錢は自かち關西へ登り關東は永樂一錢遣となりたるなり〔北條五代記〕年寄たる人いふやう近き年迄關東にびた永樂取まじへおなじ直に使ひしが在々所所において善惡をあらそひことはり止事なし其頃東八ヶ國の守護北條氏康公仰けるは錢はゑなゑな有といへども永樂にまさはあらじ自今以後關東にて永樂一錢をつかふべしと天文十九戌の年高札を建らなければ關八州の市町にて永樂を用る此義近國他國へ聞えびたの內より永樂をえり出し用るゆゑびたはいつとなく上方より關西にてつかひ永樂は關東にとゞまりて用る云々又按に〔會津塔寺村八幡宮所藏長帳〕に永祿十年五月より代首尾永樂に罷成申候と見ゆ此頃に至りて漸く永樂一錢遣になりしと聞ゆ

其錢の精撰なるが爲に金銀田賦とも此一錢を準(かぬ)として諸色の方より永樂に向て價直を立し也

他の諸錢は和唐取交へ其品に善惡厚薄ありて相場の高下なす永樂のみに一品精錢ゆゑ相場に動きなき故なり

是金にも永樂の名ありて

三州岡崎所在永祿六年十一月本多忠勝より長瀨八幡宮へ與へし〔文書〕に覺永樂金子二貫目從二酉年一當春迄家之殿御用に立入用金子此度段々役人共年符(賦カ)申渡に付某印形渡置金主長瀨八幡宮依二借金一永々此證文何時にても致二持參一右之金子請取可レ申候爲二後日之一二札如レ件とあり此永樂金子といへるは意ふに永樂壹貫文を以相場を立し金子の事なるべし

永高幷永勘定の起りしゆゑんなり

〔北條五代記〕氏康天下の望あり先祖早雲年貢收納の義を定おかるゝより以來北條家に於て五ッ取所をば一ッゆるし四ッ地頭へゑゆなふす此外役一切かけず其頃永樂五十貫百貫と名付田地の跡は今五千石一萬石あり〔かや云々 按に〔田園類說〕永高は貫高とは別にして石高以前關東諸

國にて年貢辻を永樂錢に積りて知行領知などに直し此永高を用ゆ今も東海道筋又鎌倉などに永高の所ありといへども何れも古來の儘なるはなし今一統石高の世となりて永高時代のわけ分明ならずと知るべし又云永高といふは田も畑も永樂錢に積りて知行領知など直に此貫數を用ゆ今の根取といふものゝごとし是によりて永高時代の檢地帳にも反別あり大半小といふに割るあり又上中下の位もあるは永高とて別に檢地せし事にてはなし然るに後世地面貫と錢數の貫と紛れて一ッ事とおもふゆゑ合點ゆかず永高は卽今の反取のごとく田一反に永何程畑一反に永何程と其地面の位に隨ひて永盛を付て都合何百何拾貫と一村の永高を極るなり此故に永高は其土地の位に隨ひて一貫文の地廣きもあり狹きもありて定數なし是を永別永盛などといふ其所に貫代の定法ありて假令關東の田方一貫文は籾五石は畑方は直に錢にてとる事也尤此時代は專籾遣ひにて籾納也其後米納になりて今は米にて貳石五斗代といふもの關東畑永一統の通法となりたれど

も元は諸國貫代の內の一ッなり此故に今なほ諸國に引付の貫代ありて奧州の半石代甲州の大切小切の類皆是永積の遺法なり云々又云古來關東永高の法一貫文は籾五石相定也納米に成て二石五斗代に直せし物にして何の入組たるせんさくもなき事也〔勸農固本錄〕永一貫文に五をかけて高五石と成る夫に五ッめを掛米二石五斗と成る古來の定也云々守重嘗て天正十八年八月秀吉公の印書を摸寫す其文に云

奧州御檢地條々

一上田一段永樂錢貳百文宛事
一中田一段百八拾文事
一下田一段百五拾文事
一上畑一段百文宛事
一中畑一段八拾文事
一下畑一段五拾文事
一屋敷麻畠は上畑幷に年貢可二相定一事
一山畑は見あて次第に年貢可二相定一事
一漆木見計年貢可二相究一事
一川役相改別に御代官可二取付一候事

一田畠共に一段付五間六十間に可二相定一事
已上
天正十八年八月九日　朱印
片桐主税正とのへ
竹中源介とのへ

とあり然れば關東御入國の頃も奥州迄も田賦に永法を用ひられし也太閤の時の檢地帳今往々存するものあり此印書の制とみな合す此一書永法の明證とすべきを以全文を此に附贅す〔烈祖成績〕に天正十八年十一月淺野長政自二奥州一至二甲斐信濃一校二田畑一とあり然れば此事再度蹈勘せられて石直になりしにや他日考べし〔田園類說〕又云永は永樂錢の事也今は永と計唱へ金の異名となし勘定の一つになりたり云々〔勸農固本錄〕永一貫文を金一兩代に仕金一分永貳百五拾文を四つに割六十二文半を一朱と云三十二文二分五厘を朱中と云端永拾文十五文朱中に立まへり上べし尤三朱より朱中迄金一兩五十六匁替の相場に限上納勿論其品有來の定もあるべし云々
西野古海按

岡崎物語上
天文十六丁未年竹千代君六ノ御時駿州ノ人質トシテ御下向ノ處ヲ田原ノ城主戸田等鹽見坂ヘ出向テ竹千代君ヲ奪取リ尾州ノ織田彈正（後號備前守信秀）方ヘ永樂五百疋ニ賣奉ル云々
西野古海按
道祖土氏
天正十八年庚寅年五月十八日岩付落城ノ時滿兼云々永樂八貫白米五升ハ當座ノ飢ヲ凌ン爲メ取揃玉ヒ城中ヲ出玉フ由也
西野古海按
近世名員傳
上杉景勝ノ臣
岡野左内ハ隱ナキ福人ニテ關原御陣ノ起候節モ永樂錢一萬貫ヲ御事ハ缺レマジク候得ドモ下々ニ下サレ候ヘドテ主人景勝ヘ差扨又金子三十兩五十兩百兩貳百兩ヅヽ程々ニ從ヒ諸朋輩ニ殘ラズ見繼シ遣ハセシト也
其關東に盛なりしより遂に東海道に至るまでも專ら此錢を以て精錢とせしと見ゆ天文十八年尾張の

織田道閑より戸田五郎え永樂五百疋を賜ひ
〔御二代記〕天文十八年の條に三河をほみ坂の道にて同國田原の城主戸田五郎と申者云々尾張古渡の城主信長公の御親道閑老云々道閑御機嫌にて永樂五百疋戸田五郎に賜る世間にては右の代物に云々とあり〔三河記〕には織田彈正公へ永樂錢千貫文にとあり〔伊東法師物語〕には織田備後守希有の幸と祝して云々戸田彈正方へは五百貫の禮物を送是は當座の祝儀也とあり
天正十年伊勢兩宮修造の時信長より永樂錢三千貫を下行せられしにても其一端を見るべし
〔鹽尻〕伊勢兩宮造營御遷宮料秋米三萬石也天正十年三月十一日平信長森蘭丸を奉行トシテ兩宮修造ノ時永樂錢三千貫文ヲ下行セラル三千貫文ハ當時三萬石ニ當ル此例ヲ以テ今三萬石下行ストヅ此事道春が信長譜には信長賜二鳥目三千貫於伊勢神職一使レ行二正遷宮之儀一也、とのみあり天正十八年關東御入國の後なほ北條家の遺法に因らるといへども此時に當りては永樂鑑並び行はれしが猶其撰つよきがゆゑに其位いよ〳〵貴して遂に永樂一錢を鑑三文四文五文に換るに至る
天正十八年豐臣太閤より宇都宮彌三郎え賜ひし〔印書〕今水戸宇都宮氏に現存す其書に曰
條々
一諸奉公人事侍儀者不レ及レ申中間小者下男に至る迄其主人に暇を不レ乞他所へ罷出族有レ之者慥使着を以三度迄可二相屆一其上扶持を不二放付一では則可二成敗一事
附相抱者他領に不レ可レ置面々知行之者を召使其領内に可レ置レ之但知行不二召置一以前に御抱候者不レ可レ及二召返一事
一在々百姓他郷へ相越儀於レ有レ之者其領主へ御屆可二召返一不二罷歸一付ては其者之事は不レ及レ申御抱候者共に可二成敗一事
一相定年貢米錢之外對二百姓一少も非分不レ可二申付一事
一人を賣買儀一切可二停止一事
一永樂錢之事金子壹枚に貳拾貫宛ひた錢に永樂一錢に三錢立たるべき事
已上

天正十八年八月　日　　太閤朱印

宇都宮彌三郎とのへ

又〔北條五代記〕今は天下一統の世となり東西南北は此二錢をつかふされども永樂一錢のかはりにびた四錢五錢つかふ是より善惡をえらび萬民やすからず云々

但永樂壹貫文を金子壹兩に充し事も亦其後に始る歟

三浦尺木が〔見聞集〕に昔金壹兩の代に米錢のさた古き文をも見ず天正年中の頃金壹兩の代に米は四石永樂は壹貫但びた四貫にあたる是は三十餘年以前の事なり尺木は慶長の末此書を撰みしなれば所ゝ謂三十餘年以前は天正の中頃をさしていへるなり但前に引太閤の印書に金子壹枚に貳拾貫宛とあれば一兩に二貫十兩に十貫と定めしが是より後の事なるべし尺木がいふ所の年紀は恐は傳聞追記の誤ならん

是より後永樂いよ〳〵さかんにして公用より民間酒食の用達に至るまでことゝ〳〵くこれを用ひ慶長十二年に至れり

甲斐國下山宿本陣蘆澤某が傳ふる所天正四年六月二十四日勝頼より蘆澤源五郎えの〔判書〕に今度小田原遠見之役首尾能相勤歸參尤に候爲二加増一永樂貳拾貫文出ゝ之畢者也仍而如ゝ件とあり

又常陸鹿島社所藏の天正七年十月の〔文書〕に鹿島之神宮不開御殿上葺計之事云々萱替成就し爲二祝儀一板物三端永錢五貫文從二大宮司一越布一疋樽代三百疋送ゝ之仍如ゝ件と見え〔そゝろ物語〕に見しはむかし江戸はんゑやうのはじめ天正十九卯年の夏の頃かとよ伊勢與市といひしもの錢瓶橋のほとりにせんとう風呂を立る風呂錢は永樂一錢なり皆人めづらしき物哉とて入給ひぬ云云又〔猩々舞〕といふ冊子に見しは皆關東の人々廿年以前までは大上戸にてだくらう（濁醪）をこのめり去る程に清酒はまれにして濁酒の見世多し云々酒宴連座の人々はよねんなうしてのむ程にひとりして五十ぱい六十ぱいほどはおしなべてのむ大かたなりておもふ頃一人座中へすゝみてお腰にさげたる永樂とり出し此酒手をば何がし出すべしといふ云々所ゝ謂廿年以前とは文祿の末慶

長の初をいふ〔慶長年錄〕十二年二月十三日より江戸本丸と西の丸の間に觀世金春勸進能在ゝ之兩御所棧敷在ゝ之同諸大名棧敷在ゝ之知行役と云々但壹間に付永樂壹貫文也同勸進能の時四日の勸進錢百廿貫在ゝ之棧敷錢六十貫在ゝ之一人貳十錢宛被二仰出一候へば太夫共云やくこ躍なども左樣に御座候間外聞迷惑の由申札を不ゝ立人に依て勸進錢を取但何も永樂なり又松平又十郎家信より鹿島神主への書狀に雖下未二申述一候上令二啓筆一候仍拙者與娘吳立顧奉ゝ果候因ゝ茲御初尾永樂貳百文奉二進納一候彌於二御神前一息災延命家內安全武運長久之御祈禱奉ゝ任候恐々謹言とあり家信は天正十二年十六歳尾張において森武藏守と戰て高名す慶長十五年紀伊守に任ず

〔活所遺藁〕到二下總國府川一古城々北古戰場也、有二永樂銅錢數枚一、蓋當時之通寶、而死士槖中物也云々、

又按に永樂錢と呼訛りしこともありて千疋に拾貫文など相場の高下もありしと聞ゆ〔神禮日記〕に一おはらき（茨木也稅所の屋敷の地名也）ゑいろく分（永祿錢の分也）次第小目代（稅所の役人也）物がたりを書置申候一以上拾貫の時は（按に千疋に千貫といふことなるべし）稅所どのへ以上三貫是は三箇條役分なり一貫館に（按に館とは常陸の城に大掾の事也府中居る）一貫きやうし代より（行事代也）同久松分以上二貫同高濱惣社えかひほかひ百文（貝行器也）七貫のゑいろく時分は（按に千疋に七貫相場なるべし）七十づゝなり（按に十貫の時は百文七貫の時は七十文也）高濱役人共隨て十錢十五せんづゝなり是も高濱どのへ相渡りし候とあり又〔武邊咄聞書〕岡田左門といふ浪人關ヶ原御陣起りし時永樂壹萬貫上杉景勝え上りて御事はかかれまじく候へ共下々へ被ゝ下候へとて差上ると見えたり

慶長十三年十二月八日向後永樂錢停止たるべきよしの高札を江戸日本橋に建られたり

按に〔北條五代記〕びた一錢を用べし永樂禁制と慶長十一年の極月八日武州江戸日本橋に高札たつこれより天下の永樂すたるとあるは誤なり〔中古治亂記〕〔增補慶長日記〕にも十一年永樂を禁じ給ふといふは俱に此誤をうけたる也前に引く十二年勸進能の時に永樂錢を用たりしにても

見べし〔令條〕御定の高札を載す左の如し

定

一永樂壹貫文は鐚錢四貫文宛之積たるべし

但向後永樂錢は一切取あつかふべからず金銀鐚錢を以可二取引一事

一金子壹兩に鐚錢四貫文可二取引一事

一鐚錢猥につかふべからず但なまり錢大わはれかたなし新錢へつら錢此五錢此外は無二異議一可二取引一事

右條々於二相背一は可レ爲二曲事一者也仍如レ件

備前　馬

對馬　大炊

慶長十三年十二月八日

按に右令第一條にいふ所は是迄永樂錢のみにて通用ありし故此度永樂停止たるうへは永樂壹貫文の價の物は鐚錢四貫文の價たるべしといふの意ならん第三條に鐚錢猥につかふべからずとある鐚の字は疑らくは惡の字の誤ならん〔會津四家合考〕慶長十五年九月十日、捨二永樂通寶錢一用二京錢一、京錢者歷代之雜錢也、傳云、駿府大相國公一夕夢換レ城、醒告二忌於本多佐渡守一、佐渡守敬白、是公不レ所レ可レ患、志路可二相換一、太易也、以二京錢一換二永樂一、公尤容二其言一、終如レ此云、其事倭俗謂レ錢曰二代物一、代訓二志路一也、故取レ義、也と見ゆ是又一說なり然ども十三年禁止の事正しく條令にあれば十五年といふは誤なり

定

一金子壹兩には永樂錢可レ爲二壹貫文一事

一金子壹兩に京錢可レ爲二四貫文一但なまり錢かたなし大われ新錢へつら錢此五錢の外は撰間敷事

一金子壹兩に付銀五拾目たるべき事

右之旨を以御年貢幷諸商買ともに取あつかふべき者也仍所レ被二定置一如レ件

慶長十四年七月十九日

按に此令にも永樂の事を載られしは前年に永樂停止ありたれども永樂壹錢に京錢四文といふ定をゑらじめんために壹兩に永樂壹貫文京錢四貫文と並載せられしなるべし

斯く永樂錢廢せらるといへども再び通行もあるべき哉と民間にては風評ありしが猶その事なく

〔慶長年錄〕十三年十二月の條に此冬江戸永樂錢を捨て薄錢を可レ用之由大御所被二仰付一云々永樂貯置町人以下迷惑すと云々可レ被レ用二永樂一之由下人謳歌云々又十四年八月の條に去年永樂錢遣間敷由於二關東一被レ定ける當年暮方勘定之時右定以前之勘定には永樂を藏方に可レ有レ之申に付代官衆儀に永樂を調けるを關東町々商人又永樂を被レ用けると心得永樂を調事不レ斜しが果して去年掟の如に永樂錢すたりければ此度も商人失墜不レ可二勝計一云々

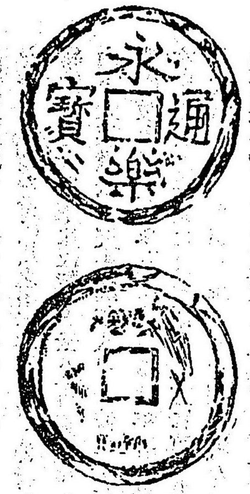
遂に嚴令のごとく永く停廢せられたり

〔北條五代記〕に永樂禁制云々これより天下の永樂すたる故に永樂をはかりめにかけ鑄物師買取て萬の道具につかふ又云この永樂よのびたなみならば末代日本のたからとなるべきに天文より金錢に秀で用る事たとへばともし火きえんとして其ひかりをまするごとし慶長迄五十七年をさかんにしてめでたき寶錢もめつする時節にあへる事のふしぎさよ

按に十三年の後もなほ永樂錢を用ひたりし事ありと見えて〔信濃物語〕に慶長二十年大坂夏御陣の時保科家の領知信州伊奈郡中澤五千石の所にて役夫二人を出せしに壹人の給分永樂錢百文にて其もの永樂百文を以て畠三反田貳反買取家族の手當のよし見えたり又〔事跡合考〕に禪宗圓滿山廣德寺は元來北條家の時小田原の城下に有し也天正十八年氏直父子滅亡之後その住僧江戸に來り今の昌平橋の內松平伊豆守上屋敷の地其頃いまだ足入の沼地なりし故とやかくして茅葺の堂一宇を建たり此住僧を希叟和尙といい淸尊座と云僧希叟に從ひ來り其地の內に少の茅屋を結び長壽院と云爰に甲州武田家の武士に志村又右衞門といふもの天正十年勝頼滅亡の後德川家に勤仕御子下野守忠吉殿御附慶長十四年の頃浪人して松平陸奥守政宗かたへ永樂五百貫にて被レ抱此又右衞門伊達家浪人の後寛永の始かた頃菩提寺等も無レ之により此廣德寺に參詣す和尙に對面し檀那にならんとて希叟え永樂三十六錢淸尊

座に同弐拾四錢づゝにて布施とし卽時に希叟に逢ふて師檀の約束す其後寛永の末か希叟彼寺を今の下谷の地に引たり今は元の芋洗橋の内の地は各大名の宅地となりし也此事又右衛門女寶永の始七十餘歳の老尼の物語り也と見ゆ今按に永樂は慶長十三年に廢したれば寛永の始に此錢のみを用べきやうなし但自分と撰錢にせし事か何れとも古老の遺語と聞えしまま此に錄出す

同本邦所鑄錢



右永樂私鑄錢は應永より慶長まで永樂錢關東に盛なりし時に當りて私鑄せしなるべし年代鑄所いまだ其詳なることを考ることを得ずされば錢正の頃すでに永樂鑄錢ありし事知べし

〔會津四家合考〕に永正元年、天下飢饉、會津米價一升百錢、按に此時錢大觀通寶之錢也とあり此大觀も本文の地錢なるにや又南宋の錢淳熙元寶より咸淳元寶まで十五錢皆背文あり然れどもそれは渡唐錢なり

永樂大觀嘉定以下うらに文字のあるせによき錢の内たるべしとあり所謂日本新撰料足幷地錢とは日本鑄の錢の事なり

同金銀錢

永樂の金銀錢は賞賜の用に充てしものといふ或は然らん

凡銀錢の中古に聞えしは祭祀に用ひしものあり〔朝野群載〕に永承五年泰山府君を祭るに銀錢二百四十貫文あり〔本朝文粹〕に保延四年泰山府君を祭るに銀錢一百四十貫文あり産所に用ひしものあり〔九條師頼公記〕に銀卅を用ひし事見え〔源平盛衰記〕治承二年中宮御座の時に金錢九十九文御枕の上へ置とあり因に云伊勢守貞隆が産所の記には太平の鳥目十三文ゑなにつゝみそへてをけへ入とあり又調度に用るものは〔類聚雜要抄〕に櫛筥の内へ入る料に銀錢卅白蠟錢卅鉛錢卅のり是等永樂に關係せずといへども中世の用途を考へ又以て銀錢の由て來る所以を明さんが爲に贅附す又〔日次記〕寛喜二年四月十三日、或人語云、昔如二大業中一、盡二海内財力一之日、錢神尊崇之餘、能被レ鑄二金銀之新錢一、及二數萬一、是若爲レ分二賜銅臺之宮妓一、歟云々、當時異朝の事をもこれらの傳說ありと聞えたり

世に傳ふるところは豐臣太閤に始るといふ

小瀨甫庵が〔永祿以來事始記〕秀吉公御代出來初し事は金銀錢是は於二戰場一御褒美の爲也と見ゆ錢文を載ざれど必す永樂なり

然れども天正十年武田勝頼天目山の事の時に銀錢を賜ひしことあれば

越前勝山侯小笠原家の藩臣に脇屋八兵衛といふあり其家系に脇屋金右衛門嶺昌その子八兵衛嶺榮とあり〔譜略〕に云母甲州之士松下惣六宗近女、初仕二信嶺之夫人久旺院武田道遥軒信繁女也、後嫁二嶺昌一、于レ時武田勝頼天目山之麓、於二田野一御生害之砌、敵射二塞水道一之故、殆困窮、此日爲二夫人之使一行、皆云女人者敵不レ可レ有レ射、卽日汲二水一荷一、進二君及諸士一云々、勝頼手賜二甲金幷銀錢一、今猶藏レ家云々、その甲金は壹分金六枚あり銀錢は永樂十五文なり今に家藏せり

敢て豐臣家に始るにもあらず同十五年太閤九州發向の時の行列に金錢を紅の緒につなぎて一貫づゝ五人肩にかけて持たしめられし事あり

〔多門院日記〕天正十五年三月三日の條に關白殿朔日に出馬一數也馬數三千惣人數二萬五千餘云々金子の料足(新イ)クレナキノ緒ニテツナギテ一貫ヅゝ五人ワイガケニ被レ持レ之金銀ヲ負タル馬十六匹云々本願寺幷京堺ノ德人以下多勢御伴ニ被レ召具レ之云々按にワイガケとは脇に掛けるにて肩にかけし事なるなり

又其頃聚樂にて長曾我部元親茶を奉りし時は元親の侍女へ太閤金錢一文を與へられ御相伴の衆は惡錢一文づゝ出せしとぞ

〔長曾我部元親記〕に聚樂ニテ書院申之事數寄屋ノ構御用意ハ宗益馳走イタス御相伴ハ富田將監稻葉兵庫頭樂院也此小路地ニ御茶屋ヲ立女二人店屋ノ者ニ出立セ置タリ扨ソコヲ御通被レ成候處ヲ此女出合テチト御腰ヲカケラレ候ヘ殿樣ト申イヤ急候ト宣テ御通被レ成候處ヲ是非ト申イダキ入餅キコシサレ候ヘト上ル三人ノ衆モ同前ニ餅一ツ宛デンガク一クシヅゝ參リ御茶キコシメス餅ノ錢ヲ被レ下候ヘト申ケレバ御腰ノ邊ヨリ金錢一文被レ下タリ今一人ノ女デンカクノ主ハ此ヤクニテ御座候是非被レ下候ヘト二人シテ一人ヅゝコヒ取タリ三人ノ衆ハ此主錢過分ノ代ナリトテ錢ヲ出サズ通ントセラルゝ處ヲムリニ取付錢トラデハ通シ申間敷ト申其時三人惡錢一文ヅゝ被レ出タリ是ハ都ニテ見馴ヌ錢ナリ扨々田舍人ガ比興モノ也此錢替テクレヨトムシリ付三人ノコヲニグル太閤樣ハ見歸リ給ヒテヤレニガスナヨト宣テ大咲シテ數寄屋ヘ御入被レ成候シ扨會席御茶過書院ヘ御移被レ成候進物ノ事金子卅枚御小袖卅猩々緋廿枚也終日ノ御遊山樂院ハ碁ヲ被レ遊事ノ外ナル御機嫌也從ニ太閤樣一御土產ト有レ之米千石拜領則與州ノ御藏入ヨリ渡ル云々

文祿元年四月太閤朝鮮の役に沿途藝州嚴島神前において諸軍をいさめんがため試に永樂錢六貫文を擲れしに其錢悉く陽面のみ現れたれば勝利無レ疑と喜ばれける由いへり

〔武德編年集成〕文祿元壬辰年四月上旬秀吉藝州廣島ニ至リ嚴島ニ遊ブ且青蛟一貫文ヲ以テ神前ニ抛テ其錢ノ陽面悉ク顯レ下ニナル事ナクンバ異域退治利掌ノ內ニ有ルベキ由宣フ則一士ヲシテ之ヲ抛散サシム處ニ悉ク陽面顯然タリ衆皆驚キ大ニ欣悅ス蓋シ二錢ヲ以テ合テ一錢トナス故永樂通寶ノ四字兩面ニ存ス今ニ此青蛟嚴島ノ神庫ニ藏テ在リト云々

同二年八月太閤歸陣の時金銀の鳥目を大坂へかへされし事見えたれば嚴島神前の抛錢も尋常のものにあらざること知べし

〔多門院日記〕文祿二年八月廿二日の條に昨日比ナゴヤヨリ聖慶歸トテ尊議被レ語候太閤御歸必定必定年レ去ベ少ノ手間可レ入云々先ヘ小西助世ト云者奉行ニテ金子一萬枚銀子三萬枚金銀ノ鳥目色々ノ財ヲ大坂ヘ被レ歸了云々

朔曆の初までも世に銀錢を貯へしものもありしにや

〔洞房語園〕に一とせ淺草御門より御茶の水通りまで御堀普請ありし砌吉原も人多く入込賑ひしとなり折節夏の事にて冷水を賣歩行く童顏のありしに或客人中の町にて水を望て呑み袂より銀錢を十文計取出し彼冷水賣に給る水賣の童顏は光る錢をもらひ肝を潰し宿へ駈て歸り親共へ見せければ親共も興がる事とおもひ近所の者も持歩行て見けり是は歷々の御方と見えて駕籠にて通らるゝ時もあり又草履にて微行ある節も有云々按に此堀割は明曆火災以前の事にして五町町今の二町邊にありし時の事也是俗本といへども時勢を見るに足る

今某侯東海道經過の時同朋銀錢を腰にして箱根山中の醴酒(あまさけ)を賣ものに與へ給ふこと例なりといふ

例に三文を賜ふ其醴店を永樂屋といふ店主もし銀錢を好まざれば一文を銀二匁に換へ與ふともあり是等金銀錢の用途を參考すべし

〔附〕天正十八年　神君より武州多摩郡平(タヒラ)村の農夫へ洪武通寶の金錢を賜ひし事あり金洪武の事考聞とすべし

〔調布日記〕武藏多摩郡平(タヒラ)村の農家小野傳太郎が先祖のもの天正十八年神君御入國の時小田原の城より川越の城の方に

錢錄卷第三終

錢錄卷第四

精錢

精錢は惡錢に對しての名目なり永正の錢定にセイセン之儀とあるは是なり

永祿十二年織田家の定書には精撰と書せり按にセイセンはもと制錢と書べきか制錢とは公錢官錢の事なり

善錢の內にて一文遣の撰錢(えりせん)をさしていひし事にて則歷代錢定の條に載する撰かたを考べし精錢の外はみな惡錢と知べし

〔大內家法〕に關の渡錢の事を載す精錢とはいはざれど既に壹文遣あるときは精錢に疑なし姑く此に載せて併せて錢價を見る

定

條々

赤間關　小倉　門司　赤坂のわたりちんの事

一せきと小倉との間三文

一せきともじとの間壹文

一せきと赤坂との間貳文

一よろひからひつ十九文

一長からひつ　十五文

一馬一疋　十五文

一こし一ちやう十五文

一犬一疋　十文

以上八ヶ條

右わたりちんの事前々より定おかるゝといへども舟かたども御法をやぶりふちかへをかまへ上下往來の人にわづらひをなすと云々

所詮關舟はこくらにて一人別二文あぐる事あるべからず先年色々御尋之時此あげせんの事は申出さぬ事也只今關の町太郎右衞門次郎三郎阿彌陀寺領次郎右衞門初而申上者也彼是に付かたく御法を定おかるゝ所也風波之時いひロロロまゝに舟かたどもちんを取によりて每度御法度やぶるゝなりたとひ風波の時も此御法たるべき也若此御定をそむきわたりの人をなやます事あらば其舟かたを關小倉之代官の所へ可二引渡一代官の所より山口へ致二注進一たらんとき子細をたづねきはめ切らせらるべき也仍上知如レ件

文明十九年四月廿日　大炊助判弘口　近江守同房行　沙彌同宗首　彈正忠同弘規　大藏少輔同弘胤

〔奉使小錄〕武州多摩郡より出せる天正廿年の古文書を載す左の如し

一京よりは　京大坂よりなごや迄つき馬次夫の事　關白殿御朱印

一大坂よりは　北政所殿御朱印

一なごやよりは　太閤樣御朱印

一右の所々に一文つかひの精錢百貫文宛被レ置候條次馬つぎ飛脚如二御定一可二相渡一候事

一馬には一里に付て精錢拾文宛十里の分合百文哉之事

一次夫一人一里に付て四文宛十里の分合四拾文哉之事

此間五ヶ條有レ之略レ之

右條々堅被二相定置一訖若於二相背一は可レ被レ處二嚴科一者也

天正廿年八月日　太閤朱印

大坂よりなごやへ次舟

一大坂よりは　北政所殿御印

一「京よりは」カ　關白殿御朱印

一なごやよりは　太閤樣御朱印

一右浦々に一文遣し精錢百貫文宛被レ置候は次舟に可レ被レ下ために候但奉行相紛惡錢被レ遣候は御定のごとく何錢にても增を入可二受取一候事

一次舟四たんぼたるべく候一艘一里に付て右の公用廿文十里の分合貳百文哉之事

此次一條有レ之略レ之

天正二十年八月日　朱印　兵庫

錢定之部

惡錢附

永正五年八月七日の定に

此全文錢定の部に載す

アク錢賣買儀一切可二停止一事と見え

〔和長記〕に文龜三年五月廿三日今朝自二御藏一要脚御請取了惡錢過半也

〔甲陽軍鑑〕に載する天文十六年六月甲州法度の次第五十ヶ條可内四十二ヶ條目に惡錢の事は立二市中之外二不レ可レ撰レ之と見えたり〔甲斐國志〕に武田の文書に鐵炮玉ノ御用候惡錢有レ之儘可レ被レ納候黃金成共郡内ノ棟別成共望次第可レ被二下置一者也

川口御師二藏ムル永祿二年小山田の印書に甲州惡錢法度幷新錢等ノ儀ハ一切被二停止一中略富士參詣ノ道者惡錢ヲ持參爲二寂花一神前へ投入候云々從二當年一爲レ改二新錢一參詣ノ口々ハ可二居置一奉行トアリ

〔多門院日記〕に永祿十一年十二月五日三條源二郎よりコフ五卷國見ヤケニ來了間惡錢八百文遣處布一タン來了

慶長十一年七月の御定に新惡錢は撰可レ申事と載せられ元和二年の御定に新惡錢は撰べき由見えたり俱に錢定の條に全錢を出したり寛永十三年六月寛永錢を鑄られし時の御定に今度新錢被二仰付一上は但雖レ爲二有來一惡錢は或は禱錢或に散錢等にも不レ可二取扱一事とも見えたり

鑑錢

鑑錢とは永樂錢の精好なるに對すれば唐土歷代の古錢は漫濫なるを以「びた」と名づけしなりびたとは夷漫するものを俗にびつたりといふより出たりもと永樂に相對するの名なれば歷代の古錢潮惡ならざるをも概して此名をかうむらしめし也これによりて金偏に惡の字を書して用ひしなり

されば鑑の名は永樂通用の後に出るなり今に至て勘定帳に鑑錢文と記するは直一の義にして永樂の當四に別てるなり

〔多門院日記〕天正七年八月二十七日の條に蜜三斤代ビタ一貫貳百文ニ取了八年正月九日の條に蜜上ル三斤三十目ヲビタ一貫四百文米ニテハ四斗九升ニ當ル同十四年四月四日の條に金五十五石六合銀六石一二斗ビタ八斗五升

〔宇都宮氏所藏文書〕天正十八年八月秀吉公印書全文永樂錢の部に載レ之永樂錢の事金子壹枚に

貳拾貫宛びた錢に永樂一錢に三錢立らるべき事

〔令條〕慶長十三年十二月八日御定の高札全文前の永樂錢の部に載レ之

一永樂壹貫文は鑑錢四貫文宛の積たるべし

但向後永樂錢は一切取あつかふべからず金銀鑑錢を以可二引取一事

一金子壹兩に鑑錢四貫文可二取引一事

〔嚴制錄〕慶長十九年十月十九日大坂御陣之時高札三ヶ條の内

定

一路次中宿に木錢の事宿主の薪を燒に付てはびた三文宛たるべし馬壹疋には六文宛たるべし

但自分に薪を求燒においては宿賃は出べからざる事

〔東武實錄〕元和二年五月諸大名へ觸遣趣

急度申入候御定の鑑錢にて路次筋米大豆賣買いたすに付て往來の者迷惑仕之由候就其道筋御藏入の所々へ米大豆相渡うらせ其びた錢を御藏え納申候間各も時の相場を以うらせ候てびた錢を自分藏え納尤候高札の案別紙遣候間領内堅申付可レ被二相定一候委細は高室金兵衛殿川勝次郎可レ爲二演說一候謹言

本多上野介正純

元和二五月十一日　外連署七人

〔御定書〕東海道伊勢關の宿の本陣川北某が家に傳ふる所の元和二年霜月の令五ヶ條の内

一關より坂の下迄上下荷物壹駄に付びた錢三拾七文龜山へ二拾五文幷歸馬の駄賃錢も右同前の事

一御定之外增錢取もの於レ有レ之者此町中より過錢として家一間に付てびた錢百文づゝ可レ出レ之但當人は五十日可レ爲二牢者一事

〔嚴制錄〕元和二年五月十一日惡錢えらび高札全文錢定の部に載レ之金子壹分に壹貫文賣買たるべし

〔令條〕元和四年二月十二日覺書全文錢定の部に載レ之最前御定之ごとく金子壹兩に四貫文之賣買致べし若御法度を背高下之賣買致候者有レ之ば其賣買之錢金過料として双方より可レ出事

〔同上〕寛永二年八月二十七日御定（全文錢定の部に載せ之）
二錢の賣買金子一兩に四貫文御定之上は勿論金
子壹分に壹貫文たるべき事
此旨を背高下之賣買仕においては御定之通
違背之方よりうりかふ錢金一倍可レ出之事
（頭書）〔そゝろ物語〕天正十九卯年云々錢瓶橋に
せんとう風呂を一つ立つ風呂錢は永樂一錢なり（前の永樂の條に出す）今は町毎に風呂ありひた十五錢三十錢づゝにて入也湯などいひてなまめける女共二十
人三十人ならび居ことあるをかき髪をそく云々
又京錢ともいふ按に〔中古治亂記〕に天文十九年云々
是より後は永樂錢ヲツカヒテ鐚ヲエリ出シケルユエ
鐚ハ自ラ捨リテ上方ヘ上リシユエ此後ハ鐚ヲ京錢ト
申ストカヤ云々見えたり〔治亂記〕は僞作にして取がたきこと多けれども京錢の說は古老の遺聞なるべしされども永正に京錢の名目あれば天文に係るは誤なり慶長十三年十二月八日の
高札金子壹兩に鐚錢四貫文可ニ取引一事とあるを翌十
四年七月十九日の添高札に金子壹兩に京錢可レ爲ニ四
貫文一と載せられたるにて京錢は則鐚錢なる事明ら
むべき也
〔建武式目追加〕永正五年八月七日錢定の〔高札〕
を載す（全文は錢定の部に出す）
せいせんの錢京錢打ひしめをのぞく其外の渡唐
錢永樂洪武宣德われ錢以下取合て百文に三十二
錢於ニ向後一は可ニ取渡一事（全文錢定の部に載せ之）
〔昆陽漫錄〕三州藤川驛の問屋某が出す所の慶長
二酉年二月の〔古文書〕急度申越候仍路次中人足
一人に付一里に京錢八文宛取可レ申候但一日半
分の積り也
丙二月十六日　本上野
外連署四人
（頭書）按に天正十四年北條家の時關東驛馬
一里一錢永樂なり前に見ゆ
〔令條〕慶長十四年七月十九日〔添高札〕（全文前の永樂錢の部に載せ之）
一金子一兩は京錢可レ爲ニ四貫文一但なまり錢かたなし大われ新錢へつら錢此五錢の外は撰申間敷事
〔令條〕に載する駄賃の〔高札〕
定
一從ニ江戸一品川迄上下駄賃荷物一駄四十五貫目

に付京錢二十六文同板橋へ三十文たるべき事
慶長十六年亥七月日　伊賀守
清右衞門
石見守
〔文書〕常陸鹿島社大宮司所藏
京都江御使者ニ就ニ罷登一寺社中出錢覺之事
金三分京錢四貫七十二文請取申事實正也
慶長拾九甲寅霜月廿七日　惣追秀定判
大宮司樣江進上
〔嚴制錄〕元和三年五月御上洛の時宿賃觸
急度令レ啓候路次筋木錢之儀一人に付て京錢四
文馬一疋に同八文之積に宿賃相濟すべし其通諸
宿々え可レ被ニ申觸一候次旅人自分之薪を燒候に
付ては木錢ともに右之半分可レ出レ之就レ中先年
被ニ仰出一候料足えらび不レ申樣に堅可レ被ニ申
付一候恐々謹言
安藤對馬守
五月二十日　土井大炊頭
酒井雅樂頭
〔昆陽漫錄〕萬治元年下總國布川村川論ノ繪圖ノ
裏書ニ金一兩二分京錢貳百五十文トアレバ關東
ニテハ此頃マデ京錢ト云トミエタリ
又並錢ともいふ普通の錢といふ義なるべし
攝州四天王寺三綱秋野房所藏天正十一年七月十
一日豐臣太閤〔判書〕天王寺三綱堂爲ニ奉加一並錢
五百文遣候間其津地子錢之取ニ納之一彼寺へ可
レ被ニ相渡一者也仍如レ件
後又薄錢ともいふ永樂の厚きに對しての名なるべ
し
文政□年□月松前□□にて永樂錢□數十品を堀出
せりみな永樂新渡の頃收貯せしものと見え輪郭峻
整にして久しく世に傳はりて通用せるものにあら
ず試に永樂丁酉を量るに厚さ四寸九分ありき是み
な厚薄を比較するに足る
〔神禮日記〕常陸府中稅所所藏也天正四年六月の
記を載せて云かほと（甲）其外ふうはいでむなどへは（奉）（幣）（殿）
五せんばかりほどつゝませ又三錢ほどのつゝみ（計）（程）（包）
廿許も用意候へば布幾のみに太夫に出し與レ之（マヽ）（錢）（洲）
代はうすせんにてもくるしからず候

〔慶長年錄〕十年五月朔日諸大名衆御祝儀之御禮有レ之上方大名は銀子小袖を上御譜代衆は太刀折紙馬代は薄錢三百疋也同十三年八月廿日駿河殿守打槌大工中井大和守給祿薄錢千貫文銀子袋八ツ一袋廿枚入二太刀一等也十二月此冬江戸永樂錢を捨て薄錢を可レ用之由被二仰付一云々

以上通考すれば寛永通寶新錢の前に世に通用するところの鐚諸錢概見すべし下に載する筑前大隅水戸より天正慶長元和諸錢も概して鐚錢の內なるべし今其估價幷に令條を左に開列して參考に便す

天正十八〔宇都宮氏文書〕永樂一錢に鐚三錢〔北條五代記〕永樂一錢に鐚四錢五錢

慶長十三〔令條〕永樂一貫文は鐚錢四貫文〔金子壹兩に鐚錢四貫文〕同十四〔令條〕金子壹兩に京錢四貫文

元和二〔殿制錄〕金子壹分に壹貫文同四〔令條〕金子壹兩に四貫文

寛永二〔令條〕金子壹兩に四貫文壹分に壹貫文

日本鑄鐚錢

中古以來永樂錢鐚錢並び行はれしより此際にても鐚を私鑄せしことゝ見ゆ是等の類なるべし

〔事跡合考〕古老語て云凡寛永十三年以來寛永通寶の新錢日本七ヶ所において鑄させられ關東筋江戸表にそれまで通用したり奥州鑄出しの鐚錢停止被二仰付一候云々〔鑄錢考〕足利ノ頃ヨリガ夫ヨリモ以往ヨリカ奥州相馬ヨリ鐚錢トテ下品ノ鐵錢ヲ鑄出シテ坂東及ビ伊豆駿河ニテモ通用シタリ是ハ山中ニテ鐵ヲ得テ鉛分ル時上澄ヲ「ヅク」ト云フ鍋釜ニスル尤下品ナリ中澄ヲ「ビタ」ト云下品少宜シ釘ナドニスル底澄ヲ「マツウリ」ト云フ萬ノ用具ニ作ル然ルニ其ビタニテ錢眼ヲモ丸クシテ至テ麁相ノ錢ナリ其孔ノ丸クテ鳩ノ目ニ似タルユヱ民間「ハトノメ」トモ唱ヘタリ寛永錢出來テヨリ「ビタ」錢停止セラレテ長ク絶タリ云々今按に寛永錢以前に鐵錢ありし事前聞せざる所也又鐚を鳩の目といひし事も他書に見ることなし〔泉葉〕伊勢の宮錢を載て鉛錢鳩目と錄したり守重これを伊勢春木氏に問ふに答へて云鳩の目鉛錢は姓氏私鑄のものにて官幣になるものに無レ之貞享二年十一月官より停止せられたりといへり又〔中山傳信錄〕明人の錄を引て云、國中用二黑銅錢一極輕少、千不レ盈レ掬、凡五貫折銀一錢、則其來已久、本國稱爲二鳩字錢一云、これ彼土にても惡錢を鳩の字といふなり

筑前洪武錢

右年代不レ知筑前にて鑄る所なり按に武備志日本考に花旭塔（カタ）津、筑前州所屬地方廣濶、人煙湊集、中國海商、無レ不レ聚二此地一、有二松林一、方長十里、土名二法哥煞（ハヨサキ）機一、乃廂先也、有二一街一、名二太唐街一、唐人留レ彼、相傳今盡爲レ倭也、貿易用二銀金銅錢一、憑レ經紀レ名、曰二乃隔（カヨ）依理一、錢鑄二天順永樂洪武一、

樣自二琉球高麗一得レ之、按に〔中山傳信錄〕に市中交易、用レ錢無二銀錢一、無二輪郭一、間有二舊錢一、如二鴛眼一、大磨漫處、或有二洪武字一、已絶少、とあり是は筑前洪武の琉球へ渡りしなるか或は琉球にて洪武を鑄たるか知るべからず

銀一兩換二三百三十文一、零用二三文一、抵二一分總錢千一稱二一貫一云々、湧幢小品に倭島用二銅錢一、只鑄二洪武通寶永樂通寶一、若自鑄、其國年號不レ能レ成、

大隅加治木錢

右年代未詳ならず按に和漢三才圖繪大隅の下に原本ノマヽ、

|

とあれば元祿の頃までも鑄たる事なるにや〔泉葉〕天正年中ヨリ元祿ノ頃マデ大隅國加治木錢ヲ鑄タリ文ハ洪武又ハ天中ヲ用ヒ背ニ加治木ノ地名ヲ分チ鑄ルナリ

天正通寶錢

右天正年中豐臣家にて鑄る所なりといふ〔錢譜〕に十五年とするは何の據をまらず或は云上の一品は　後陽成帝の宸筆なりと異朝の諸帝錢文宸筆の例に倣はれし御事なるべしその宸筆のもの宋太宗淳化錢に始る是を御書錢と云しなり　金銀錢はもと戰場において褒美のため也といへば此錢も賞賜の用に鑄られし所なるべし

文祿通寶銀錢

右文祿年中に鑄る所なりといふ〔錢譜〕に文祿元年鑄といふ何の據をまらず此錢も天正錢と同じく賞賜の用なるべし然れば豐臣家のものならん

慶長通寶錢

右慶長年中鑄る所なりといふ

〔鑄錢考〕豐臣太閤存在ノ日慶長元二ノ間大坂ニシテ慶長通寶錢ヲ鑄ト云フ彼公同三年薨去同五年關ケ原大役此鑄錢總ナルユヱ世ニ殘ルコトモ尤少ク寛永錢ヨリハ尤下品ナリ〔南嶺子〕慶長十一年十二月八日慶長通寶錢を鑄て永樂錢の通用を禁ぜらる是永樂錢の撰强く萬民やすからざるが故なりと見えたり南嶺子往々杜撰あれば全くは信ずるに足らず天野氏が鹽尻に慶長十一年十二月十八日我關東東都に令を出し永樂錢を用る事を禁じ給ひ我國錢を鑄て行はれし慶長通寶是なりとも見ゆ何の據を知らず清人の〔歷代鍾官圖經〕日本錢の部に慶長通寶を載せて朱彝尊〔曝書亭集〕〔吾妻鏡〕跋未詳撰人有慶長十年序係明萬曆二十三年とあれば此錢西土へも渡りしなり

常陸水戸錢

（圖缺）

右慶長初年に水戸にて鑄る所なり〔常陸志料〕本國の父老相傳ふ慶長年中武田信吉君水戸に封せられし時守屋接に信吉君は神君の第八子にして武田姓を賜はれ慶長七年十二月下總佐倉十萬石より常陸水戸城十五萬石に轉封せらるる多く銅錢を鑄る皆宋朝の錢文に從ふと云蓋し異錢家の所謂水戸手といふもの是なり一說に蒲生氏郷水戸を領せし時これを鑄といふは誤なり氏郷水戸に封せられし事あることなし

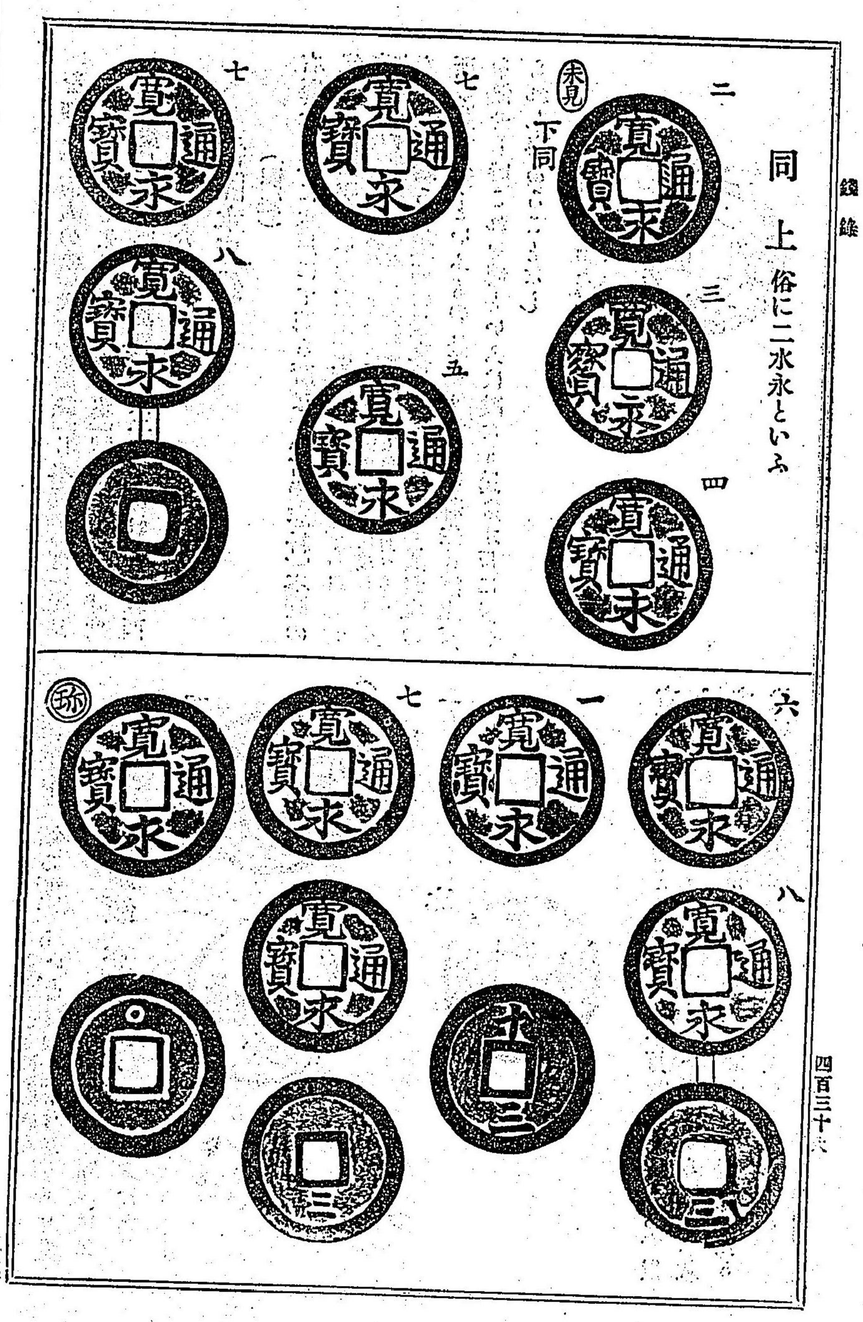
元和通寶錢

右元和年中に鑄る所なり〔錢譜〕に元和元年鑄といふ何の據を知らず

寛永古鑄錢　俗に二水永といふ

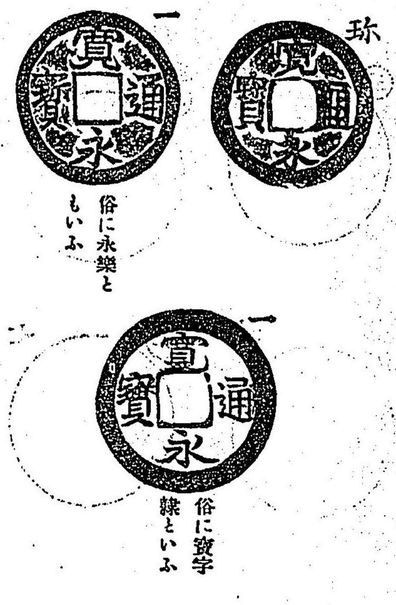
右寛永初年に鑄ところといふ年月及鑄所詳ならず但上三品は銀錢下一品は銅錢なり今審にするに後に載する二水と書法同じからず頗元和錢の字樣に似たり然れば此錢寛永の最初年に鑄しものなるべし

同上 俗に二水永といふ



右寛永初年に鑄る所なり年月及鑄所詳ならず

同上



是も寛永十三年前に鑄る所なり年月及鑄る所詳ならず

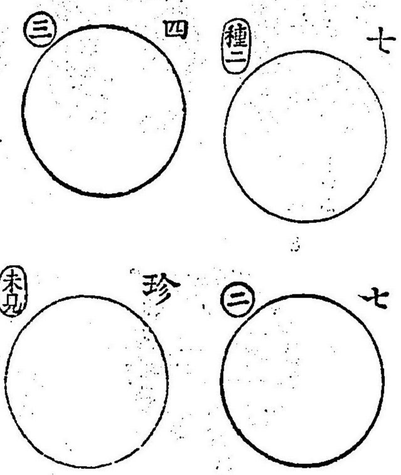
按〔常陸志料〕寛永二年乙丑水戸田町の富商佐藤新助といふもの寛永新錢を鑄て世用に充たき由内許を得て出府し願濟のうへ水戸において寛永通寶を鑄る是新錢を鑄の最初とす故に當時の諸國名物記にも寛永新錢水戸に於てこれを鑄と注せり新助沒後其子清兵衛後庄兵衛幼少に依て中絶す同十二年父新助の例を以再鑄の事を江府へ願ひ水戸下町の烟草町に錢座を再興し新錢を鑄る云々とあり是を見れば寛永の初水戸にて鑄錢ありし事疑を容ず但水戸のみ鑄錢あるべきにもあらざれば當時諸方にても鑄錢ありしなるべし右に載する數錢是等の錢子なるにや

錢錄卷第四終

錢錄卷第五（原本三）

寛永江戸橋場錢

俗に御藏錢又志津摩手といふ此錢字體數樣あり極めて盡すべからず



右傍に數字を注するものは通用中の多寡を示すなり珍の字を注するものは見る所一品に過ざるものなり左傍圈中に數字を註したるは範錢の世に存するもの丶多少を示すなり重圈のものは雕範又は沙鑞範なり下倣レ之

右寛永十三年按〔寛永年錄〕十三年寛永の新錢被レ爲レ鑄〔治世略記〕十三年初て寛永の新錢を鑄と云り江戸淺草橋場に錢座を建られ本橋場村神明社の東北の地なり今田畑となる猶字して錢座といふ座人は秋田屋小左衛門末吉與右衛門丸田屋文右衛門鑄ところの錢なり

錢文佐々木志津摩書に志津摩は京師の人書博士藤木甲斐守が門人なり或云朝鮮人新泉堂に學ぶと石川正西が〔聞見集〕に昔より日本國中所々においてあるいは錢或永樂錢奥州南部などにてかたなし錢などとて色々かはり金銀に賣買不同有レ之て六ヶ鋪候つれども寛永通寶新錢に被二仰付一京ゐなか同事に罷成候云々

〔令條〕錢定の高札を載す左のごとし

定

一寛永の新錢幷古錢共に金子壹兩に四貫文勿論壹分には可レ爲二壹貫文之賣買一若違背いたし高下之うりかひ仕においては双方より其賣買之代一倍過料として可レ出レ之其町之年寄貳百疋其外は家一間より拾疋づ丶爲二過怠一可レ出レ之事

一大かけ、われ、かたなし、ころ錢、なまり錢、惡錢、此外撰べからず若撰者六錢を押してつかふものの有レ之者或其所に三日さらし或十日籠舍たるべし其町へ過料同前之事

一新錢江戸幷近江坂本にて被二仰付一之間兩所之外一切不レ可二鑄出一之若違背之輩有レ之者可レ爲二曲事一事

一今度新錢被二仰付一上者縱雖レ爲二有來一惡錢は或禮錢或散錢等にも不レ可二取扱一事

一御領私領共に年貢收納等にも此御定之通不レ可二相背一事

右條々堅可二相守一之者也仍執達如レ件

寛永十三年六月朔日　奉行

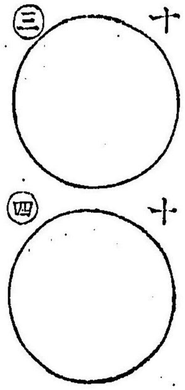
〔寛永日記〕十三年五月廿日御步行目付貳人錢之高札爲レ持大津迄罷登候に付銀子拾枚づ丶被レ下レ之とあるは此時の事なり錢定の高札は是より前慶長十一年七月元和二年五月同四年二月寛永二年八月是後明暦元年八月延寶二年二月元和二年五月ともに大同小異なり按に第一條古錢とは是迄通用し來る所の錢をいふ明暦以後のには並古錢の三字を除かれたるにて知るべしされども寛永錢行はれてより民間古錢を好まざりしと見えて〔不可德物語〕四條川原の事をいひし條に客にひかれて操の鼠戸に立よれば錢はといふ我に古錢はあれども寛永通寶なしとこたふ客こらへかね錢は此方にあり入らせ給へといふ云々其後古錢を用ひざりしにや〔藥師通夜物語〕料足一貫二貫を種として棒を荷ひ連尺肩にかける者古錢新錢のかはりに心うく思ひ云々とあり是その形勢を見るに足る金子壹兩に四貫文勿論壹分に可レ爲二壹貫文賣買一といへるは寛永錢いまだ鑄られざる前薄錢通用の時元和二年五月十一日に金子壹分に壹貫文之賣買たるべしと定められし古法を用ひられたるなり第二條六錢八錢定の部にも載す併せ考ふべし又新惡錢とあるを見れば世に私鑄の新錢もありしと見えたり第四條有來惡錢といふは歴代古錢の中において最薄少にして文字磨滅等の類をいふなるべし

寛永十七年八月に至て止む年數五箇年の間なり

〔常陸志料〕に據る詳に下の水戸錢の條に載す〔鑄錢重寶記〕年數四ヶ年とあり〔舊譜〕明暦中に至る

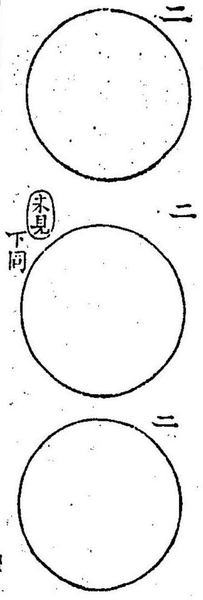
といふ今按るに十三年より明暦元年まで正保慶安承應を經て通計廿二年久に過るに似たり今志料重寶記の説に從ふ

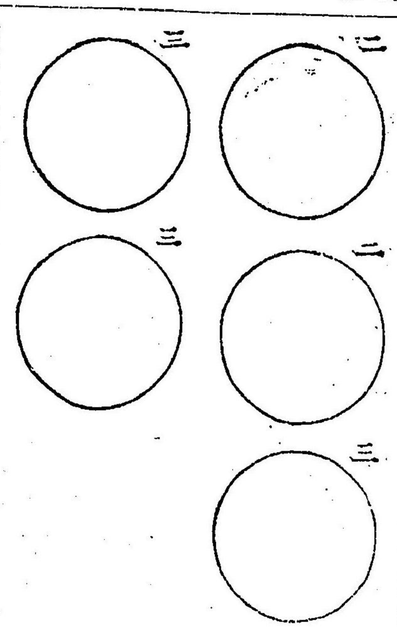
寛永江戸網繩手錢



右寛永十三年江戸芝網繩手後に新錢座といふ錢座にて鑄るところなり座人は鐵屋又右衛門郡司兵右衛門なり此時鳴海兵庫といふもの代々鑄錢の事心得たる由にて天海僧正水戸より呼寄られ新錢御用を勤るとし其由緒書に見ゆ〔續化蝶類苑〕而文は天海僧正の筆なりといふ

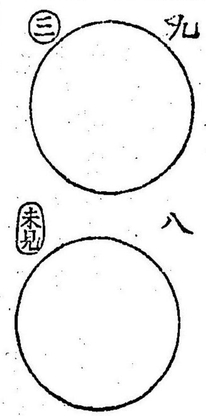
同背文錢





右寛永十三年網繩手の錢工戲鑄のものならん背文この他なほあるべし今見る所のみを出せり

寛永近江坂本錢



右寛永十三年六月近江國坂本にて鑄るところなり〔令條〕新錢江戸幷近江坂本にて被二仰付一と見ゆ全文前條に載レ之〔寛永日記〕十三年六月廿三日今度錢の御定に付上方道筋に石谷十藏島田五郎兵衛被レ可二差遣一之旨被二仰付一レ之と見え〔鶯峯文集〕に載する石谷十藏貞清行狀記に寛永十三年六月鑄二寛永通寶於二江州坂本一貞清承レ命往監レ之九月歸府とあれば此事石谷氏奉行せりと聞ゆ〔鑄錢重寶記〕吹人不レ知とあり

寛永常陸水戸錢未見

右寛永十四年閏八月より同十七年八月迄年數四箇年の間常陸國水戸にて鑄るところなり

〔舊譜〕十三年に係るは非なり〔令條分類〕寛永十三年十一月閣老より水戸中山氏えの書翰を載す左のごとし一筆申入候於二水戸御領分之内一寛永之新錢鑄させ可レ申之旨は則錢之本を差越候間被二仰付一出來次第如二御定一諸方えも拂候之尤候此由可レ被レ申候恐々謹言十一月廿六日猶以鑄レ錢候者之儀御計候間被二仰付一候樣尤存候以上〔常陸志料〕寛永十三年五月江戸において新に錢座御取立寛永通寶を鑄させらる其頃は水戸の外にも八ヶ所錢座御免あり不同大小なく數多鑄出すべきとの御事なり水戸には下町の外に上町へも錢座を立られ上金町の町人萩庭市左衛門和田與兵衛外五人おの〳〵自宅にて鑄るとこを許さる然るに其錢自ら大小不同ある を以て向井町片町といふ所へ錢座を定て一同に鑄出さしむ是より上町下町兩座にて盛に鑄立けるに諸國にて似せ錢を鑄出すもの多く又輕薄の品少からざるに依て同十七年八月江戸水戸其外八ヶ所の錢座悉く停止せらる但水戸にて鑄立置たる分之錢は田中三右衛門佐藤清兵衛兩人して諸方に弘めしむ其後私に鑄立るものあるによりて同二十年二月堅く禁せられければ以後絶て私に鑄るものなし令條當時鑄錢所九ヶ所を載す左に擧ぐ

鑄錢所

水戸　仙臺　吉田　松本　高田　長門　備前　豐後　中川内膳正領　内只今迄被二仰付一候分については諸方へ弘りかね候間代物澤山鑄させ其國は勿論他國にも御定のごとく金壹兩四貫文壹分に

壹貫文づゝ拂候樣に可二申付一候事
一寛永之新錢本を差越候間如レ此鑄させ可レ申事
一錢鑄申候者聞立領内勝手能所々にて可レ被二申付一候事
寛永十四年丑八月

按鑄錢考此時七ヶ所にて錢を鑄られしとぞ江州新錢座町京都七條河原とは違なり伏見にて鑄る安藝廣嶋　筑前博多　尾張名古屋　加州金澤　奥州仙臺とあり何の據を知らず誤なるべし

寛永三河吉田錢

七　三

右寛永十四年吉田新錢座にて鑄るところなり詳に水戸錢の條に見えたり

寛永信濃松本錢

八　四　七　未見

右寛永十四年信濃松本にて鑄るところなり

詳に水戸錢の條に見えたり〔舊譜〕十三年に係るは非なり〔奉使小錄〕寛永十三年十二月廿七日松本の藩臣神谷内匠等七人より今井勘右衞門といふものへ贈りし狀を載て云於二信州松本一新錢座望被二申付一而從二其方一書付を取申付候無二相違一急度用意たる可被二鑄立一候此上者餘人望申候共候貳口之外申付間敷候云々と有

寛永豐後岡錢未見

右寛永十四年中川内膳正領分岡の城下古町にて鑄るところなり詳に水戸錢の條に見えたり

寛永陸奥仙臺錢未見

寛永越後高田錢未見

寛永長門錢未見

寛永備前錢未見

寛永豐後錢未見

右いづれも寛永十四年に鑄るところなり事は水戸錢の條下に載す

寛永奈良錢

八　七　五　九　未見　同　同　同

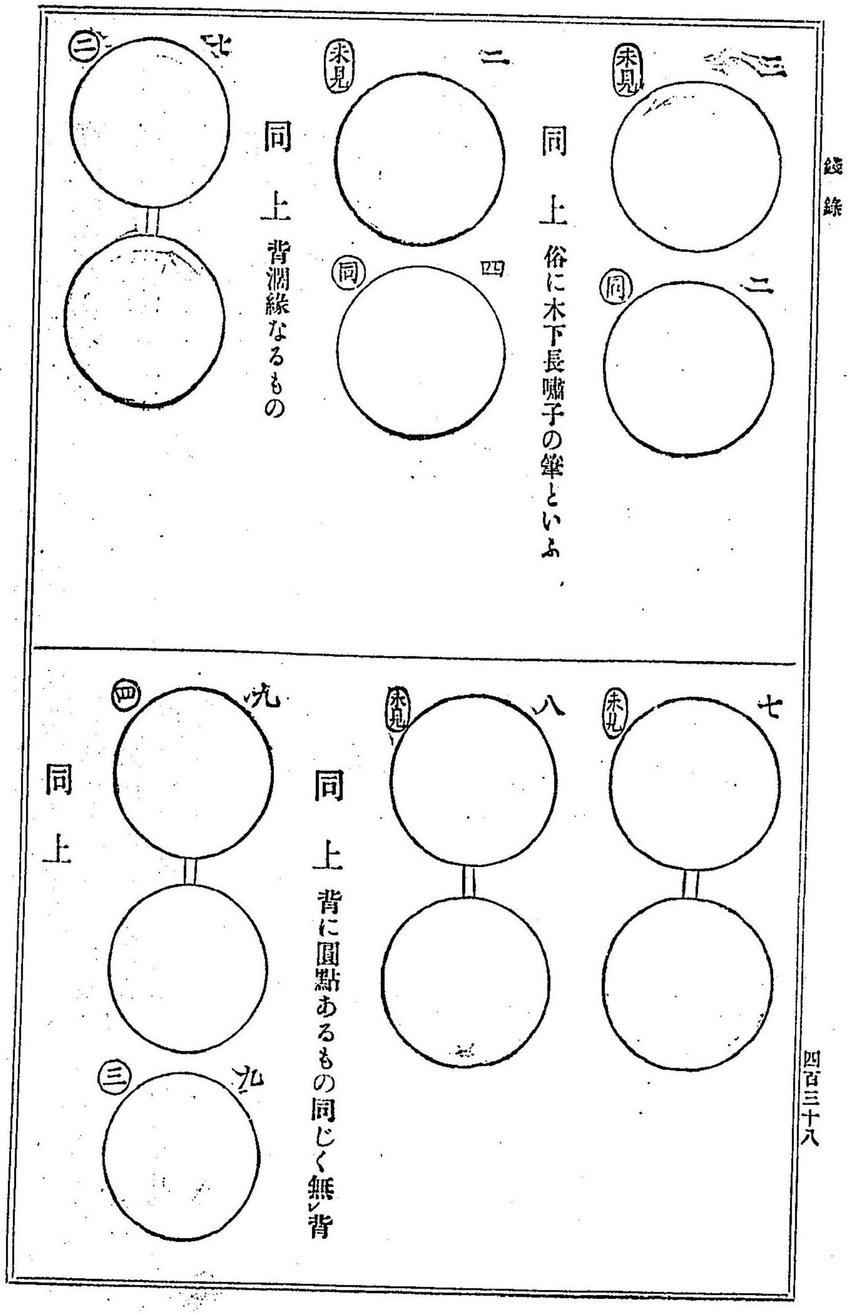
右〔舊譜〕寛永十三年奈良にて鑄るところといふ錢文藤木甲斐守敦直書す敦直は加茂の社人にして大師流書博士となる今の書博士保孝の祖なり按に奈良錢の事〔令條〕十四年九ヶ所の内に見る事なし疑ふらくば十三年近江松本鑄錢の時便宜に就て此所にても鑄錢ありしや今姑く舊譜に從ふ○附〔鑄錢重寶記〕京建仁寺幷粟田口にても鑄錢あり受負人郡司兵右衞門其始末いまだ詳ならず又肥前國にても鑄る吹人及始末未詳とあり按に兵右衞門は則江戸芝網繩手座のもの也所レ謂肥前は長崎をいふ歟

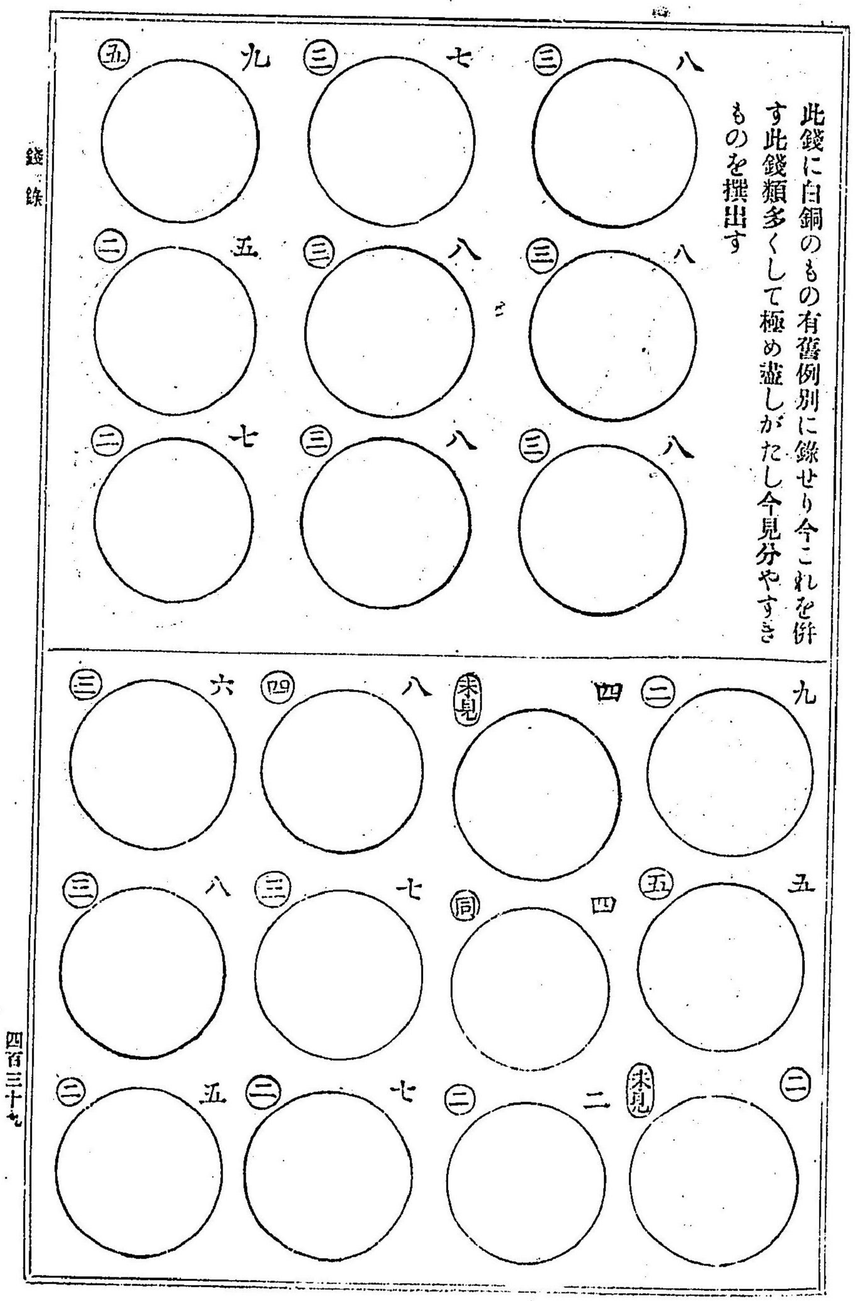
寛永駿河井之竈錢

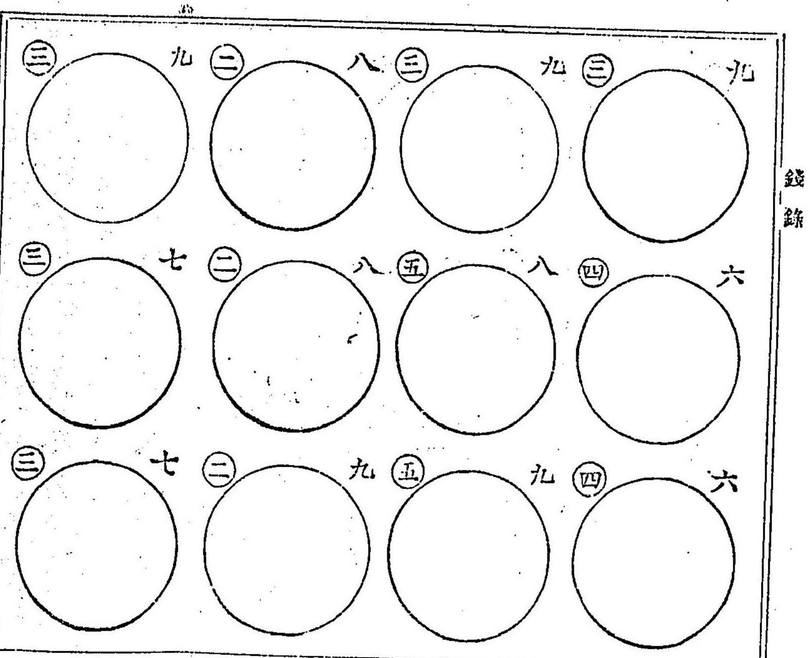
右寛永十六年駿河井之竈村にて鑄るところなり〔駿河國志補遺〕町方御由緒之事の條に寛永十六年當所鑄錢吹立御願申上候處願之通被レ爲二仰付一則井之竈村にて吹立仕町中潤に罷成候事と有

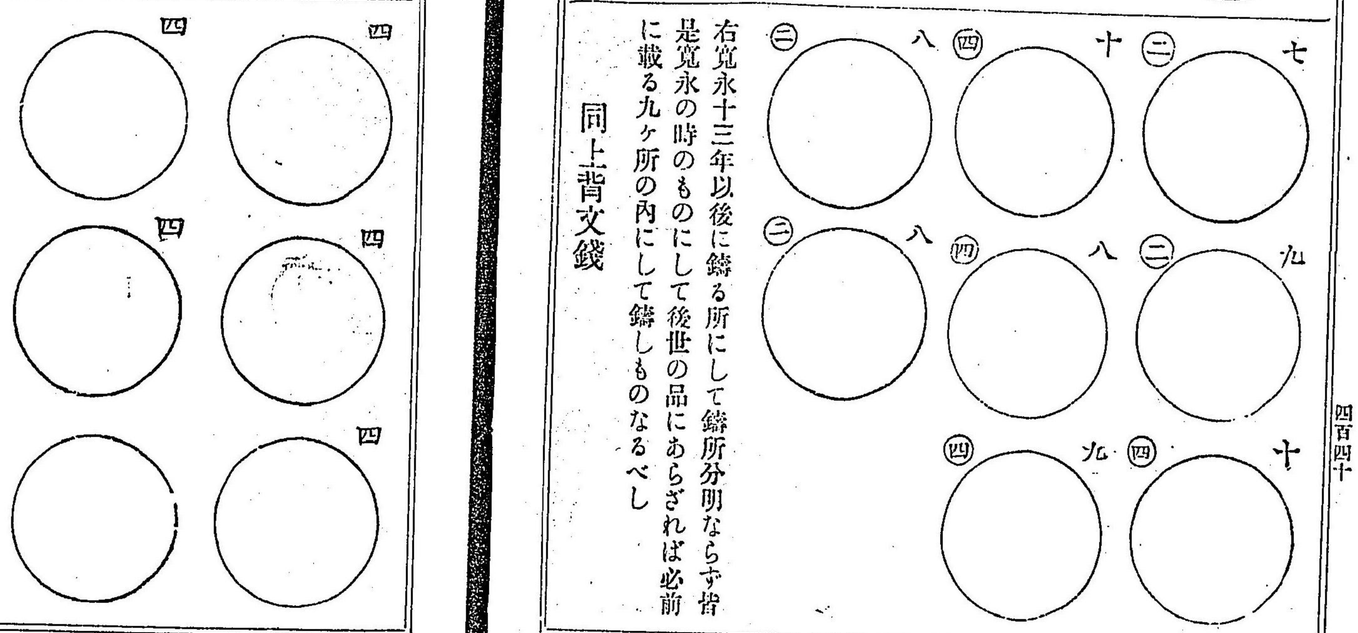
寛永鑄所不知品

上の品妓尾柳齋はじめて見出したるによりて俗に柳齋寛永といふ後又下の品出たり


未見 二
同 二
同上 俗に木下長嘯子の筆といふ
未見 二
同 四
同上 背淵緣なるもの
三 七
未見 七
未見 八
同上 背に圓點あるもの同じく無レ背
四 九
三 九

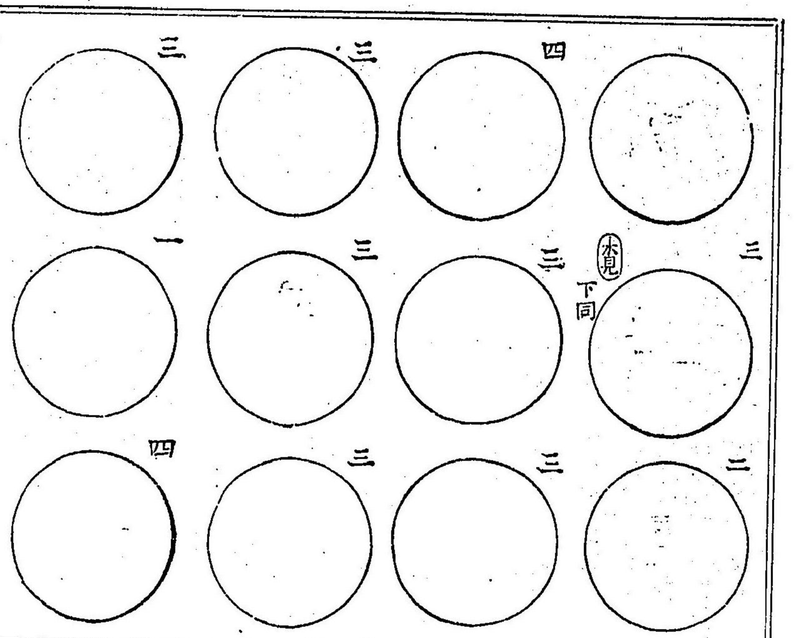

此錢に白銅のもの有舊例別に錄せり今これを併す此錢類多くして極め盡しがたし今見分やすきものを撰出す
三 八
三 七
五 九
三 八
三 八
二 五
三 八
三 七
二 七
二 九
未見 二
二 四
同 四
五 五
三 七
三 八
未見 八
四 六
三 六
二 五
二 七
二 二
未見 二
二 七
三 八





右寛永十三年以後に鑄る所にして鑄所分明ならず皆是寛永の時のものにして後世の品にあらざれば必前に載る九ヶ所の内にして鑄しものなるべし

同上背文錢



此背文錢右の錢を鑄し時鐵工の戯に鑄しものなるべし

明暦江戸鳥越錢未見

右明暦二年淺草鳥越にて鑄るところなり

〔談海〕明暦二年於二江戸淺草鳥越新錢座一被二仰付一

〔錢鑄重寶記〕江戸淺草鳥越錢座年數四ヶ年受負人長谷川壽貞辻宗覺とあり按に〔談海〕に寛永年中大筒を爲二御張一被レ成御鐵炮は石火矢宗覺公と見え

たる人なるべし又按に〔談海〕に據に四ヶ年は明暦二年より萬治二年にてなり延寶四年〔武鑑〕に御藏衆本烏越錢座跡に居と見えたるは此錢座の廢跡を云なり〔駿河國志補遺〕に明暦二年江戸にて三拾萬貫文駿河にて貳拾萬貫文鑄出したる事を載たるは則此錢なり又〔談海〕に明暦四年の落書の文を載せて其内の一條に錢不足に御座候に付萬民迷惑仕候間江戸の中程にて錢鑄申候樣に被仰付奉公人之分者壹兩に付四貫文之賣買被仰付一切貨者壹兩に付四分宛に御定候ば小賣買潤澤にして可宜と奉存候事とあり烏越は其時いまだ邊鄙なればかくいひしにや其吹高も寛永に比すれば多き事なきを以此流言ありし成べし

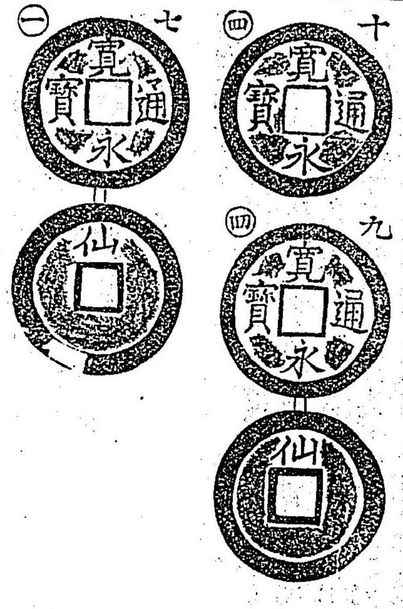
明暦駿河沓谷錢未見

右明暦二年駿河有渡郡沓谷村にて鑄るところなり〔駿河國志補遺〕町方御由緒之事之條に明暦二申年錢鑄吹立奉願上候處先達て江戸町へ五十萬貫文吹立被仰付候に付又候駿府之者共へ被仰付儀難被遊由にて右五十萬貫文之内貳拾万萬貫駿府之者へ被仰付則沓谷村にて吹立申候其節當所錢相場金壹兩に付三貫壹貳百文仕候處新錢四貫文替に御拂被爲遊候其餘は町中御救に能成候事とあり

錢錄卷第五終（原本四舉）

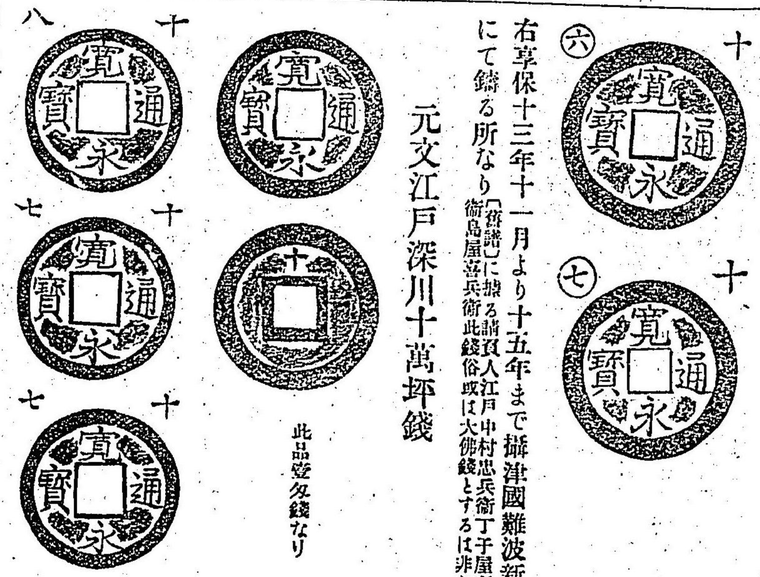
錢錄卷第六

享保陸奥仙臺錢



右享保十三年正月より十七年十二月に至まで仙臺石卷にて鑄る所なり受負人江戸瀬川八十次田中惣七家城太郎次或云通用に鑄しものは背文なし背に仙の字あるは百文づゝなつぎし兩端を狹み吹高六ヶ年の間に四拾萬貫文重壹匁の定なり〔錢錄重寶記〕に據る

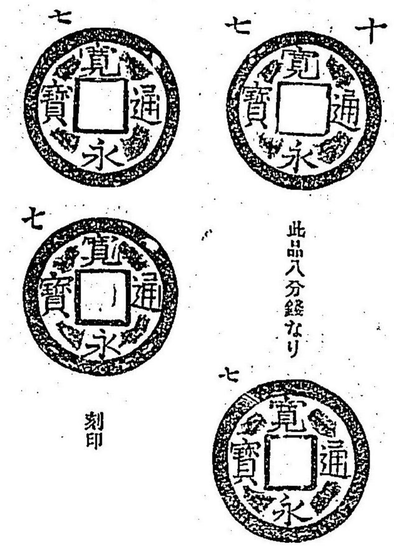
享保攝津難波錢



右享保十三年十一月より十五年まで攝津國難波新地にて鑄る所なり〔雜誌〕に據る請負人江戸中村忠兵衛丁子屋喜兵衛島屋喜兵衛此錢俗或は大佛錢とするは非なり

元文江戸深川十萬坪錢

此品壹匁錢なり



此品八分錢なり

刻印

右元文元年より

五月十五日准許○按に〔正寶錄〕五月八日の市令を載せて鬼錢高直に付鑄錢被二仰付一候間可レ得二其旨一事辰五月とあり八日に市令あるものを十五日に准許すべきやうなし他日決すべし〔元文日記〕元年六月十四日金銀吹替鑄錢御用被二仰付一輩御勘定與頭中嶋與一郎とあり此時の事なるか

同五年まで深川十萬坪にて鑄る所にして受負人橋本平七郎名代橋本市兵衛中西五郎兵衛千田庄兵衛〔正寶錄〕六月廿四日の市令歲額十萬貫文六月廿五日より

に錢高直に付先達て鑄錢被二仰付一明廿五日より吹出候間末々迄相心得候樣可レ被二申聞一旨大岡越前守被二申渡一候

十月十日迄鑄るもの重壹匁十月十一日より鑄るもの重八分

〔鑄錢重寶記〕初發御請負古金壹兩に五貫文替定之處文字金吹替被二仰付一候故右文金に五貫文定に賣拂申候ては損金夥敷相立候段細田丹波守殿へ相願候處當時文金壹兩に相庭五百文安に賣出可レ申由被二仰渡一候然處銅殊之外拂底高直に罷成候に付又又御願申上候は元祿年中に丁子屋味休八分錢を願吹方仕候處殊之外恰好能御座候間右八分錢被二仰付一候得ば文字金壹兩に四貫文替に賣出可レ申由奉レ願候處願之通被二仰付一則十月十日より八分錢鑄立申候尤夫より前は壹匁錢にて鑄立文金壹兩に五百文安に賣渡申候八分錢賣出十一月十日より初て八分錢諸士町方共賣渡申候處段々錢高直にて御勘辨在レ之候處錢下直に成不レ申候に付又々江戸中六百軒之兩替屋え相渡候樣被二仰付一候に付辰十二月より巳三月中迄壹兩に四貫文替に兩替屋へ相渡候へ共一圓錢下直に不二相成一候に付稻葉下野守殿細田丹波守殿被二仰渡一候は是より一ヶ月に十度宛諸士

方町方え於二錢座役所一賣渡可レ申由被二仰付一直段之儀は文金相庭に四五拾文安に賣出可レ申候段被二仰付一則巳四月朔日より同十二月廿二日迄諸士町方より金壹兩之時相庭に四五拾文安に賣出申候翌午年より壹兩に三貫五百文替に淺草御藏へ上納仕候樣に又々被二仰付一候元文四未年六月廿八日より かね合勘辨之上唐かね錢と申を吹出申候按に重寶記之文義解しがたき者多し今全錄して後考を俟つ

同四年十一月廿三日銑錢を鑄出たり〔鑄錢重寶記〕元文四未年十一月廿三日鑄錢吹方被二仰付一足は銅拂底に付吹不足立候故爲二吹埋一被二仰付一候

元文元年七月廿六日新錢座ヲ願フモノ、事市令アリ〔正寶錄〕江戸にて新錢座相願度者仕樣帳幷金元證人共慥成者召連來月五日迄に大岡越前守細田丹波守へ可二罷出一候右之通町中可二觸知一者也辰七月

元文山城横大路錢

俗に浦井錢といふ

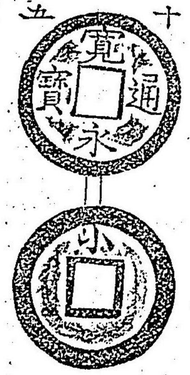
俗に浦井錢といふ

右元文元年より延享二年まで〔泉貨鑑〕清水は三年まで浦井は四年まで鑄とあり山城國乙訓郡横大路村淀より京街道鳥羽の間なり今に字錢座にて鑄る所なり清水錢請負人京清水清右衛門金主京四條近江屋小四郎浦井錢請負人浦井新兵衛金主大坂大坂屋三右衛門同源兵衛歲額五萬貫文年季十年の定なり

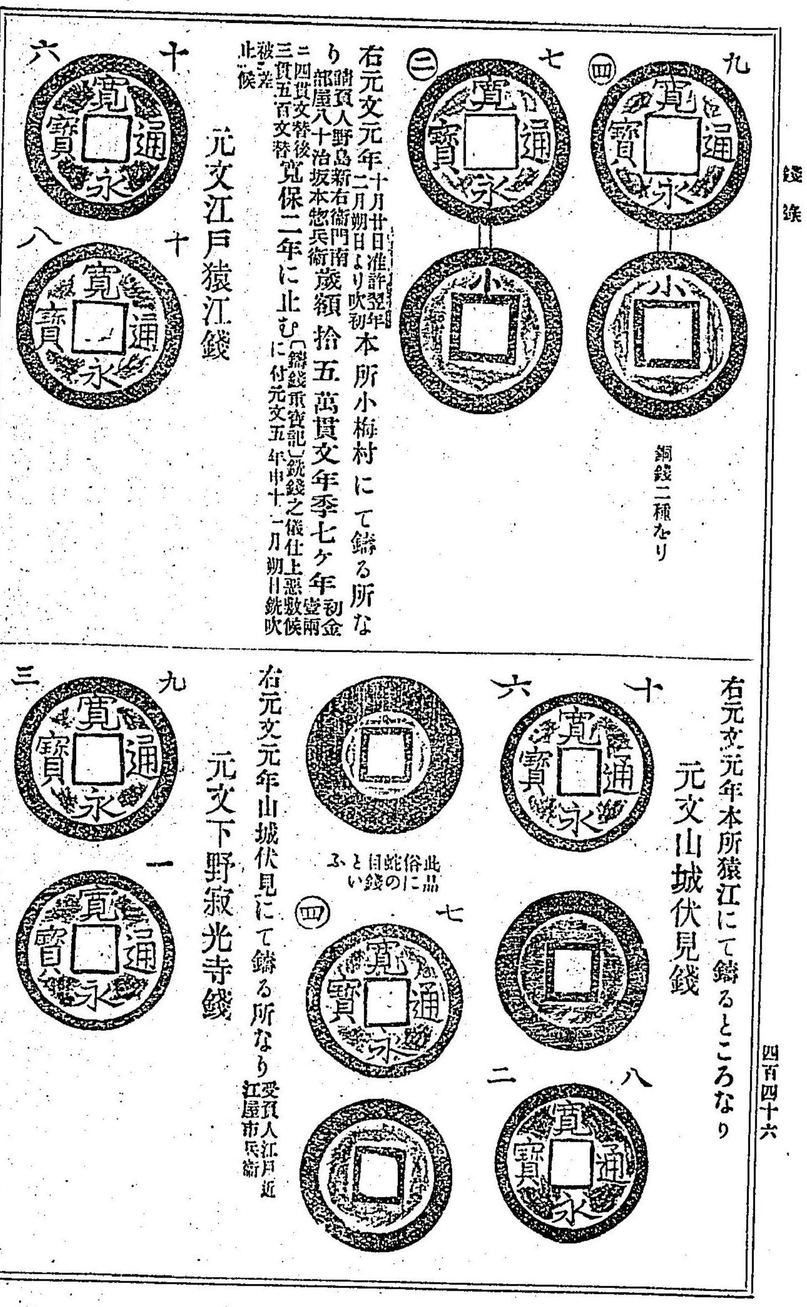
俗に清水錢といふ

〔鑄錢重寶記〕清水浦井二ヶ所元は一ヶ所に候へ共仲ヶ間割いたし金主も右之通別に成り吹所は同所にて二ヶ所に割し吹申候錢相庭金壹兩に五拾文安に賣出し候由尤賣場所之三條通にて賣申候

元文江戸小梅錢



此品銅錢なり



銅錢二種なり

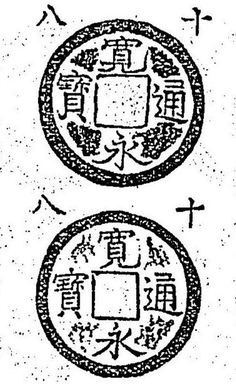
右元文元年十一月廿日准許翌年二月朔日より吹初本所小梅村にて鑄る所なり請負人野島新右衛門南部屋八十治坂本惣兵衛歳額拾五萬貫文年季七ヶ年初金壹兩ニ四貫文替後三貫五百文替寛保二年に止むに付元文五年申十二月朔日銑吹被差止候

元文江戸猿江錢

右元文元年十一月廿日准許翌年二月朔日より吹初本所猿江にて鑄る所なり請負人相馬德之丞江戸大和屋平八同若松屋理右衛門日光太田宇兵衛金壹兩に四貫文替同十一月右請負人御用難勤候に付相仕廻申候其後日光之内竹中治左衛門と申者午正月廿三日より百日之内御請負仕候處日數餘計無之迷惑仕候由都合日數三百日之積御受負仕候〔鑄錢重寶記〕に據る

元文二年八月廿四日鑄錢座願ふものゝ事に付て市令あり〔正寶錄〕鑄錢座相願候者於有之者銅山之出銅銅座へ差出候由之願に候て可〻遂吟味右之通に無之願は一切取上不申事午八月右之通町中へ相觸可申候

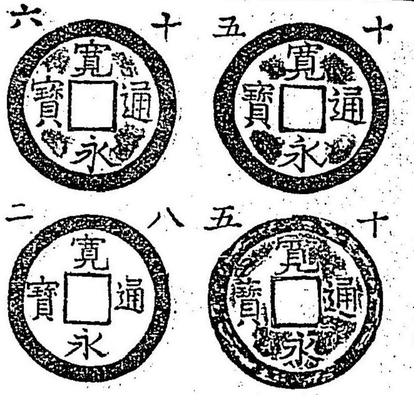
元文江戸龜戸錢



銑錢

右元文二年閏十一月四日准許龜戸村にて鑄るところなり請負人江戸三木彦右衛門井筒屋五郎左衛門吹高日々百五拾貫文金壹兩ニ四貫文替〔鑄錢重寶記〕四年三月初而淺草御藏へ上納夫より六月晦日唐かれ錢吹方致候三貫五百文替銑錢も少し内吹申候四年十二月五日ニ被差止候

元文出羽秋田錢



右元文二年十一月准許翌年五月より吹初出羽國秋田銅山にて鑄る所なり請負人秋田岩井新五郎同新助見上新右衛門能登屋喜兵衛吉川宗右衛門福田七兵衛中村三右衛門七人なり歳額拾萬貫文年季十ヶ年の定なり

元文紀伊宇都幷中嶋鐵錢

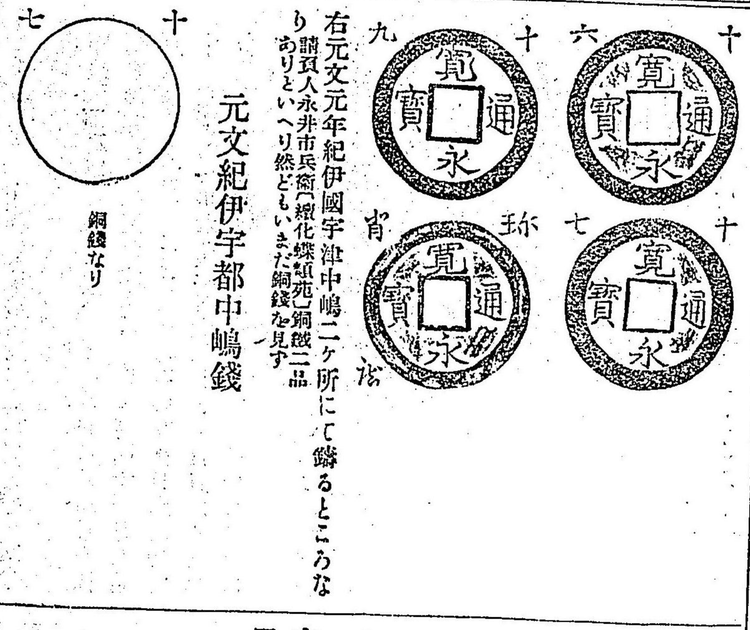
此品俗に蛇の目錢とゝい

右元文元年本所猿江にて鑄るところなり

元文山城伏見錢

右元文元年山城伏見にて鑄る所なり受負人江戸近江屋市兵衛

元文下野寂光寺錢



右元文元年紀伊國宇津中嶋二ヶ所にて鑄るところなり 讃頁人永井市兵衛〔緝化蝶類苑〕銅錢二品ありといへり然ども未だ銅錢を見ず

元文紀伊宇都中嶋錢

右元文二年紀伊國名草郡宇都村中島村兩所に於て熊野銅を以鑄る所なり

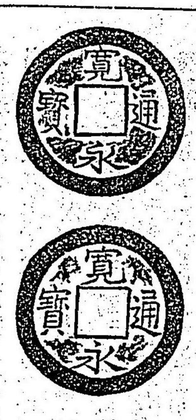
受負人土屋市太夫後に加入熊野屋彦太郎伴彦次郎 銀主江戸松葉屋伊右衛門ともいふ〔紀藩雜記〕に土屋市太夫え之諭文を載す云於二御國一鑄錢仕度候願之儀此度公儀え被二仰達一相濟候に付鑄錢仕通用有レ之筈候間鑄錢可レ仕候但他國者勿論御領分にても潰銅古かね等買取此度之鑄錢え相用之儀堅仕間敷候熊野より出候銅之外用ひ不レ申筈

重七分七八厘より八分貳三厘迄

最初市太夫願書之内に重目等之位は文錢之位を以壹貫文に付平均九百六拾目に鑄立可レ申候と見えたり然れども本文之通り平均壹貫文に付七百七拾貳匁なり此時江戸新錢は平均七百七拾匁之由歲額八萬貫文年季拾年の定なりしが本銅無數の故を以七ヶ年にして寛保三年六月比に至て止む此時又銚錢をも鑄たり

舊記に一兩年鑄錢試候處出銅無少候に付江戸同樣鐵銚錢鑄立之儀願出願之通差免有レ之事○石河土佐守神尾若狹守御城附え被二申聞一候は當地にて鑄立候鐵銚錢折損じ候に付致二吟味一鑄立候上又々なまし候て通用に出候樣にと松平左近將監殿被二仰聞一候に付右之通御座候紀州とても銚錢鑄出申候儀故爲二心得一被二申聞一候との事○丙九月比松平右近將監殿左之通被二仰聞一御領分にて鑄出候つく錢吹方之儀指止候樣可レ致候云々

元文攝津加島鐵錢



右元文三年より八月准許壹兩ニ四貫文替の定翌年冬より吹初五年正月廿一日より賣出壹兩ニ三貫貳拾文延享四年まで攝津國西成郡上中嶋村にて鑄る所なり 受負人江戸萬屋宇兵衛名代三浦忠右衛門具足屋六之丞名代岩井六右衛門大坂備前屋喜右衛門 歲額拾萬貫文年季十ケ年なり 〔緝化蝶類苑〕加島銅錢元文三年始鑄銅錢今世希也同銚錢四年未レ鑄之五年正月廿日賣出時相場ヨリ金壹兩ニ八拾文下ナリ

元文江戸深川錢 俗に白目といふ

此錢種錢なりいまだ通用品を見ず

三

右元文四年江戸深川にて鑄る所なり〔寛譜〕初発時以二一錢一といへり千二百一當二銀六十

元文江戸平野新田錢

右元文四年二月廿二日准許六月廿八日吹初深川平野新田にて鑄る所なり請負人山田新右衛門中島兵右衛門上島七郎兵衛一歲額拾五萬貫文一ヶ月壹萬貳千五百貫文ヅヽ一日ニ五百九拾貫文ヅヽ中年五ヶ年外に後吹一ヶ年季の定なりしが請負人無狀の事どもあるによりて同六年二月十三日僅三ヶ年にして停止せらる〔鑄錢重寶記〕

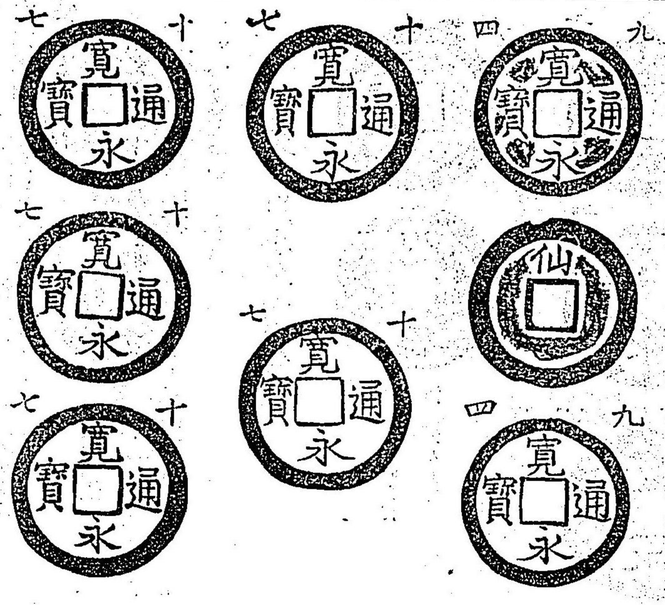
元文江戸押上鐵錢

右元文四年より二月廿二日准許六月廿日吹初本所押上村にて鑄ところなり請負人佐藤源兵衛永瀬權右衛門池田茂兵衛篠田又兵衛一歲額三萬貫文より七萬貫文まで年季中年五ヶ年外に後吹一ヶ年なり〔鑄錢重寶記〕に據る元文四年五月手本錢を鑄る事を止らる

〔正寶錄〕市令に近江鑄錢相願候もの手本錢拵錢座之儀相願候向後鑄錢相願候共手本錢拵不レ申可二願出一候哈味之上手本錢差出させ候儀も候はゞ此方より可二申付一候若猥に手本錢等拵候儀相知候はゝ其所の名主五人組可レ爲二越度一候間自分にて鑄錢不レ仕候樣可二相改一候事未五月右之趣町中可二相觸一候とありこれを見れば是より先所レ謂手本錢も

すくなからざりしなるべし

元文陸奥仙臺錢



右元文四年七月廿二日准許十一月廿三日吹初仙臺石卷にて鑄る所なり請負人大坂屋吉郎右衛門一歲額七萬貫文寛錢半分は仙臺拂半分は江戸廻し時相庭に賣る年數三ヶ年半にして止む前度吹方せし殘の年數なり〔鑄錢重寶記〕

元文四年十二月六日鑄錢座望ノモノ申出ベキ旨市令あり

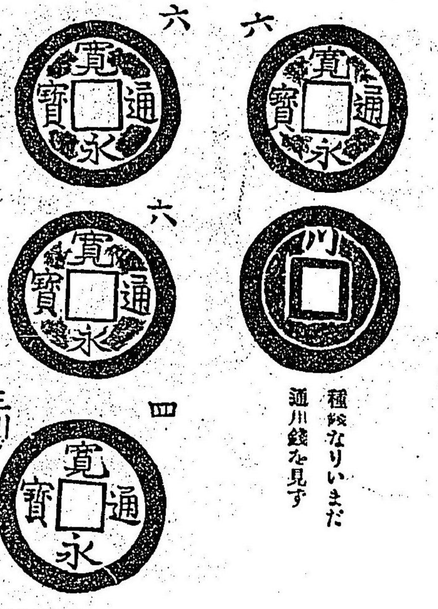
〔正寶錄〕此度錢座壹ヶ所明キ組有レ之候に付鑄錢望之者は來る廿五日迄之內石河土佐守樣神尾若狹守樣御役宅へ書付可二持參一候右日限後申出候分は取上不レ申事一請負人幷金之證人共願書致印形可二持參一事右之通相心得銅錢成とも法人錢成とも請負可二申出一候但壹ヶ年其吹高幷請負年季御用錢兩替等之儀も書記可二差出一候此度逐一吟味之上慥に相續可レ致者は可二申付一前後之願取別可二申出一候

元文相模藤澤錢

右元文四年相模國足柄上郡藤澤村にて藤澤驛にはあらず鑄るところなり

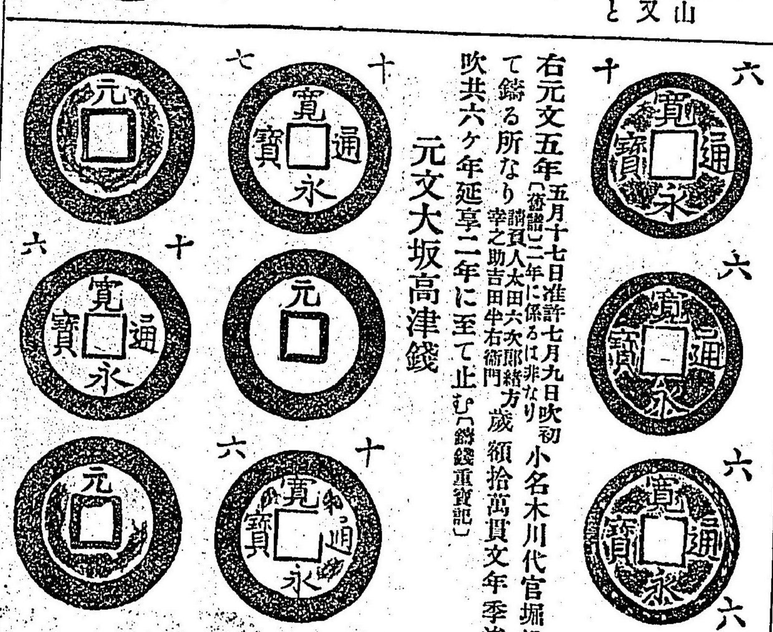
〔舊譜〕に據る又〔鑄錢重寶記〕相州酒匂川玄倉銅山元文四年十二月被仰付受負人須藤平藏とあり又上の同郡吉田嶋村にても鑄しと云至て輕少なりといへり其錢いまだ見ず

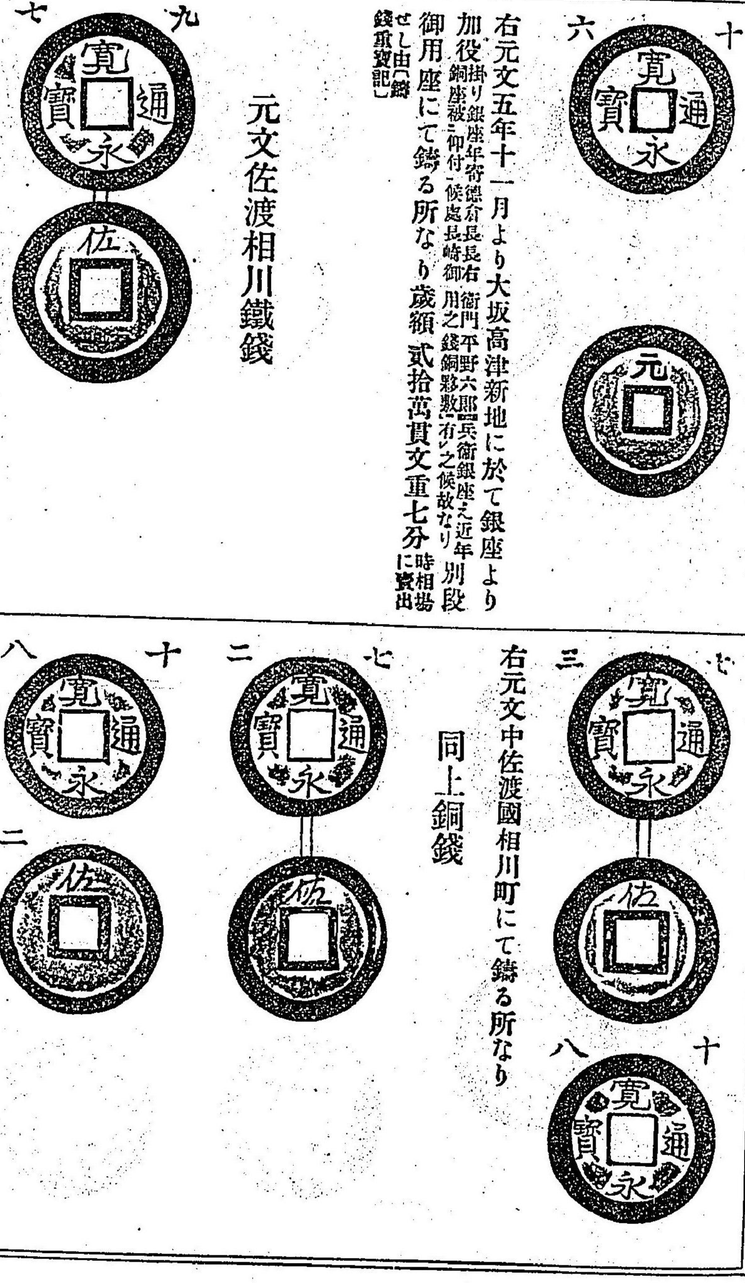
元文江戸小名木川錢



右元文五年〔五月十七日准許七月九日吹初〕〔舊譜〕二年に係るは非なり〔諸貢人太田六次郎緒方幸之助吉田半右衛門〕て鑄る所なり歲額拾萬貫文年季浚吹共六ヶ年延享二年に至て止む〔鑄錢重寶記〕小名木川代官堀に

元文大坂高津錢





右元文中佐渡國相川町にて鑄る所なり

元文佐渡相川鐵錢

右元文五年十一月より大坂高津新地に於て銀座より加役掛り銀座年寄德右衛門長崎御用之錢銅數有之候故なり銅座被仰付候處長崎御用之錢銅數有之候故なり時相場せし由〔鑄錢重寶記〕

同上銅錢

右年月不ノ知佐渡國相川町にて鑄る所なり

元文鑄所未詳錢

三

七　九

六　五

七　九

右元文年間鑄る所といふ年月鑄所詳ならず

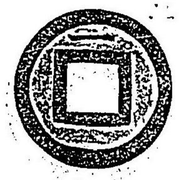
同上

元文鐵錢

三　八

五　九

六　九



三　八

六　九

四　九

六

七　十

種錢なりいまだ通用錢を見ず

六　十

右元文寛保の間に分る所といふこれも年月鑄所分明ならず（大字の分は錢文内史蜷川入右衛門親雄書といふ）

寛保下野足尾錢

四　九

五　十

六　十

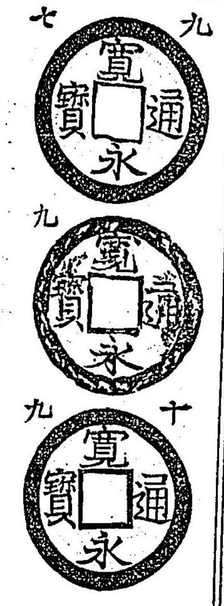
右寛保元年十一月廿七日より下野國安蘇郡足尾銅山にて鑄る所なり（掛り御勘定本行神尾若狭守御代官早川安右衛門請負人星野與左衛門同伴右衛門田中德兵衛金主中西五郎兵衛千田庄兵衛名代役橋本市兵衛）歲額四萬貫文（三萬貫目の出銅を以て吹ノ之）重八分の定五ヶ年季にして延享二年に至て止む（錢錢重寶記）に據る

延享因幡鐵錢

八　十

右延享元年因幡國にて鑄る所なり（荷譜）

明和江戸龜戸鐵錢



右明和二年より四年冬まで龜戸村にて鑄る所なり（金座懸り定座といふもの是なるか）

明和甲斐飯田鐵錢

右明和二年より同五年まで甲斐國北山筋飯田村にて鑄るところなり（〔一書〕横澤細耳錢錢元文四年三月至九月甲斐國山梨郡横澤村所レ鑄有ニ二樣一飯田新町役人太田久右衛門）

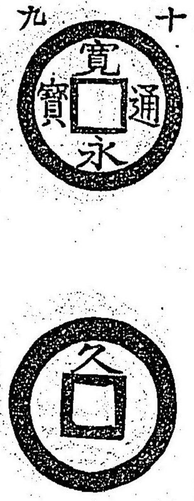
明和山城伏見鐵錢

右明和四年九月より（九月四日初て寶出す金壹兩に四貫三百五拾文）伏見西濱にて鑄る所なり

〔續化蝶類苑〕此錢より後出る所の鐵錢錢貨至て惡し茶椀の缺を入るゝ事は寶永の大錢より初る土を入るは此錢にはじまるといへり此後の長字錢久字錢千字錢何れもこれに倣て土を交て鑄る故に金の音はなし加島銚錢までは銚ながらも金の音ありしなりといへり

〔舊譜〕六年まで鑄といへり然れども安永三年九月五日町觸に（上略）此度當表幷伏見共鐵錢吹高不レ殘差止らるゝ由みえたれば其頃までも鑄出せしにや

明和常陸水戸鐵錢



右明和四年より（〔舊譜〕六年とあるは非なり）八年に至まで水戸領久慈郡大田村にて鑄る所なり（願人太田村小澤九郎兵衛錢文筆者彰考館の惣裁野口多新次祐なり背文久慈郡の久字なり〔常陸志料〕）

明和肥前長崎錢

（此錢品類多し）

（砂利種なりいまだ其子を見ず）

右明和五年八月より（一說に二年長崎にて鑄る所なり）（薩州左衛門福田七郎右衛門筆者唐通詞高尾嘉左衛門）

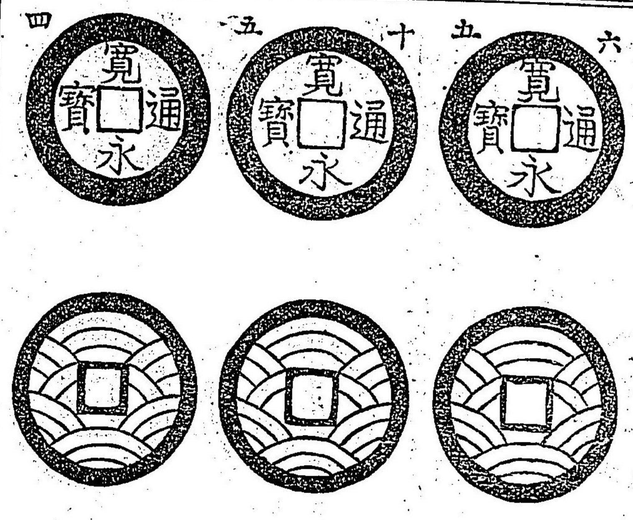
明和江戸龜戸錢

（此錢品類多し）

右明和五年より龜戸村にて鑄る所なり（金座掛り年寄五兵衛蓋四年來鑄）

る所の錢錢を止られて此を鑄らる其所は今の合羽干場なり

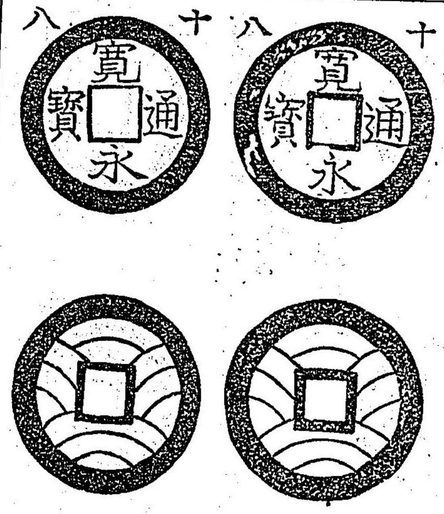
明和江戸龜戸眞鍮錢俗に四文錢といふ

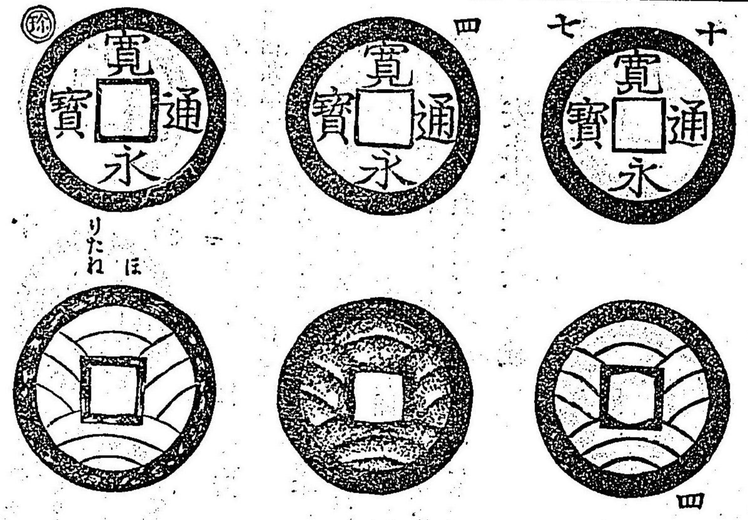


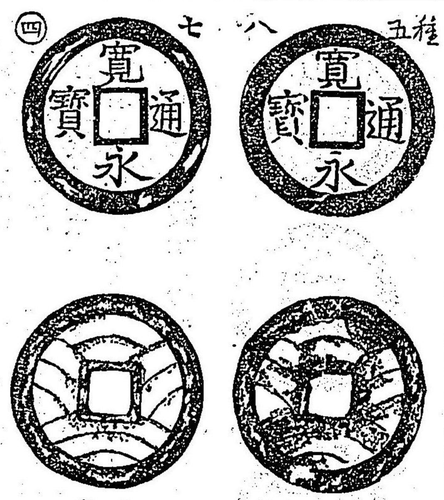
右明和五年五月龜戸村にて鑄る所なり

同五月晦日より御拂有之五月朔日の〔令〕に世上通用のため於銀座眞鍮錢吹方被仰付候に付右眞鍮錢壹文に付並錢四文之代りに相用ひ國々に至迄無差支樣に可令通用者也 按に天明八年十二月廿二日の令に眞鍮錢永代通用たるべき旨被仰出とあり錢文筆者三井親和なり

同上

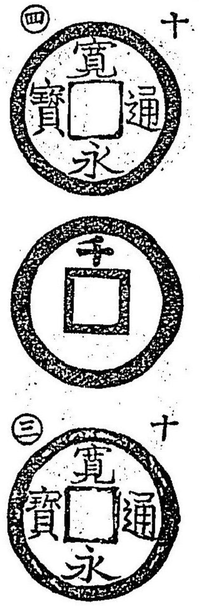






右明和六年より龜戸村にて鑄る所なり

同陸奥仙臺鐵錢



右明和七年〔泉貨鑑〕六年とあり仙臺石卷にて鑄る所なり

明和九年九月江戸鑄錢二座に定らる

九年九月廿五日市令に鑄錢之儀去る酉年後藤庄三郎支配定座其後眞鍮錢座銀座被二仰付一候處近頃中略鑄錢之儀相願候者多有レ之段相聞候右兩座之外鑄錢難二相成一事に候間向後堅願出間敷候云々とあり蓋是より後請負人などいふ事は止みたるなり

安永常陸水戸鐵錢

右安永初年水戸大田村にて鑄る所なり

常陸志料大田村の百性小澤九郎兵衛去る明和四年以來鑄錢せしが同八年故障ありて停められたり安永の初に至て九郎兵衛又錢座を再興し鐵錢を鑄る今度は背文に久二の二字あり久慈郡第二度の意なり筆者は東江源鱗なり

此錢品類多し

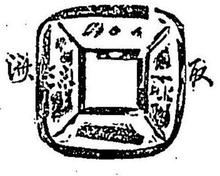
安永佐渡相川錢

右安永中佐渡相川町にて鑄る所なり

天明陸奥仙臺錢

右天明四年六月仙臺石卷にて鑄る所なり其範は千字錢の幕文を刊去て用ひしものなり

仙臺通寶銑錢俗に角錢といふ



右天明四年十一月仙臺にて鑄る所にして〔泉貨鑑〕天明四年七月廿八日仙臺に於てこれを鑄一國限り通用のものなり

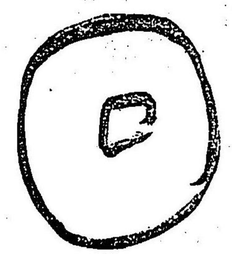
四年十一月十七日の令に云松平陸奥守領分限り通用之鑄錢形チ撫テ角文字は仙臺通寶といたし右於二領内一當辰年より五ヶ年之間鑄錢有レ之候右は陸奥守領分に限り通用之筈に候處若心得違外々にて通用いたし候者有レ之候はゞ御料は最寄御代官陣屋私領之分は公事方御勘定奉行月番宅へ可二訴

出候隱置外より於相知は急度可申付候右之趣御料は御代官私領は領主地頭より可被相觸候十一月又文化三年四月の令に云松平陸奥守領分限通用之鑄錢中吟味之上急度可申付候右之通天明四辰年相觸候處右鑄錢通用に取交取遣り致候者有之趣相聞不屆候依之改之者相廻し右鑄錢交り有之分緡にて取扱候分其緡限り以亦は筵等にて取扱候分は其以其包一ト口限り取上げ急度可申付候右之趣御料は御代官私領は領主地頭より可被相觸候

近江膳所錢

右近江國膳所にて鑄る所なり年代詳ならず【魯譜】

文政橋場眞鍮錢



右文政三辰年□月江戸淺草橋場銀座にに鑄る所なり

錢錄卷第六終

錢錄卷第七（原本六七五）

寛永年月鑄所未詳品

種錢なりいまだ通用錢を見ず

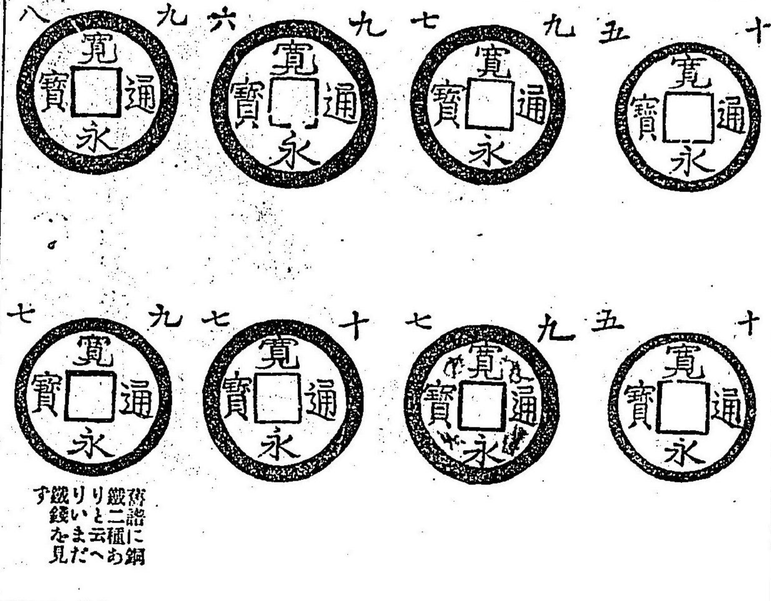
上に同じ

影種なりいまだ其子を見ず

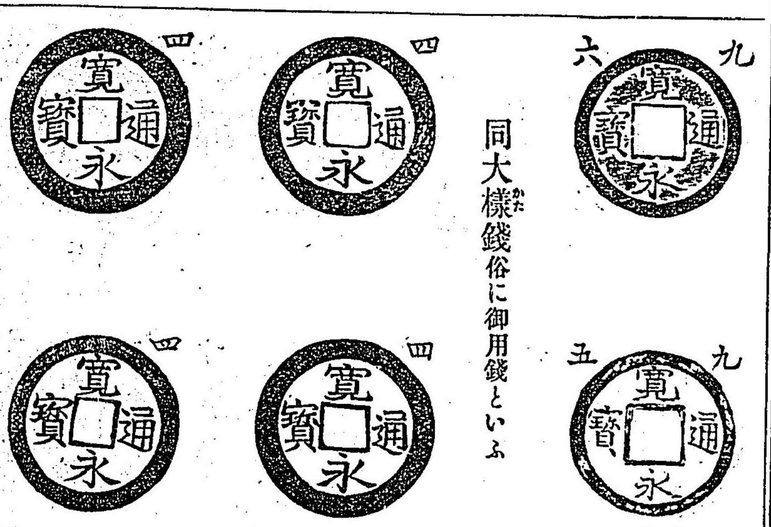
俗に四錢緡といふ

影種なりいまだ其子を見ず

俗に四永緡といふ

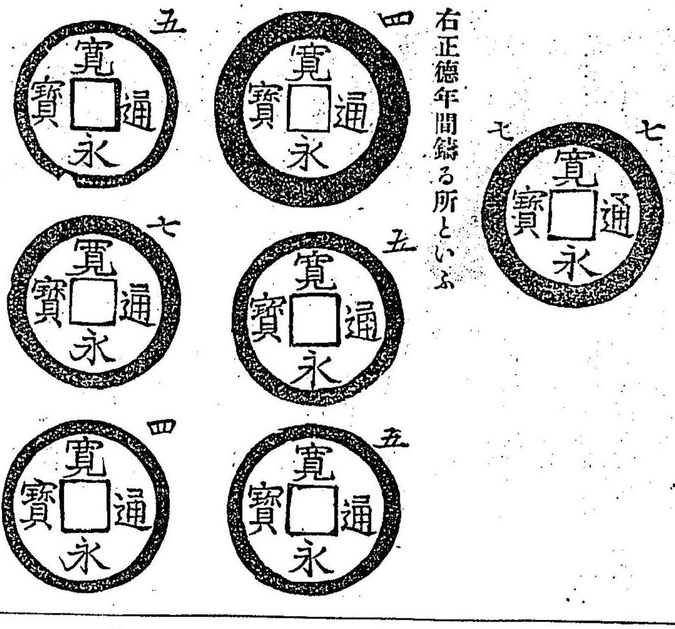


古語に銅錢二種あり云へりいまだ錢を見ず



同大樣錢俗に御用錢といふ

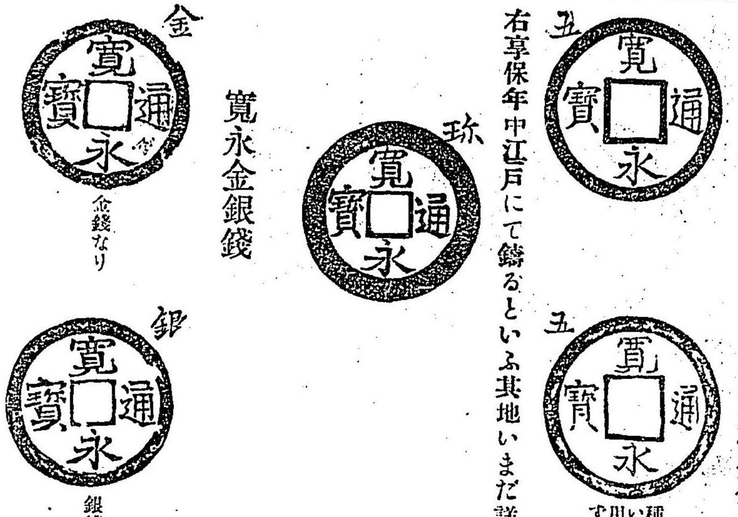
此二品錢錢なり



右寛永年中鑄る所なり

右正德年間鑄る所といふ

右享保十三年日光御社參の時攝津難波村錢座に命せられ鑄る所なり大小一樣ならず金地錢鉛錢銅錢あり



種錢なりいまだ通用品を見ず

右享保年中江戸にて鑄るといふ其地いまだ詳ならず

寛永金銀錢

金錢なり

銀錢なり

右年月鑄所詳ならず寛永正保御誕生御元服の時用途の爲めに鑄られしといふ

〔鳴海某覺書〕寛永十八年三月御誕生御用意して金銀錢を鑄させられ正保二年四月世子御元服之時金銀錢を鑄させられし由見えたり按に産所の用に金錢を用ひられし事〔九條師輔公記〕〔源平盛衰記〕に見えたり

又寛永に姫君を邀へ奉りし時に銀錢五百八十文紅絲につなぎたる由見えたり

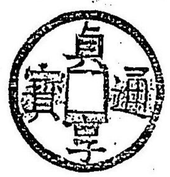
〔萬世家譜〕に寛永十四年姫君樣牧野内匠頭養君可レ仕旨被二仰付一刻橋御門之所四辻にて内匠頭銀錢五百八十文紅絲を以貫レ之姫君樣を貫取内匠頭宅へ被レ爲レ入云々と見えたり

其後なほ銀錢御用意の事ありと聞ゆ

明暦災後燒金銀を吹直したりし時萬治二年に寶庫に入し事を記せるものに銀錢六十貫文と見え寛文元年七月金銀帳の内に御銀納覺とありて銀錢五十貫文但長百也丁銀にして五拾八貫五百目と見えたり近來に至ても銀錢御用意の事ありと聞ゆ

存錄

貞享通寶銀錢



右貞享元年に鑄といふ未だ詳ならず

元祿銀代通寶銅錢

右樣錢までにて通用のものにはあらず是は元祿十三年（諸書に十六年とあるは誤なり）伊勢屋道喜といへるもの願にて此錢

を受負一錢にて銀一分五厘に通用いたさせ百錢は金之分銀拾五匁に當て地銅の位極上に吹立

道喜問答書に銀代壹錢に付銀壹分五厘遣へ共時之相場次第にて銀代壹錢を常錢にては九錢拾錢或は拾壹貳錢にも賣出可レ申候地銅損益之譯は金子壹兩分之地銅と考合候へば凡貳貫五百目

吹高百貳拾萬貫の目論見ありしに秤座よりの故障にて許容無レ之然ども道喜内々にて鑄試し樣錢世に殘り其後又摸造のものとありしなり

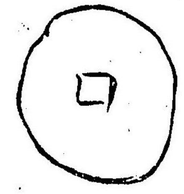
寶永二支樣錢

背

右寶永四年大錢を鑄るの初に此樣錢を試吹せしに寶永通用と改むべき由下知せられたり故に此錢官許なりしかども内々にて鑄たる樣錢なり

寶永通用橢錢

享保錢通寶銅錢



右享保中に或云元年鑄るともいふ未ゝ詳

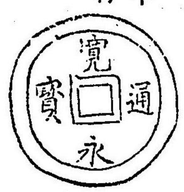
錢錄卷第七終

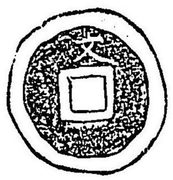
附錄

寛永琉球所傳錢

錢文　錢幕

國中常行錢





中山傳信錄に載する所の品なり

琉球國にて平生みな寛永錢を通用することは唐山の諸書に見えたり

〔中山傳信錄〕琉球平日皆行ニ寛永通寶錢一、錢背無字、或有ニ一錢字一、按日本寛永元年爲ニ前明天啓二年一、歳在ニ壬戌一、此日本舊錢也、錢摸大小、亦與ニ前明萬曆錢一相埒、錢質皆赤銅、每百箇値ニ國銀一錢二分一、國朝藁典云、琉球市用ニ日本錢一、以レ十當レ一、爲レ近レ是、〔琉球國志略〕中山傳信錄謂、其平日皆行ニ寛永錢一、註云、日本寛永元年當ニ前明天啓二年一、壬戌亦非ニ寛永元年一、屬ニ甲子一當レ在ニ天啓四年一、又云、琉球錢法、國中用ニ寛永錢一、每レ遇ニ冊封一、則別鑄ニ小錢一、開レ局兌換云々、無ニ輪郭文字一云々、〔歷代鍾官圖經〕周煌海東集中山賦、流ニ日本之鋟鋌一、註琉球市用ニ倭國寛永錢一、

同朝鮮所傳錢未見

同清朝所傳錢未見

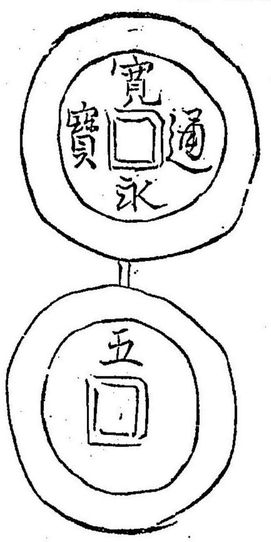
〔歷代鍾官圖經〕寛永通寶錢を載て中山傳信錄琉球國志略を引て證とし其下に寛永錢、大小有レ二、背文穿レ上、有ニ元小文長足仙佐仇字一、又有ニ鐵者一、といへり仇は佐字を誤讀たるなり

同阿蘭陀所傳錢

〔ケンブル〕我元祿中に蘭人ケンブルと云もの著す所永錢その他金銀錢大判小判丁銀豆板寛永の圖を載す今その一二則を譯して左に載レ之

寛永和蘭所傳錢

蘭書〔テ、ヘシケレイヒング、ハン、ヤバン〕



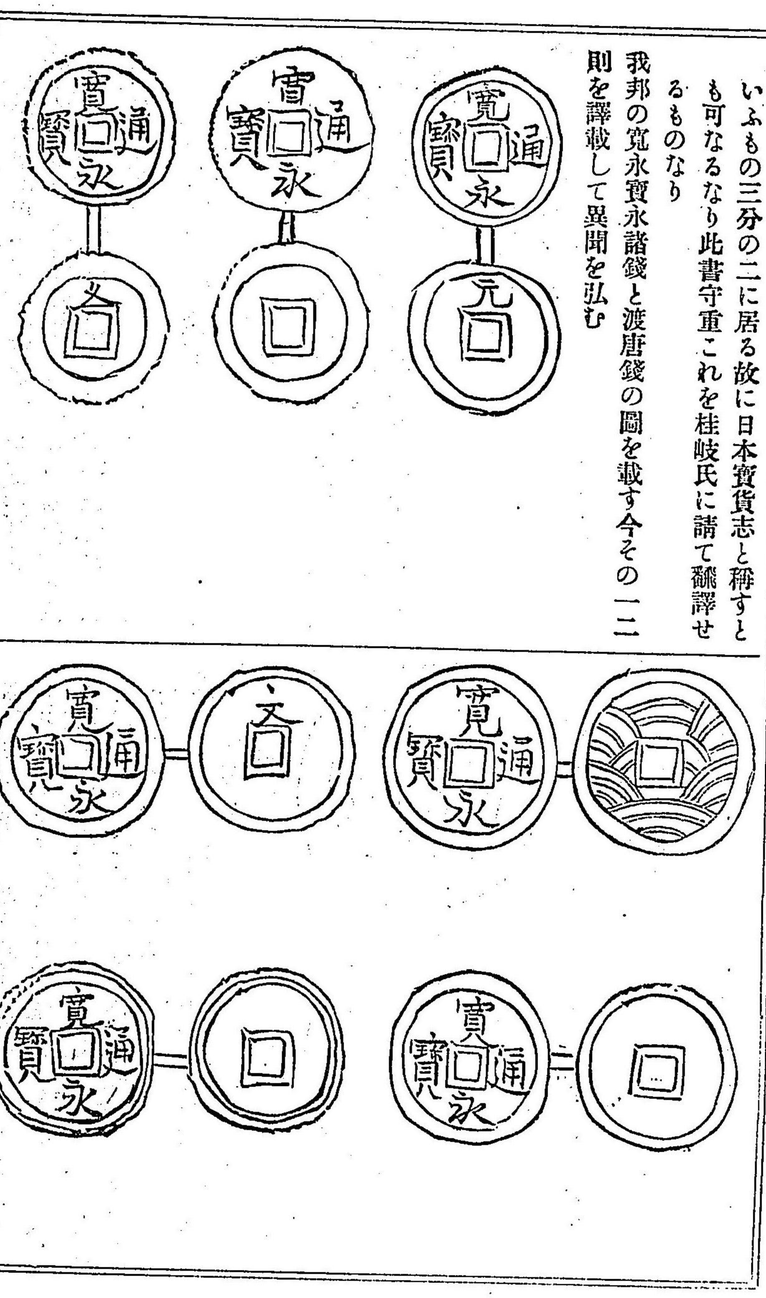
日本國志と飜譯す我元祿中來貢の醫エンゲルベルトケムベル撰する所の日本國志なり全篇ゼルマニヤ語を以て手錄せしをアングリヤ國ロンドン府の醫官その國語に飜譯し再び蘭語に飜譯して我享保十八年彼國にて印行す此書は守重の所藏するものなり

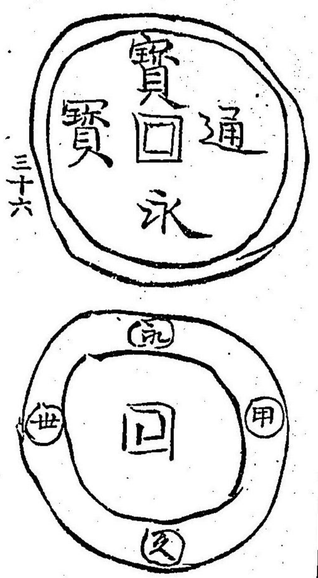
我邦の五當錢の圖を載す　この書に五當錢の說見えず故に譯附するに及ばず按に寛永に五當錢あることなし疑らくば樣錢ならんか

又〔フリハンテリング、オーフル、デ、ヤバンセナイ〕日本國志と飜譯す我安永五年來貢醫「トインベルグ」撰する所の日本國志なり「トインベルク」はもと「スウェシャ」國の人なり我邦の人物風俗を略說し金銀泉貨の諸種を集て悉く之を載す全篇寶貨を

いふもの三分の二に居る故に日本寶貨志と稱すとも可なるなり此書守重これを桂岐氏に請て飜譯せるものなり

我邦の寛永寶永諸錢と渡唐錢の圖を載す今その一二則を譯載して異聞を弘む





三十六

〔ヤバンセナイ〕ニ云余日本ノ金貨ヲ獲テ喜デ之ヲ貴重スソノ故ハ日本ノ寶貨ノ歐羅巴洲ニ存在セルモノ余ガ淺見ヲ以テスルニ醫家決牟夫兒及加爾列福以古私人名ガ日本志ニソノ說ト圖ト共ニ少許ヲ擧ルノ外ハ未ダ曾テ目覩耳聞セシコトナキニヨリテナリ大抵日本ノ金貨ハ其製頗ル麁ニシテ修飾ヲ加ヘザル識文記號極印ヲナシ多ハ輪郭ヲ作ラズ又護邊ナキコト歐羅巴洲ノモノニ相反ス諸種多クハ定價アルコトナシ故ニ每時コレヲ秤量セザルコトヲ得ズソノ貨ヲ造ルノ品ハ金銀銅鐵ヲ以テシ形狀各異ナリ而シテ交易販買ニ今時通用スルトコロノモノハ止ニ左ノ件ナリ第一ハ所謂「新製コバング」及「イチイブ」及「イタガン子」ノ二種及「コダマ」「ナージョーグニ」「シモニセニ」ノ諸種等ナリ

明達ノ醫決牟夫兒ハ余ニ先ダツコト八十五年元祿五年壬申ヲ以テ日本ニ航來ス同人日本ノ記志アリソノ書中長崎ノ市街形勢ノ地圖ノ下ニ二三種ノ金貨ノ圖ヲ出セリコレ當時通用セルトコロノ品ナリシカレドモソノコロヨリ恰モ新製ノ金錢數種ヲ頒發セルニヨリテ從前通用ノ品ハ稍々ニ耗少セリ

銅ヲ以テ作レル貨ノ諸種ソノ銅紅銅黃銅ニ拘ラズ又鐵ヲ以テ作リ做スモノ總テ之ヲ「ゼニ」ト呼ブ其形大ナルモノ又少ナルモノ俱ニ鑄成スモノニシテ正中穿ニ方孔アリソノ孔ノ大サ四方凡ソ二分許以テ藁索ヲ串シテ時ニ臨テ算計ニ便ナラシメ又以テ遞換シ易カラシメ更ニ携帶贈送ニ自由ナラシムルナリ

右ノ貨常時百個ヲ以テ一索ニ串クヲ得或九十六個ヲ串クモノアリ百個ノモノヲ「メタシビヤク」「メタリビヤク」ト云九十六個ノモノヲ「クユロクビヤク」九六百ト云フ此九十六個ハ我邦皇際亞ノ壹錢五分ニ當レリ右ノゴトク錢ヲ串ニ一束トナシタルモノ一樣ノ錢ノ

ミヲ用フルコト稀ナリ通ジテ二種又三種更ニ多種ニ及ベリ其「ゴローデゼニ」大錢ヲ最初ニ索ノ一端ニ串キ隨テソノ小ナルモノヲ串クソノ一束ノ常價ナルトキハ大錢ハ五又六個ニ過ギズゴレ大錢ハ其價ノ貴キユエニソノ數ノ少キナリ

此束ハ商客スベテ之ヲ各々ノ店中ニ備ヘ市鄽村落ヲ論ゼズ旅者ノ經行ノ時ニ方テ速ニ小片金ヲ以テ交換シ毫モ缺點ヲ以テ其行ヲ滯澁セシムルコトナカラシム

長崎ニ於テハ支那人ハ其地ニアル所ノ交易場ニ於テ支那ノ泉ヲ以テ使用スソノ錢ハ圓形ニシテ黄銅ヲ以テ之ヲ作レリシカレドモ右ノ錢ハ日本ノ金泉貨中ニ算入シテ使用セズソノ文字ノミ異ニシテ形狀ハ全ク日本錢ト同ジトイヘドモアヘテ加ヘ用ヒズ日本ノ市人之ヲ稱シテ「カントンセゼニ」ト云

諸種ノ泉其形圓ニシテ厚薄殆ド「トイト」彼洲ノ錢ノ名二厘五毛ニ當ル ノ如クニシテ扁平ナリ邊隅ノ厚薄及大小ヲ以テ差〻ヲナス

最モ古物ナリトスル所ノ銅錢ハ甚ダ罕稀トスサレドモ大通事「コーサク」吉雄幸作ナルベシ 余ニ數品ヲ贈レリトモニ紅銅ヲ以テ製シ大小厚薄常ノ「ゼニ」ノ如ク同樣ノ大サナル方孔マタコレアリタヽソノ文字ハ各異ナリ時用通用ノ錢ハ次ニ記スモノコレナリ卽チコレ「シウモンゼニ」ト稱ス第七圖三十六ノ符號ニ載ス「シウモンゼニ」ハ十錢ノ義此錢六個ヲ以テ一錢「エニンマース」ヲナス此錢歳ヲ歷ルコトノ久シキニヨリテ近日ハ甚ダ罕ニ通用スル種ナリ大サハ雪際亞國ノ銅ニテ作レル一ノ「テウエーストイフルス」錢貨ノ名「ストイフル」ハ二分ニ當ル ノ如ク厚サハ「ドイト」ト同ジ色澤ハ淡紅ナル銅ノ如シ一面ハ方孔ノ四圍ニ欵字アリ文又一面ニハ邊輪ノ内ニ四ノ號符ニ亦欵字ヲ以テス幕定價ハ十「セニ」ニ當ル彼洲横行ノ文傍ニ起ルガ故ニ此錢ノ圖用世ノ二字一時誤テコレヲ左右スルモノニ似タリ 第八圖三十九號ノ錢一面ニ一ノ標記文錢アリコレ一古貨ナリ

「シモニセニ」ハ第八圖三十七ノ符號ニ圖ス「シモニセニ」ハ四錢ト譯ス此ハ尋常ナル古銅ノ泉貨ニシテ日本國中ノ通用ノ最ナルモノナリ大サハ雪際亞ノ一ノ銅デ作レル「ストイフルスチュック」「ストイフル」ノ如ク其厚サハ「ドイト」ニ同ジ一面ニハ「シスモンセニ」ト同樣ノ文字ヲ記ス按ルニ十文錢ノ寶ノ字トコノ錢ノ寛ノ字トハ同字ナリトモオモヘルナルベシカレドモソノ一面ハ六ノ各異ナル全キ或ハ缺ケタル

楕圓ナル弓形コレ波文ノ彼邦人ニハ弓ノ如ク看ユル也ヲ作レリ定價ハ四錢ニ當ル

第八圖三十九號ノ錢一面ニ一ノ標記文錢アリコレ一古貨ナリ

「ゼニ」一名平常通布「ゼニ」ハ其大サ「ドイト」ニ同ジ紅銅ニテ之ヲ作ル一面ニ文字アリテ前種ト同文ナリ此泉六十ヲ以テ一錢「エニンマース」ヲナス此種中余二種ヲ目擊ス

銅ニテ作レル「ゼニ」ハ今ニ於テ年々交易場ノ兩「ジレクテウルス」監察指揮ノ人ノ許諾ヲ得テ少許ヲ此國ヨリ送リ將チ出スナリ但兩名ヨリ交付スルトコロ同ク限リ定メタル數アリテ敢テ多少セズ千七百七十五年安永四年乙未ニハ右ノ兩「ジレクテウルス」ヨリ七十五櫃「ゼニ」ヲ領受セリ

鐵錢ハ只一種ナリ之ヲ「ドーサセン」ト名ク其大サ及定價及形狀ミナ通用ノ「セン」ノ下ニ記セルモノニ同ジ余此一種中ニ就テ却テ二樣ヲ獲タリイハエル第八圖四十二ノ符號ノ錢下面幕ニハ標印アルコトナシ第八圖四十三ノ符號ノ錢ハ一面ニ一個ノ標記アリ此泉ハ鑄成スルモノニシテ至テ脆弱ナリモシコレヲ地上ニ墮セバ片々ニ破碎スベシオモフニコレ贋錢ナルベシ今ヨリ兩三年前ニ長崎ニ於テ日本ノ兩鎮臺「ヤハンセーコーフルネウルス」コノ錢ヲ多ク造レリソノ鑄錢局ハ長崎港ノ一方ニアリテ和蘭人ノ商館アル一島ニ斜對スソノ局ハ今ニ尙存在セリ

守重曰桂國寧譯本日本志ノ後ニ記シテ云福智山龍橋子西洋錢譜ノ序ニ云予嘗與ニ西客驩、彼愛ニ古錢、與ニ予之夙好合、於是乎每ノ遇ニ間曠、未ニ嘗不ニ相會談論移レ晨、ト此西客ハ伊洱亞加的沁機トイヘル和蘭甲比丹ニシテ安永庚子ヨリ天明壬寅甲辰ニ至マデ數々東武ヘ進貢セシモノニテ清嘉慶三年卽位ノ時モ和蘭ノ賀慶使トナリシ人ナリ此人博聞强記好デ各國ノ古貨ヲ愛玩ス我邦ヲ去ルノ後錢譜ヲ編刻ス日本錢震旦錢數百品ヲ圖載セリ卷首ニ日本人ノ羽織袴ヲ着セル像ヲ載セタリ其側ニ「リャウケウサモン」ト記セリ其同好ナルヲ以テ圖像セシナルベシ意フニ「トイン、ヘルク」此編アルニヨリテ後又テッシンキ錢譜ノ刻アリシナルベシ此事龍橋子同好ノ人ニ聞ケリト云ヘリ

錢定　錢撰　錢嫌

按に錢を撰むことは〔續日本紀〕に和銅七年九月甲辰制自レ今以後不レ得レ擇レ錢、若有下實知二宮錢一輒嫌擇者上勅使杖一百、其濫錢者、主客相對破レ之卽送二市司一と見ゆ是錢撰の事聞えし初なるべし〔三代實錄〕に貞觀七年六月十日己未、禁下京畿及近江國賣買之輩擇中棄惡錢上曰、弘仁十年六月九日下二知大藏省一曰、錢鑄司所レ進新錢雖二文字頗不レ明而不レ失二體勢一、亦有二小疵一、行用無レ妨宜猶二檢納一、而間愚者不レ悟二此旨一、專任二己心一、擇棄不レ受、或稱二文字不レ全計一十嫌二三一、或號二輪郭有レ缺、擧レ百缺二八九一、是以要二升米一者、飢口難レ餬、買二屯端一者、寒身不レ暖、宜下牒二于路頭一嚴加中禁止上若有二乖違一、隨卽決笞、又同十二年正月貞觀永寶を鑄られし時の詔に歲序雖レ積錢文不レ新今聞流弊尤甚、交貨多レ妨云々、又十四年九月廿五日壬辰、新鑄貞觀錢、文字破滅、輪郭無レ全、凡在二賣買一嫌二棄大半一、譴二責鑄錢司一、令二分明鑄作一と見えたり〔延喜式〕に凡鑄錢司所レ貢錢、雖二文字不レ明、而不レ失二體勢一、無レ妨二行用一者、莫二擇棄者一、と見え凡錢文以二一字明一、皆令二通用一、若有二擇棄者一、隨レ狀科責、とありこれ錢定の次第を見に足る〔日本紀畧〕に永觀二年十一月六日、近來世間錢嫌尤甚、適所レ取錢號二二寸半一、銅錢厚直也、廿八日甲戌、被レ定レ嫌二破錢一、といへり是等錢定の古例と云べし錢定は俗にセイセンといひしと見え〔建武式目追加〕永正五年の定にセイセンノギと見え（制錢といふ事にはあらず又精錢にてなし）〔多門院日記〕永祿八年（十二月廿五日）の記に今般以之外精錢之間と云云三州大濱稱名寺現存永祿十二年織田殿〔定書〕に精撰追加條々と見えたり下に開列するもの併せ考べし

蓋もと金銀の通貨なくして錢一品のみ通用せしゆゑ自から其撰尤强かりし也異朝にも往々錢嫌の事あり接に〔唐會要〕に顯慶四年九月以二天下惡錢多一、令二官私一、以二五惡錢一酬二一好錢一、贖取上、至二十月一、以二好錢一文一、博二惡錢兩文一、元和四年三月、京城時用レ錢、每レ貫頭除二二十文一、陌內欠レ錢、及有二鉛錫錢一、と見え〔續文獻通考〕に嘉靖三年詔、每銀一錢直二好錢七十文、低錢一百四十文一、とありこれ和漢古今の流弊を通考すべし

明應九年十月錢定高札〔建武式目追加〕

商賣輩以下撰錢事明應九十

一近年悉撰錢之段、太不レ可レ然、所詮於二日本新撰料足一は堅可レ撰レ之、至二根本渡唐錢永樂洪武宣德等一は向後可二取二渡之一但如二自餘之錢一可二相交一、若有二違背之族一は、速可レ被レ處二嚴科一矣

松田丹後守　秀
長

按に和長記に文龜三年五月廿三日、今朝自二御藏一要脚請取了、惡錢過半也、當時事無沙汰之間如レ此歟、とみえて夾註に大橋近年爲二禁裏臨時之御藏一也とあり官庫の錢も精撰ならざることを知べし又按に日本新撰料足とは東寺文書にいふ地錢の內と同じく此際に新鑄せるものなるなり

永正五年八月七日錢定高札〔建武式目追加〕

一セイセンノギ京錢ウチヒラメヲノゾク其外ノト唐渡タウ錢永樂洪武宣德エイラクコウフセントクワレ錢但アントテワザル錢以下トリ合テ百文ニ三十二錢ケリヤウ三分一可レ有レ之於二向後一者トリワタスベキ事

一アク錢賣買儀一切可二停止一事

右條々堅被二制止一訖、若背二此旨一族アラバ、權門勢家ノヒクワンヲキワズ、於二其身一者、處二嚴科一至二私宅一は、闕所にをこなはるべき由、所レ被二仰下一也仍下知如レ件、

永正五八七

沙彌　信祐
近江守三善朝臣貞運

一撰錢事近年令レ超二過先規一之條、爲レ世爲レ人不レ可レ不レ誡、所詮於二古今渡唐錢一は、悉以可二取用之一、次惡錢賣買儀停止事、被レ定二御法一、被レ打二高札於洛中一、訖可レ令二存知一之由、被二仰出一也、仍下知如レ件

永正五八月七日

信祐
貞運

城州

大山崎名主沙汰人中

同九年八月晦日錢定同十三年マデ錢撰ノ事〔東寺所藏文書〕

定

撰錢事

一百文之内口さしの分ふるせに十文洪武二文宣德二文永樂六文已上廿文なり

一地錢之内よき永樂五文大觀嘉定以下うらに文字のあるせによき錢の内たるべし

一少分づゝもこれをおふて用べし

一日本せにわれせにをのぞく但少かけたのはよき錢の内たるべし

一口さしの程うり物をかふぢきになす事あらば罪科同レ左

右條々望被二定置一訖、若有二違犯之輩一は、男は頭をきり、女はゆひをきらるべきなり、恣えり、又えらざる輩あらば、町人として注進せしむべし、見かくさば同罪たるべし、私けんたん同爲二町人一可レ致二注進一之由、所々被二仰下一也仍下知如レ件

永正九年八月卅日　對馬守平朝臣松田

散位神宿禰語方

甲斐國妙法寺日錄永正九年ノ條ニ去年ヨリ賣買ナシ錢ヲエル故ニ米八十文小麥ヲ七十文賣也（按ニ是ハ甲州一國限ノコト也）

永正十年此年錢ヲエルコト無レ限賣買安シ錢ヲエル程ニ代ニツマル也同十一年此年賣買安シ錢ヲエル程ニ代ニツマル

同十二年此年迄モ賣買去年ノゴトク安シ錢ヲエルコト未レ止他國ハ代ツカヒヨシ

同十三年此年モ春ヨリツマルコト無レ限錢ノエルコト彌ヨ

天文十一年四月錢定ニ始リ同十六年ヨリ廿四年ニ至マデ錢撰ノ事

〔蜷川親俊記〕天文十一年閏三月十一日（二カ）撰錢之事任先例執筆代へ被二仰出一之

一同年卯月廿二日松田丹後守殿撰錢事付而上下京酒屋土倉中質物之事申聞□（一本ナシ）賦遣之書狀案文

撰錢之事今度被レ定（一本ナシ）御法被レ打高札訖於二向後一者守二彼札一之通可レ致二商賣一候

近江守三善朝臣布施

美濃守藤原朝臣

但置質物者借主約諾次第可二取渡一之由緒、土倉酒屋中へ可レ被レ成二御下知一候

卯月十二日（廿イ）　松田丹後守殿

同年五月四日

一今度撰錢之儀、御下知爲二御禮一貴殿へ御馬代三百疋□□〔五百疋賦百疋道〕□□〔五十疋百疋何れもへ遣候也

〔甲陽軍鑑〕に天文十六年六月甲州法度之次第五十ヶ條ノ内第四十二ヶ條目ニ一惡錢之事者、立二市中之外一不レ可レ撰レ之

甲斐國都留郡〔妙法寺舊記〕天文十九年此年春錢ヲエルコト不レ及二言說一

同廿二年六月錢ヲエリ申候コト先代未聞無二御座一候賣買ハ安ク候へ共錢飢渴ニテ候

同廿四年此年錢商京ト云錢出來候而代ヲエルコト無レ限

守重按ニ錢商京トハ永樂錢ノコトヲ云カ又小錢ノコトヲ云カ未レ詳

一攝州同前右京兆ヱ遣レ之

一堺庄名主沙汰人中

一山門使節御中

一青蓮院御門跡聽務御房

一興福寺衆徒御中

一山門三院衆徒御中

一大内左京大夫

一右京兆代

一撰錢事、近年令レ超二過先規一條、被レ定二御法一、被レ打二高札於洛中一之上者、守二彼札一、於（洛カ）二古今渡唐錢一可二□□一之趣、堅可レ被レ相（取渡カ）二觸各中一被官人同分國中所々一之由、所レ被二仰下一也、仍執達如レ件、

永正五年八月七日　沙彌　近江守

甲斐國志に川口御師ニ藏ムル永祿二年小山田ノ印書ニ甲州惡錢法度幷新錢等之儀は一切被二停止一（中略）富士參詣之導者惡錢ヲ持來爲二神前へ投入一候云々、從二當年一爲レ改二新錢一參詣之口々へ可二居二置一奉行一トアリ

永祿八年十二月廿五日〔多門院日記〕

一以之外精錢之間制札分卅三定之

一新錢　一ツレカケ　一コロコロ
一宣德　一ウラニ字ノアル　一錢字不レ見
以上六錢本ヲ札ニ出シ被ニ打置一了依レ之惣別之賣買一向不レ成又少々ハ心安

按に本ヲ札ニ被レ打とあるは隋の時五銖を鑄られしに私鑄ありたれば其時の事と記さる書に開皇三年四月詔、四面諸關、各付ニ百錢一爲レ樣不レ同者卽壞、以爲レ銅入レ官、京師及諸州邸肆し上、皆立ニ榜樣一爲レ準、不レ中レ根者、不レ入ニ于市一、ゑかれば手本錢を札に打し事は異朝とても古き事なり

永祿十二年三月十六日織田殿錢定
三州大濱村稱名寺所藏〔古文書〕ニ
精撰　追加條々
一以ニ八木一賣買停止之事
一京樂十斤之上段子十端之上茶碗の具百の上以ニ金銀一可レ爲ニ商買一但金銀無レ之ば定之善錢たるべし余之唐物准レ之此外は萬事定レ之代物たるべし然ば互有ニ隱密一以ニ金銀一賣買有レ之ば可レ爲ニ重科一付金子は拾兩之代拾五貫文限子は拾兩之代弐貫文たるべし
一祠堂錢、或は質物錢、諸商買物、幷借錢方、法度之代物を以て可レ爲ニ返辨一但金銀於ニ借用一は以ニ金銀一可ニ返辨一付金銀無レ之は定代物たるべき事
一見世物之物、錢定に依て少も執人輩あらば分國中末代商買停止たるべし付諸商買に依て金銀兩目替停止幷賣手かたより金銀を不レ可レ好事
一大小に不レ寄荷物諸商買之物背ニ法度一族有レ之ば爲ニ役人申屆一可ニ相究一不レ能ニ信用一は荷物悉役人可レ被レ沒之事
一科錢之儀一錢より百文に至らば百疋たるべし百疋之上にいたらば千疋たるべし其外准レ之事
一錢定違犯之輩あらば其一町切に可レ爲ニ成敗一其段不ニ相屆一候歟惣町一味同心に可ニ申付一猶其上に至ても手餘之族においては可レ乞ニ注進一同輩法度族於ニ差出一は爲ニ褒美一要脚伍百文可ニ宛行一之事

永祿十二年三月十六日　彈正忠朱印判

按に多門院日記に永祿十二年三月廿四日ノ條ニ一昨日廿三日從ニ京都織田彈正殿一錢定之事制札奈良中方々ニ打了、則是ナリ

天正十年
〔多門院日記〕天正十年九月十六日ノ條に去十三日歟奈良中無法量料足ヨル間從ニ筒井錢定之札一打レ之三文迄ニ可レ取レ之ワレカケ、ナマリ錢ノ外ハ可レ取レ之云々

文祿十一年
〔多門院日記〕に文祿二年十二月十日近般料足以外越ニ常篇一撰レ之間錢定在レ之云々尤々下者商賣不レ可レ成ニ沈思一云々

慶長十一年
定
下總國佐倉より東に於てゑかみ錢取遣不レ可レ仕但われ錢が遣錢新惡錢は撰可レ申事
右依ニ相望一之如ニ先規一申付訖若ニ此度一於ニ違背之輩一は可レ處ニ嚴科一者也仍如レ件
慶長十一年七月廿三日　對馬守　判
大炊介　判
備後守　判

元和二年
定
一大かけ　一われ錢　一かたなし　一ころ錢
一新惡錢　一なまり錢
右六錢之外は御藏えも納候之間えらぶべからず金子壹分に壹貫文之賣買たるべし則彼六錢之外撰者幷押てつかふもの是あらば糺明之上其面に捺ニ火印一べき者也仍所ニ定置一如レ件
元和二年五月十一日

覺
一御法度之外之錢ゑり候者於レ有レ之は如ニ御定一火印を可レ捺事
一最前御定之ごとく金子壹兩に四貫文之賣買致べし若御法度を背高下之賣買致候者有レ之は其賣買之錢金過料として双方より可レ出事
右條々相背輩於レ有レ之は其町一町より過料として家一軒に百文宛可レ出レ之幷其所之代官過料五貫文可レ出レ之此度堅可ニ申付一者也
元和四年午二月十二日
定
一錢之賣買金子壹兩に四貫文御定之上者勿論金子壹分に壹貫文たるべき事

此を相背高下之賣買仕に於ては御定之通違背之方よりうりつふ錢金一倍可レ出レ之事

一大かけ　一われ錢　一かたなし　一ころ錢

一新錢　一なまり錢

此六錢之外撰べからす若えらぶもの亦は六錢を押てつかふ者あらば其面に火印を捺べき事

右條々可二相守一此□□自然濫之輩於レ有レ之は其在所之代官庄屋□町中（在カ）は年寄爲二過料一五貫文其外家一軒より百文づゝ可レ出レ之見出す者にはほうびとして彼過料不レ殘可レ被レ下之者也仍如レ件

寛永二年八月廿七日　奉行

寛文十年六月廿八日町觸

寛永新錢之内え古錢を交諸色不レ可二賣買一之勿論錢屋兩替屋新錢に古錢をまぜ商買仕間敷候

右之通相背ば急度可レ引二曲事一者也

戌六月廿八日

渡唐錢

渡唐錢とは異朝歷代の古錢にして今俗にいふ替り錢の事なり

替錢の字は庭訓往來に出玉海に治承三年七月廿七日、風病殊發動、基廣來申錢賣買之間事、近代渡唐之錢、於二此朝一恣賣買云々、とあるを初とするか百鍊鈔には此時錢病と云事流行せし由をいへり〔法曹至要抄〕に建久四年七月四日宣旨云、應四自今以後永從二停止宋朝錢貨一事云々其見ゆ往來に湊々の替錢とありて古註に永樂錢の事を引けり守重按に古註の說非なり諸式目幷新式目永仁二年同五年の制法に替錢事利平は任二證文一可レ有二其沙汰一と見えたれば今庭訓に云ところ爲レ替の事なるべし

永正五年八月七日の定に（全文錢定の部に出す下同し）渡唐永樂ト宣德ト錢ヱイラクコウフセントクと見え同九年八月卅日の定に洪武宣德永樂又大觀嘉定と見え永祿八年十二月廿五日の定に宣德と見えたり是當時此等の錢の殊に勝れたるを以て錢の立テ物となせし事なるべし其歷代渡唐錢の品々ありしことは所々に地を堀て得る所を以其概を觀べきなり

文和二年元ノ至元十四年にあたる元朝へ人を遣して銅錢を交易せし事元史に至元十四年、日本遣二商人一持レ金來、易二銅錢一許レ之、（宋元通鑑には禁二日本博二易銅錢一といへり）

應永二十五年三月若狹國大良庄にて錢瓶を堀出す風聞あり

〔東寺文書〕

東寺雜掌謹言上

若狹國大良庄百姓等歎申狸穴間事

右去々年二月比彼所百姓等於二當庄内一傷二屋舍一堀二狸穴一之處今月十六日自國之御代官方百姓等堀二取錢壺一之内就レ被レ仰全非二錢瓶一爲二狸穴一之上は能々可レ有二御糺明一旨百姓等陳答之刻御代官方兩使幷寺家代宮百姓等相共莅二彼所一令二檢知一之處爲二狸穴一之條無二子細一之由兩使則領納之所此事聊依レ有二訴人一歟猶以下爲二錢壺一之由上被二仰懸一候結句被二下一置百姓等一之條迷惑至極也近日已相向二耕作時分一之處百姓等被二召置一候間庄家忽可二荒廢（ヵ）所一之條寺家周章此事也所詮猶若有二御不審一は任二百姓等申請之旨一於二實否一者被レ召二告文一急速被二免出一之爲レ令二耕作營一言上如レ件

應永廿五年三月日

寶德三年明の景泰二年にあたる九月琉球人鳥目を獻せし事

將軍家譜に寶德三年九月、以二琉球人所獻鳥目一千貫一被レ進二之於禁中一、

按に此錢は必洪武永樂宣德類の唐錢なるべし康富記に寶德三年八月十三日、或語云、琉球島、去月末レ着二兵庫津一之處、守護細川京兆、早遣レ人役二商物一、撰二取米錢料足一之間、先々年料足未進物、及四五千貫無二返辨一、又賣物抑留、爲二島人難レ堪之由一申之間、自二公方一被二下一遣奉行一、被二糺明一之處、被二抑取一之物、自二京兆一未レ被レ返、依レ之奉行未二上洛一云々、とありて康富記には鳥目を獻ぜし事見えず且此方より年々の料足四五千貫返辨なしといへる此際に流傳する渡唐錢の事なるべし

寛正五年明の天順八年にあたる八月明朝へ銅錢を求らる

〔善隣國寶記〕に寛正五年八月十三日室町將軍義政公より明朝の禮部えの咨文に云書籍銅錢、仰二之上國一、其來久矣、今求二一物一、伏希奏達、以滿レ所レ欲、書目見二于左方一、永樂年間多給二銅錢一、近無二此擧一、故公庫索然、何以利レ民、欽待二周急一、

文明七年明の成化十一年に當る八月明朝え銅を求らる十年に至て明帝より銅錢五萬文を送らる

〔善隣國寶記〕に文明七年八月廿八日義尙公より明朝えの咨文え云抑銅錢經レ亂散失、公庫索然、士瘠民貧、何以賑施、永樂年間、多有二此賜一記レ之、又書籍焚二于兵火一、蓋一秦也、弊邑所レ須二物爲レ急、謹錄奏上、伏望俞容、〔續善隣國寶記〕に文明十年明朝より錢を送る返簡を載す云

皇帝勅二諭日本國王源道義一、得二奏本一、國經レ亂、公庫索然要下照二永樂年間事例一、給二賜銅錢一、賑施等上、因二禮部一、查無二給賜之例一、向使二臣妙茂等一、復懇辭具奏茲不レ逆二王意一、特賜二銅錢五萬文一、付二妙茂等一、領回至可二收用一、故諭

成化十四年二月初九日、

同十五年明成化十九年三月明朝へ銅錢を

〔善隣國寶記〕に文明十九年三月義政公より禮部の咨文に制書幷給賜等物、一々拜納無レ堪二感荷之至一、抑弊邑久承二焚蕩之餘一、銅錢掃レ地而盡、官庫空虛何以利レ民、今差二使者一入朝所レ求至レ此耳、聖恩廣大、願得二壹拾萬貫一、以滿二其所レ求、則賜莫レ大レ焉、謹錄奏上、俞允惟望、

明應六幸明弘治十年にあたる大內義興より銅錢を朝鮮に請ふ

〔續善隣國寶〕に日本國大內防長豐筑肆州太守多々良義興、奉二書朝鮮禮曹參判足下一云々、貴國賑二濟吾邦一者、莫レ如二銅錢綿布等一、

永正元年會津大觀通寶錢を通用す

〔會津四家合考〕に永正元年、天下飢饉、會津米價一升百錢、按此時、錢大觀通寶之錢也、

守重按に錢定の部に載す永正九年八月晦日の定に地錢の內よき永樂大觀嘉定とあれば此大觀は日本鑄の錢なる歟尙尋べし

天文廿四年甲斐國にて錢南京といふ事行はる

〔甲斐國妙法寺日錄〕に天文廿四年此年錢南京と云錢出來候而代ヲヱルコト無レ限按に錢南京とは永樂錢流行の事なるか

天正の頃古文錢の事

〔武備志日本考〕に古文錢とありて其夾註に倭不二自鑄一、但用二中國古錢一、而每一千文價二銀四兩一、若二福建私新錢每千價銀一兩二錢一、惟不レ用二永樂開元二種一、按に永樂を不レ用とは關東にて永樂一錢通用ゆゑ西國の永樂關東へ來りしゆへ座人此錢を不レ用ことゝ聞誤し也大永二年九月江戶淺草寺境內ヨリ古錢出ル

〔小田原記〕に大永二年九月ノ初古河ノ御所へ御使アリ御使者ハ富永三郎左衞門尉トゾ聞エシ其飯リニ富永武藏ノ淺草ヘ參詣シケルニ其日觀音ノ緣日ニテ十八日ノコトアルニ常ヨリ人群聚ス殊更不思議ナル有辨財天ノ堂ノ邊ヨリ錢湧出ルコト有寺僧ドモ制シケレドモ參詣ノ人コレヲ不レ用多ク此錢ヲ取富永モキイノ思ヲナシ歸參リテ後此コトヲ言上ス云々守重云此事又紫一本にも引けり何に據り

天明元年江戶青山隱田にして開元洪武水樂錢の類を掘得たり

〔街談錄〕に天明元年十月廿日過の頃青山隱田の名主佐平次といへるもの鉢植の植木を藏めんとて人夫に命じて大きなる窖をつくらしむ人夫庭をうがちて金の茶釜と錢數十貫文をほり出せり其錢多く開元洪武永樂の類にて唐宋以後の錢也主人田舍のものなれば古錢の貴きをゑらず則人夫の雇錢にあたへしを持來りて青山善光寺前の酒家にて酒をのむ酒家の主人これを怪みてとへばゑかゝのよしをいふそのうち三十貫文は駒場道玄坂の酒家龜屋といへるものにうり貳拾貫文は青山善光寺門前の酒家にうりしといふ終にその風說はなはだしければ公に訴しといふある人のいふ去る年も此庭より一椀の朱をほり出せしをあへてとらず川水に流せしに川の水二三日これがために赤かりしとかや惜むべき事なりおもふにいにしへ澁谷長者の家の跡なりかし

享和四年豐前小倉城下四丁濱といふ所にて永樂錢を掘出せり

守重が知友小倉の大夫小笠原某云享和四亥年其國小倉城下四丁濱といふ海手の茶屋の邊りにて池を穿とて古錢を多く掘出せり悉く靑錆つきて凡は二桶ほどもありけりみな永樂錢のみなり此所は舟着なれば昔し明朝へ往來の舟破れし所なるべし

文化四年卯三月廿八日但馬國耀山村にて古錢掘出せし事

文化四年卯三月二十八日但馬壹武萬庄耀山村農民長七といふもの其所持し字中麻町といふ畑の中より升目五六升ほども入べき曲玉壺の根なるを掘出せり內に古錢土に交り錆つきてありしを小刀にて壹錢づゝはなしけるに凡六百貫文あり五銖又隆平錢等數品あり貧民ゆゑ三貫文餘追々小遣にいたし當時殘り錢二貫五百文餘所持候由同六年八月に至て地頭山名中務え屆出しといふ

〔新安手簡〕
當地增井村正宗寺と申禪院は城下より五六里隔久慈郡の內にて夢窻開基の古跡にて御座候舊は勝樂寺と申候今以二名並存候義堂鎌倉圓覺に住職之時佐竹氏招待にて被二暫住一候事有レ之勝樂除夜之詩空花集に載申候十年前正德二年正宗寺佛殿修造之時緣之下より色々の古錢多出申候住持より源肅殿へ獻申候今以府庫に可レ有レ之候其節之目錄寫置候間入二御覽一申錢貨之儀に付御別紙乾元大寶之後御見聞不二取成一候然共拾芥抄乾元錢被レ下其註に御より候へば應和の後改錢有レ之候樣被二思召一候寶貨之事御要用之儀有レ之に付考索も有レ之哉御聞被レ成度被二思召一候改鑄之詔案抔も可レ有レ之候哉新國史亡失之後すべて玄どけなく每事行つかへ候事多く候由逐一承知御尤と奉レ存候如レ仰新國史無レ之故に當館紀傳編集大キ差支申候事共有レ之候拙者相認候日本紀宇多帝紀贊も新國史不レ傳二乎世一絕編殘簡、掇拾匪レ易、掛レ一漏レ百、哀レ腋成レ裘、採二史筆一者、殆艱乎哉、書レ之通に御座候此時代記錄可二仕置一ば日本紀略より外無二御座一候紀略相考申候所別紙之通新鑄論奏之事共禁秘抄西宮記などにも相見紀略と致二照應一候へ共新鑄之文は無レ之候洞院左府之考も不レ取レ及儀と相見拾芥抄へ錢文無二御座一候詔書之類史館にて改編纂候書付之候に付是をも改考索候へ共改鑄詔勅會以相見不レ申候其外一代要記歷代皇紀帝王編年記等之類紀略輔翼にも相成ほどの書考見候へども一向不レ見朝野群載にケ樣之事のせ申に付見申度存候べとも當時江戶史館に有レ之當館に無レ之故是も見不レ申候然共新鑄改錢之事共必帝紀に載せ候間此時代の本紀をも見候所新鑄之文無レ之候左候へば諸記錄共に應和改鑄之錢文無レ之儀は存候

正宗寺より出候古錢目錄

開元通寶 十九貫六百文　唐國通寶 二百文
乾元通寶 八百文　皇宋通寶 卅一貫八百文
聖宋通寶 八貫八百文　宋元通寶 八百文
太平通寶 一貫八百文　淳化通寶 二貫百文
至道元寶 三貫九百文　成平元寶（成カ） 四貫四百文
景德元寶 五貫三百文　祥符通寶 十貫文
天禧通寶 五貫二百文　天聖元寶 十一貫二百文
明道元寶 九百文　景祐元寶 二貫百文

至和元寶 三貫六百文　喜祐元寶 四貫七百文
治平通寶 五貫六百文　熙寧元寶 廿三貫文
元豐通寶 廿九貫文　元祐通寶 十一貫九百文
紹聖元寶 十貫七百文　元符通寶 三貫百文
大觀通寶 二貫七百文　政和通寶 九貫三百文
宣和通寶 六百文　淳熙元寶 三百文
慶元通寶 五百文　嘉泰通寶 三百文
開禧通寶 一百文　嘉定通寶 五百文
紹定通寶 三百文　淳祐元寶 二百文
景定元寶 二百文　咸淳元寶 一百文
景祐通寶 一貫四百文　喜祐通寶 二貫五百文
正隆元寶 二百文　文字不明錢 二貫六百文
合四十二品右何レモ三五錢之數餘有レ之總計二百三十四貫七百文

大宋元寶 二十文　建炎通寶 廿五文
紹興通寶 十文　端平元寶 六文
嘉熙通寶 五十文　開慶通寶 五文
至大通寶 五文
七品百二十五文

東國重寶　海東通寶　富壽神寶　周元通寶
漢元通寶　神功開寶　成康通寶　唐國通寶
朝鮮通寶　崇寧通寶　太定通寶
合十一品十一文
古錢四十二品　百文以上二百三十五貫
七品五十文以上百二十五文
十一品一文宛

辰八月改レ之　常州增井正宗寺

西野古海按〔玉石雜記〕明和元年正月廿八日下野國都賀郡西美濃村長光寺境內ノ古塚ヲ發タリシニ銅塔一基ト古錢及ビ古錢ヲ得タリ云々其古錢ハ皇宋元寶二太平通寶二皇宋通寶四十宋元通寶一開元通寶四咸平通寶五太平通寶二淳和通寶一至道元寶二景德通寶九太中通寶廿天僖通寶十天聖元寶廿八明道通寶二至和元寶五嘉祐通寶一嘉祐元寶五治平通寶二治平元寶十熙寧五元寧元寶四十元豐通寶百九十元豐通寶八紹聖元寶十元符通寶十六政和通寶十五宣和通寶二至元通寶三靡滅錢五百十六九百七十六錢アリシ也

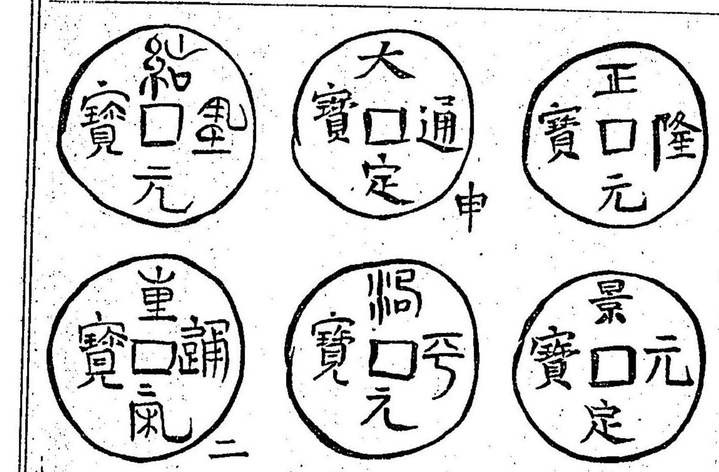
西野古海按〔前橋舊藏聞書〕
山川郡ノ內久米村忠左衞門ト申百姓ノ世悴

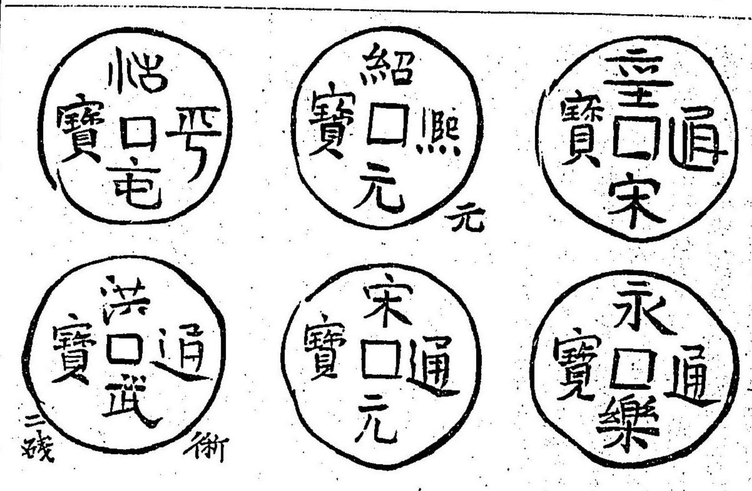
十歳ニ罷成者名ハ八ト申候右ノ親忠右衛門義身體不ニ罷成一候ニ付女房ヲ奉公ニ仕ラセ置候其身ハ世倅一所ニ小舅九郎左衛門ト申者之所ニ罷在候三月十五日之晩百姓共打寄咄申候ハ忠右衛門義身上成不レ申候ニ付妻ヲモ奉公ニ出シ耕作モ成申間敷體ニテ不便ニ存候由何モ物語仕候ニ付右八側ニテ承不レ圖申候ハ錢瓶ヲ掘出候テ母ヲ養可レ申ト申候何モ笑承申シ其方何ノ覺候哉オカシキ申事ナガラ不便ナル由一同ニ申候明十六日道惡敷所有レ之付テ作申候故忠右衛門屋敷ノ土ヲ取道ヲ作申トテ世倅ハ鍬ヲ持參土ヲ堀申候得バ何ヤラン鍬ニアタリ音タカク鍬モ少カケ申候シ故八ハ驚テ逃申候土ヲハラヒ申候者ドモ不審ニ存ジ彌堀候テ見申候ヘバ錢瓶ニテ有レ之候其内ニ錢七拾五貫文有レ之候由所ノ庄屋申出候依レ之希代ニ存候間則母ヲモ呼出シ候樣申付候

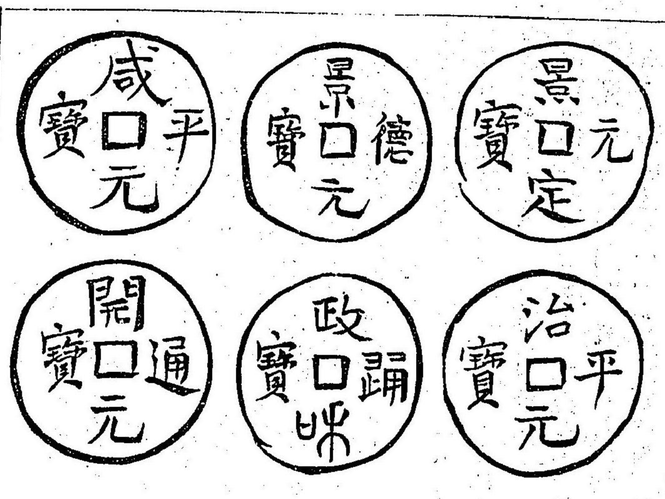
右ノ錢取寄見申候所皆右ノ錢ニテ御座候字替ルヲ一錢宛七拾貳文今度差越申候以

上

午三月廿三日







倭存唐伏錢

按に此渡唐諸錢は異域の錢書に見ざる所なれば

彼土に佚亡せしなるべし幸に我朝に現存流傳して千古の眞面目を見るに足る彼に佚して此に存す豈珍と云ざるべけんや若洪遵諸人をして見せしめば豈啻拱璧のみならんや故に特に此に標書す其說は泉譜泉貨鑑數書に詳なれば畧之

再按に異朝古錢の少きことは一說あり凡新舊幷行ふは古の法なり故に錢を以て歷代通行の貨といふ金志に之を自古流行之寶といふ然るに澆季に至て爐頭の官吏おの〳〵衣食の利を貪るがために遂に古錢を鎖盡するに至る顧炎武が所謂明末寶源寶泉の二局たゝ姦蠹の窟となるといふ是なり

日知錄に予幼時見市錢多南宋年號、後至北方見、多汴宋年號、間有二唐錢、自天啓崇禎、廣置錢局、括古錢以充廢銅、於是市人皆擯少古錢不用、而新鑄之、錢彌多彌惡、旋鑄旋鈔、寶源寶泉二局、祇爲姦蠹之窟、故嘗論古來之錢凡兩大變、隋時盡銷古錢一大變天啓以來一大變也云々、又云、自漢五銖以來、未有廢古而專用今者、唯王莽一行之耳、魏熙平初、太和及新鑄五銖、幷古錢內外、全好

忍舊器毀棄、每秤十觔願納銅二千觔、監督主事某不可、謂古器雖毀棄可惜、我何敢爲輕重、商人謂、宣銅下爐、尙存其質、至三代間物、則質淸輕之極、下爐後惟有青煙一縷耳、此則誰任其咎、監督謂、聖性猜疑遺重若如何、言必增聖疑、如三代物不便下爐則有監督內官公、因驗視、罪不有我、於是古器毀棄殆盡、

倭存唐佚錢

二 應曆通寶

三 統和元寶

五 天慶通寶

建炎元寶

建炎元寶

七 興元通寶

十 至元通寶

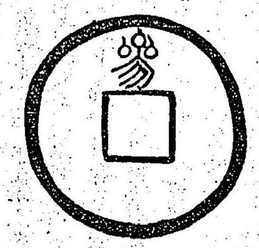
九 淳祐通寶

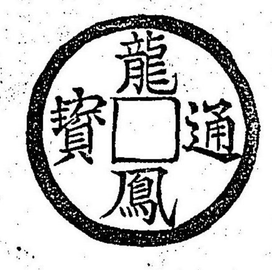
至元通寶

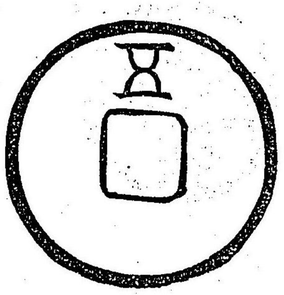
十一

十二

十四







遣唐錢

遣唐錢は渡唐錢に對して字する所なり昔鎌倉の世は宋朝の泉貨を用ひらる室町の代には明朝へ

銅錢僅十萬貫を乞はる堂々たる皇國何ぞ外蕃に乞て國用を辨せんや我烈祖に逮んでは盛德の感ゑからしむ所か天これを縱して海內に金銀銅の出ること夥といふばかりなし蓋し本邦未曾有の富有大業とすべし故に淸蘭韓の諸國より安南交趾の遐方まで皆梯航して料銅を我に仰ぎて其國用を贍し西洋萬國みな覬覦の思を生ずるに至る昔は十萬貫を異朝へ乞はる今は異朝をして百萬斤を我に乞はしむ其國力の强弱いかんとかするや是みな烈祖盛德の致す所にして亦以我國の金銀銅の最も萬國に秀たるを見べきなり

凡我邦の金銀銅の外國へ入りし事は寶貨通用事畧●天壽隨筆●光被錄●通貨考に詳なり然れども其銅斤は果して鑄錢の用にのみ充てしや否を知らず

韓土のごときは對州より送るところの歲額若干萬斤これを看品といふ琉球は薩州より送るところ歲額亦若干千斤是れこと〴〵く鑄錢のみに用ひしや否は彼土の史書いまだ見るところあらず故に本條に省之

惟淸土は銅の出ること少きを以て其鑄錢は專ら我邦の採辨に依れること彼書に比々と見えたり今一二則を左に收錄す

享保元年淸康熙五十五年日本銅二百七十七萬一千九百九斤零を以て淸國において康熙通寶錢を鑄らる蓋是より前後今日に至るまで每歲日本銅に賴て其國鑄錢の用途を贍す長崎一港の送るところ定額幾百萬斤なるを以て其概を知べし

但淸國鑄錢京局の採辨銅斤歲額四百四十三萬餘斤の內

內滇銅百六十六萬三千百九十九斤零○上諭條例に據るに京局の殘重さ壹匁四分の時は年料三百八十萬斤なりしが重さ壹匁貳分に減せられしに至りては年料三百四十萬斤となる

日本銅斤如ㄴ右

淸國京師の鼓鑄は凡二局あり戶部に隸するものを寶泉局といふ歲每に錢六十卯を鑄る萬二千四百八十緡を以て卯とす閏年には加鑄四卯得錢四萬九千九百二十緡得錢七十六萬千二百八十緡工部に隸するものを寶源局といふ置廠二十有一歲ごとに錢七十一卯を鑄る六千二百四十九緡二百七十文を以て卯とす得錢四十四萬三千

六百九十八緡百七十文（閏年には加鑄四卯得錢二百四千九百九十七緡有八十文）是二局の歲額なり其料物寶泉局は雲南銅を用ゆ年料五百七十萬四千斤有奇（湖南貴州の白鉛三百八十四萬千九百十有四斤黑鉛七十萬五百七十一斤南洋錫二十一萬千七百十有二斤）寶源局は年料二百五萬二千四百四十斤（寶泉局三分の一なり貴州の白鉛一百三十萬一千九百十有四斤湖南黑鉛二十三萬三千五百二十三斤廣東錫七萬五百七十一斤）其直隸山西江蘇等十四州の開鑄は惟雲南のみは山に卽て銅を採り其他は或は本境の廢銅或は雲南の餘銅を買ふ

京局の錢は清文の寶泉の字と漢文の年號通寶の字なり各州の錢は清文の寶の字と本省の一字なり按に康熙二十九年范承勳が撰する所の雲南通志を閱すれば食貨の部に金銀銅鐵錫鉛を載せて夾註に滇產五金共來舊矣、但時書時謁□艱既無定在、似難書指茲指附於金貨之後とありて雲南の銅多きことなし疑べし又四川通志には康熙四十二三年の間一年抽收紅白銅斤二萬五千九百二十七斤得變價銀一千四兩六錢一分云々とあり此邊出銅の少きを見べし

凡商賈航海して銅を市（かふ）ことを願ふものあれば官より符信を給せられ東南日本に往て市せしむ（按に長崎にて辨銅官商といへる是なり其官商には浙海關の商照などいへる切手あり錢氏十二家などいふは官商問屋の家號なり局とは座かたの事也）舟歸るとき司關のもの按檢して官用に買あげ若し有餘あれば市肆へ商買を許さる（以上清會典に據る）是清國鼓鑄の大畧なり守重按に會典に載する所如右といへども清土つねに銅の乏きに苦む十四州みな雲南に仰を以て知べし加之乾隆の初料銅乏き由にて圖書集成一萬卷の銅字を壞して錢料に用ひらる

乾隆御製武英殿聚珍版の詩の注に康熙年間編纂古今圖書集成、刻銅字、爲活版、排印藏工、貯之武英殿、歷年既久、銅字或被竊缺少、司事省櫃子咎、適値乾隆初年、京師錢貴、遂請毀銅字、洪鑄從之云々、

是その一端を證すべし

上諭條例に載する辨銅の一條に云（金撮抄するもの）戶部爲遵旨密議事

辨銅條例　戶部爲遵旨密議事、廣西司案呈、本部摺奏內開、該臣等查得、漕運總督署理江蘇巡撫印務、顧條奏內開、一奏稱滇蜀洋銅、宣兼採辨也、節年上下二運銅斤數百餘萬斤、俱係採自倭人、運解供鑄、而錢文尙未充盈、今若舍置洋銅、耑取足於滇蜀兩省、恐礦砂

出產無常、有悞戶工二局之需、請嗣後洋銅一項、照例採買、益以滇蜀二省銅斤、惟於額辨之數減少數十萬觔、東洋之出產寬裕、商船之返棹自速、則鼓鑄有備、可無反覆更易之虞等語、查京局銅斤、向來原歸名關採辨、至康熙五十五年、始隸八省分辨、原係滇洋幷採、每年採辨洋銅二百七十七萬一千九百九十九斤零、採辨滇銅一百六十六萬三千一百九十九斤零、共計辨銅四百四十三萬餘斤、但兩局所鑄之錢、從前每文鑄重一錢四分之時、每年需銅三百八十萬斤、嗣經九卿議定、鑄一錢二分、每年只需銅三百四十萬斤、除各省掛欠銅斤、及本年鼓鑄外、目今兩局現存銅二百餘萬斤、加以本年額辨銅四百四十三萬餘斤、共六百餘萬斤、查額辨滇銅一百六十六萬三千一百九十九斤零、先經九卿定議、留滇鑄錢解京若滇省錢文到京之後、京局鼓鑄尙可減、卯卽或一時未能運到、兩局通融已足供、丁巳年、鼓鑄之用、應如該署撫顧　所請、於額辨之數、減少數十萬斤、每年以四百萬斤爲率、滇洋兩處各辨二百萬斤、滇銅係本地出產、有數可稽、除本省及黔蜀兩省鼓鑄需銅一百二十萬斤、又除鼓鑄解京錢銅一百六十六萬餘斤外、每年應解銅三十三萬餘斤、交部以足二百萬斤之數所需價脚銀、兩照例撥給、但查安慶江西二省應辨、丁巳年銅斤已據該撫、自戊午年爲始、令滇洋兩處俱照見在定議、分額承辨以昭畫一、如此則洋銅額數較前減少、易于辨解、而京局鼓鑄亦不致貽悞矣、一奏稱、辨銅之官、宜耑委監督海關之道員也、各省委員赴蘇採辨、道遠費重、所領水脚不敷盤（搬カ）費、且每年道府輪辨、初到地方商人之殷實、貧疲既未深悉、隔省之員呼應不靈、每有招商不定、悞致誘脫、雍正十三年、福撫盧　奏請、於蘇州設立銅政道、耑司招商採辨、見奉部行查、議查洋船出口收口、俱由海關查驗、抽稅爲辨銅扼要之地、向委道員管理、今請將江浙海關、卽耑委管關道員監督於該道官銜、加監督某處海關兼辨銅務字樣、江安兩省之銅、令監督江南海關道員招商承辨、浙閩而省之銅、令監督浙江海關道員招商承辨、安徽福建二省、各將應辨銅斤正脚銀兩、預先一年解交蘇杭藩庫貯、發解部水脚銀兩、照例合給、其江西省向亦在蘇辨銅者、令其與湖廣等省耑辨、滇銅不必別設銅政道員、而各省亦毋庸輪年委辨等、語查先經福撫盧　奏請、耑設銅政道員、承辨洋銅案內經臣部議、令江浙等省督撫、將果否有益採辨之處、熟籌詳查、妥議具題、到日再

議在案、合據該署撫奏、稱海關爲辨銅扼要之地、請將管關道員、加以兼管銅務職銜等語、應如該署撫所請、將各省額辨洋銅、交與江浙海關道員、兼辨仍行、

〔天工開物〕東夷銅有托體銀礦內者、入爐燒時、銀結于面、銅沈于下、商船漂入中國、名曰日本銅、其形爲方長板條、

明和二年より（四洋千七百六十五年）天明年間に至るまで寛永錢若干萬貫文を荷蘭國へ送らる（寛政五年禁止）是我邦の銅錢を以て西洋の國用を足すの一端ともいふべし

是等の事その詳なるは溫樹に繫りたれば此に其一端を擧るのみ

元祿元年（安南國正和九年）安南國王より上書して鑄錢の料銅を請ふ

安南國正和（（是は安南の九の字也））年六月十三日の書翰に云安南國王恭書　日本國大國王殿下、（中略）遙聞貴國地產良銅、權知造幣、若此曷不廣鑄以濟其乏乎、所望貴國權時用之、宜布稱錢之令、立一時之圜法、鑄三品之利源、通流本國、營生貿賣、於茲兩國俱得兩利焉云々、

又書に云安南國國王肅書于　日本國長崎鎭守王閣下、（中略）念及本國經費爲助、所寶惟錢、所可嫌者歲月、未能鍛練焉、遙聞貴府之國、地產良銅、勢兼造幣、尤願貴府時中斟酌、財上加工、立九府之圜法、鑄三品之緡錢、通流本國、經商販賣、兩得其利云々、（全文は予が外蕃通書に載せり）

撒帳錢

按に古玉圖譜に漢宮故事云、漢武帝納李夫人、帝與夫人同座百子流蘇帳內、命宮人以金盤盛玉錢寶果、撒帳四隅、帝與夫人以衣裾承接、以邀吉利、錢上皆瑑刻吉利之辭、以後公主出降、奩具中必有撒帳玉錢千枚、といへり

泉志には景龍中、中宗出降、睿宗女荊山公主、特鑄此錢、用以撒帳、勅近臣及修文館學士拾錢、其銀錢則散貯絹中、金錢每十文、卽繫一綵條、學士皆作却扇口其最近御座者、所獲居多、有學士考功員外武平一、既出逢韋巨源蘇味道、各執平一、將在燭下、云員外事僕射省主欲有何取、以手探平一懷、盡而後已、とあり

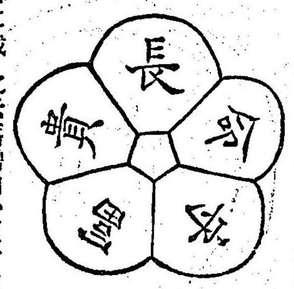
泉志に李孝美曰、頃見此錢於汝海王霖家、銅鑄耳、といへり錢錄撒帳錢を圖して云按唐睿宗女荊山公主出降、鑄金銀錢、撒帳、故董逌謂、李唐撒帳錢、然此則幷以銅爲之、特仿其制度耳、とあれば實に銅錢なり

陔餘叢考に知新錄云、漢京房之女、適翼奉之子房、以其日三煞在門、犯之損尊長、奉以爲不然、以麻豆穀米穰之、則三煞可避、自是以來凡新人進房以麻米撒之、後世撒帳之俗起於此、按此說非也、撒帳實始漢武帝、李夫人初至、帝迎入帳中、預戒宮人、遙撒五色同心花果、帝與夫人以衣裾盛之、云多得子多也、事見戊辰雜抄、唐中宗嫁睿宗公主、鑄撒帳錢重六銖、文曰長命富貴、每十文繫一綵條、今俗婚姻奩具內、多鐫長命富貴等字、亦本於此、と見えたり

寛永錢錄銀錢の部に載する牧野內匠頭姫君を奉迎の時に銀錢口文を紅絲に繫ぎし事も此類なり

唯古玉圖譜のみ撒帳錢を開列す今全錄して好古の人と與にこれを覽んことを欲するのみ

撒帳錢



右一品泉志に載せ之云舊譜曰、徑寸重六銖、肉好背面皆有周郭、其形

洗兒錢

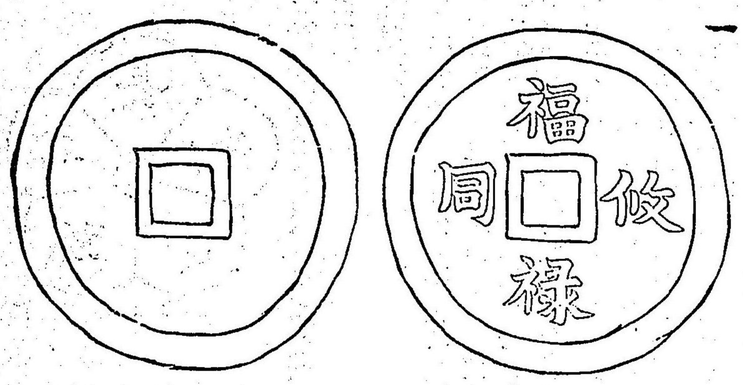
按に源平盛衰記中宮御座の事の條に小松大臣は蒔繪の細大刀鷗尻に佩き給ひ金錢九十九文御枕の上へ置て天を以て父とし地を以て母とすと祈り奉られけり卽ち御臍の緒を切奉りて圍碁手に錢出されたり辨慎負佐是をうつ是又例有事にや

〔古玉圖譜〕に洗兒錢を載て云按開元遺圖、唐宮中每皇子生三日、則賜玉錢犀菓、以爲洗兒之慶、每賜近臣外戚云、卽此錢也、錢文亦皆祝嘏之辭、

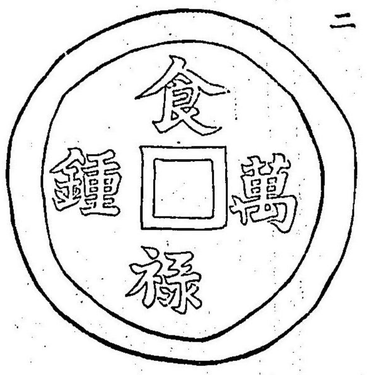
〔容齋四筆〕洗兒金錢、車駕都錢塘以來、皇子在

レ邸、生ニ男及女一、則戚里三衙浙漕京尹、皆有ニ餉獻一、隨即致答、自ニ金幣之外洗兒錢果一動以ニ丁數一合、極ニ其珍巧一、若惣而言レ之、殆不レ可ニ勝算一、莫レ知ニ其事例之所レ起、劉原甫在ニ嘉祐中一因論レ無レ故、疎決云、在外群情皆云、聖意以ニ皇女生一、故施ニ此慶一、恐非ニ王者之令典一也、又聞多作金銀犀象玉石琥珀玳瑁檀香等錢一、及鑄ニ金銀一作ニ花果一、賜ニ予臣下一、自ニ宰相臺諫一、皆受ニ此賜一、無益之費、無名之賞、殆無レ甚ニ於此一、若欲下夸ニ示奢麗一、爲中世俗之觀上、則可矣、非ニ所ニ以軌レ物訓レ儉也、宰相臺諫、以ニ道德一輔レ主、奈何空受ニ此賜一、曾無ニ一言一、遂レ事不レ諫、臣願深執ニ恭儉一、以答ニ上天之貺一、不レ宜下行ニ姑息之恩一、以損中政體上、偉哉劉公之論、其勁功如レ此、歐陽公銘レ墓、畧而不レ書、予爲ニ國史一、亦不レ知レ載ニ於本傳一、比方讀ニ其奏章一、故敢紀レ之、韓偓金鑾密記云、天復二年、大駕在レ岐、皇女生三日、賜ニ洗兒果子金銀錢銀葉坐子金銀誕子一、予謂唐昭宗於ニ是時一尚復講レ此、而在庭無ニ一言一、蓋宮掖相承、欲レ罷不レ能也、愛日齋日抄曰、東坡記、閩人生レ子三日浴レ兒時、家人及賓客皆戴ニ葱錢一、曰、葱使ニ兒聰明一、錢使ニ兒富一、

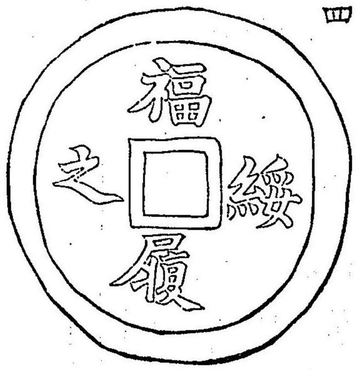
一



二



三



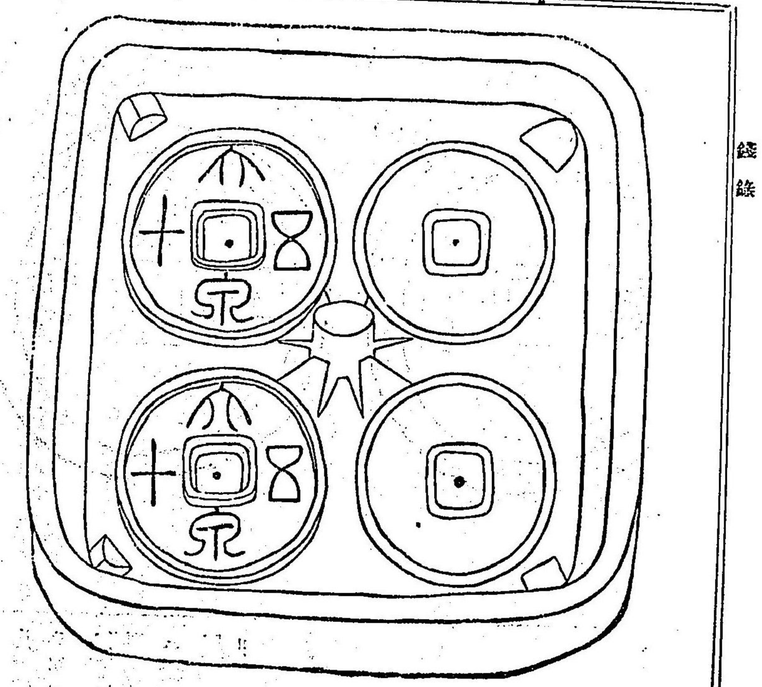
笵錢

凡笵錢に雕笵(ホリタネ)、沙鐵笵(ジャリタネ)、銅笵(タネセン)、ノ三等アリ初善書ヲシテ銘文ヲ書セシメ之ヲ紫金或赤銅(シャクドウスアカ)ニ雕刻ス是ヲ雕笵ト云フ其雕笵ヲ沙ニ覆シテ砂利ヲ以テ鑄トコロ卽砂鐵笵(ジャリタネ)ナリ再ビ砂鐵笵ヲ覆シテ鑄トコロ銅笵(タネセン)、是世ニ云フ種錢(タネセン)ナリ

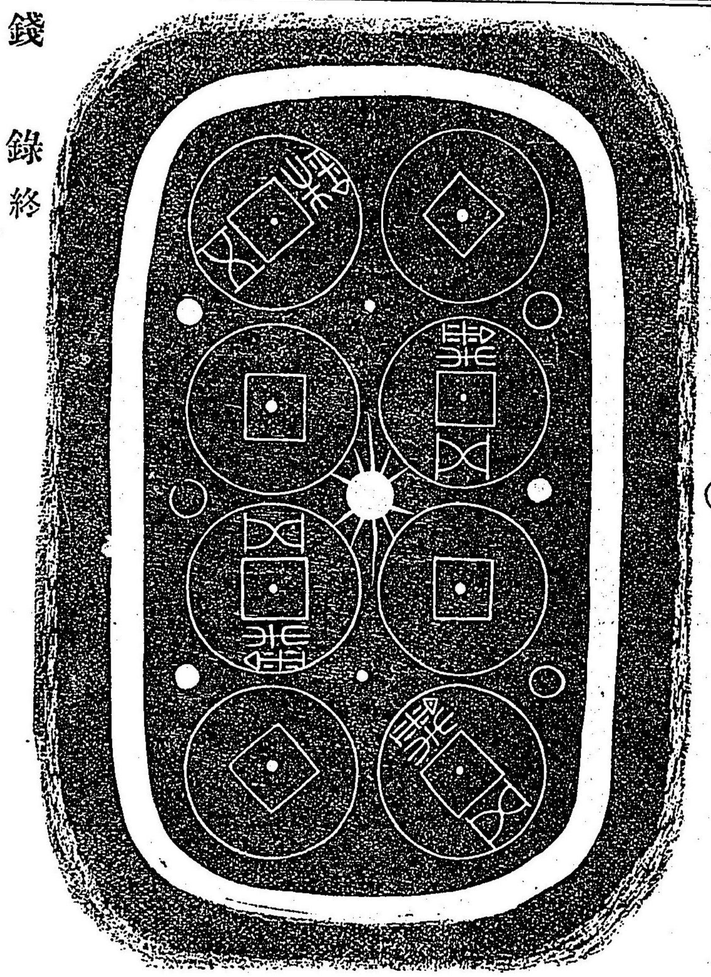
異邦ノ錢笵ハ 按に類聚國史弘仁九年六月に造錢型師一員あり型とは砂形の事なり 此際ト異ナリ

〔曝書亭集〕に跋ニ新莽錢笵一文あり云新莽閏位、特重ニ錢法一、錢凡六品、刀凡二品、布凡十品、既而以ニ剛卯金刀一、合ニ劉氏文一、乃禁レ佩ニ剛卯一、除ニ刀錢一、以ニ大錢小錢二品幷行一、防ニ民盜鑄一、挾ニ銅炭一者入ニ鍾官一、其時鼓鑄多、故至レ今猶有ニ存者一、若夫錢笵竊疑排纂、譜錄圖志諸家或未ニ之見一也、歲在ニ丁亥一夏、觀ニ于衍聖上舍小葫蘆山書屋一、笵形正方、中央輪廓四、其二有レ文曰ニ大泉五十一、偏體青綠、詩家所レ云活碧應幾近之上舍得レ之、案頭古銅器雖レ多、當ニ以レ此居ニ第一一矣、

其圖ハ西清古鑑因宜堂法帖ニ載ス左ニ開列シテ異聞ヲ廣ム



〔西清古鑑〕云莽錢笵、左列錢文、二曰大泉五十、以是知爲莽物也、前此圖志未收錄、惟我朝秀水朱彝尊曝書亭集有之、攷其所記、與此蓋無纖毫之差、命之曰錢笵者、範金必先合土眞笵、於此摶土印笵上、覆之則錢方圓皆爲凹文、然後煎銅液、澆其上、則錢爲凸文、而錢文以成、故謂之笵、此品不見於他書、彝尊之說、復未詳其用、爰圖於莽諸錢之後、幷識之如此、



〔因宜堂法帖〕清の張曾太云、按洪氏錢譜、五銖錢、自漢迄隋及龜茲疎勒二國、皆鑄之、品數最多、篆文各別、隋書食貨志曰、梁武帝別鑄五銖錢、除其內郭、謂之女錢、與此合錢笵、前人未經道、及朱竹陀始定其名、今盛澤王氏寶而藏之、

近藤正齋全集第三大尾

黑川眞道
山田安榮
中山速男　校

明治三十九年十月二十日印刷
明治三十九年十月廿五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
市島謙吉

編輯兼發行者

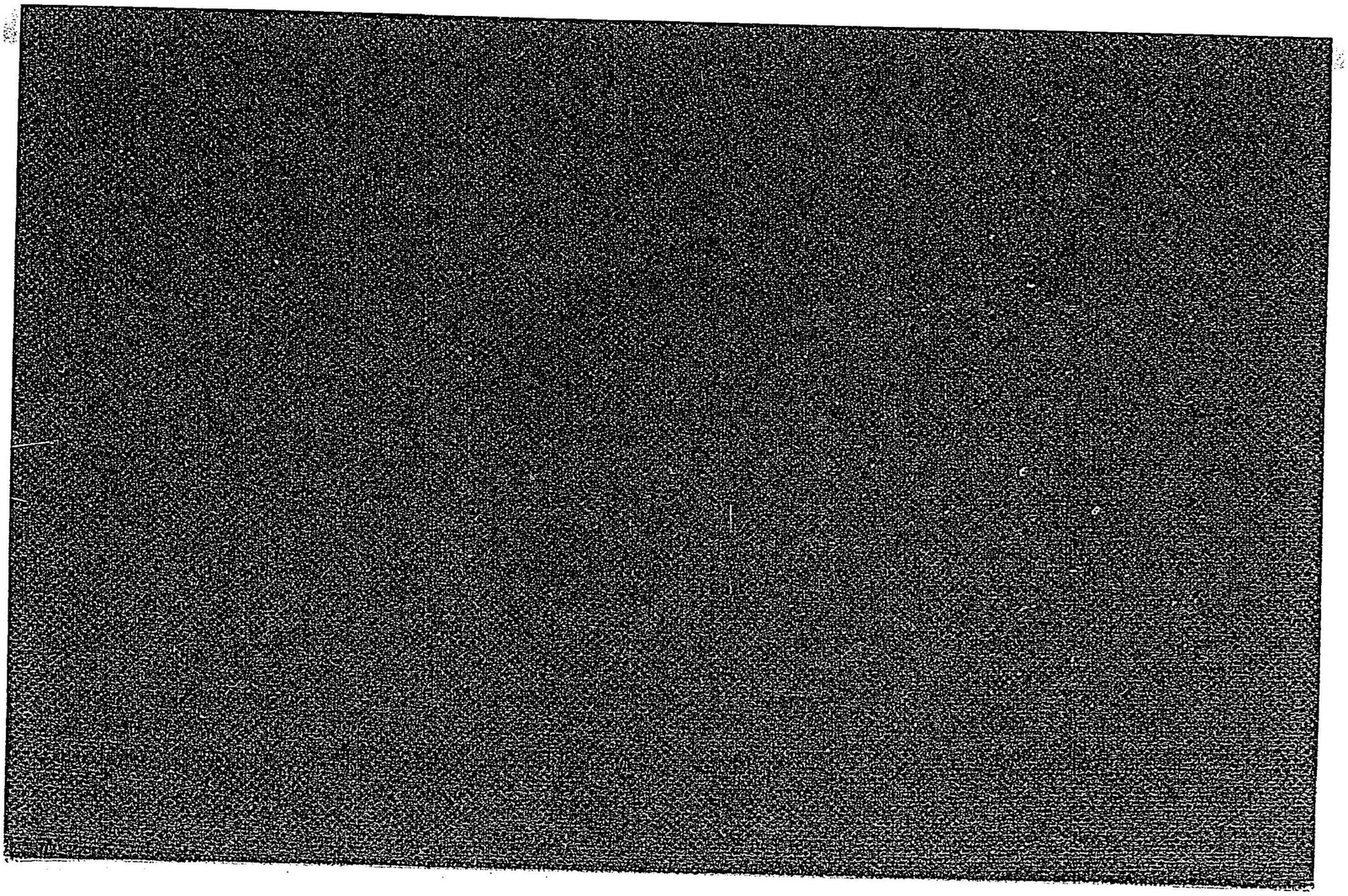
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
本間季男

印刷者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
內外印刷株式會社分工場

印刷所

ニトゲD3



081.8
Ko595k